

# 小牧北遺跡発掘調査報告

2007(平成19)年3月

三重県埋蔵文化財センター









調査区遠景（南から）

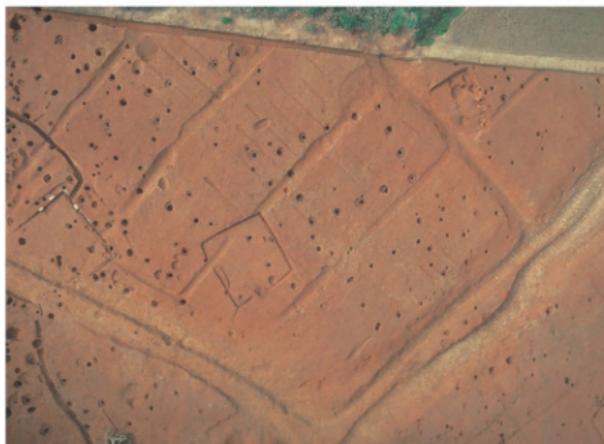


調査区遠景（上空から）





調査区南部分（上空から）



調査区中央部分（上空から）





方形周溝墓群と調査状況（北から）



S×135（北から）





SH46 (東から)



SK15 (西から)



## 序

埋蔵文化財は、それぞれの地域における大切な過去の遺産であり、現代に生きる私たちの責務としてこれを積極的に保護し後世に伝えていくとともに、更なる文化的向上のための礎とすべきものであります。しかし、一方では私たちの生活が便利で豊かなものになっていく過程で、それらの多くの埋蔵文化財はその犠牲となってきたのも否定できない事実です。そこで、現状保存が困難であると考えられる遺跡については、発掘調査を実施し記録の保存を図ってきているところであります。

ここに報告いたしますのは、平成13年度国道365号員弁バイパス国補道路改築事業に伴って発掘調査を実施したものであります。この発掘調査成果が、より多くの方面で活用されることを切望するものであります。

なお、調査にあたっては、地元の方々をはじめ、四日市市教育委員会、および関係各位から多大なるご協力と、温かいご配慮を頂くことができました。文末とはなりましたが、各位の誠意あるご対応に、心から御礼申し上げます。

2007年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 吉水康夫

## 例　　言

1. 本書は、三重県四日市市小牧町字小牧北に所在する小牧北遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本遺跡の調査は、平成13年度国道365号員弁バイパス国補道路改築事業に伴い、三重県教育委員会が三重県県土整備部道路整備課から経費の執行委任を受けて実施した。(旧称のまま)
3. 調査および整理は次の体制により実施した。(旧称のまま)  
調査主体 三重県教育委員会  
調査担当 三重県埋蔵文化財センター　調査第一課  
　　主事 小濱 学  
　　技師 金子 智子  
面 積 5,900 m<sup>2</sup>  
期 間 平成13年9月3日～平成14年1月21日

4. 調査に当たっては、地元の方々をはじめ、三重県県土整備部道路整備課・北勢県民局建設部道路整備課・四日市市教育委員会からの協力を得た(旧称のまま)。
5. 本書の執筆・編集は小濱学・伊藤文彦・野島美沙子が行い、執筆分担については、目次に示したほか文末にも記入した。なお、室内整理作業、図面作成等は調査担当者と情報普及グループが行った。本書の作成に当り、深井明比古氏からご教示をいただいた。
6. 当地は旧国土座標第VI系に属し、本書の方位はこの座標北を用いた。なお、磁針方位は、西偏6度(平成4年、国土地理院)である。
7. 本書で報告した記録・遺物等は三重県埋蔵文化財センターで保管している。

## 目 次

I	前 言	(小濱 学・野薙美沙子)	1
II	位置と環境	(伊藤文彦)	4
III	遺 構	(小濱 学)	7
IV	遺 物	(伊藤文彦)	44
V	結 語	(小濱 学・伊藤文彦)	57

## 挿図目次

I 前言	
第1図 調査区位置図	2
第2図 調査区地区割図	3
II 位置と環境	
第3図 遺跡位置図	5
第4図 遺跡周辺図	5
III 道構	
第5図 調査区土層断面図①	7
第6図 調査区土層断面図②	8
第7図 道構平面図①	9
第8図 道構平面図②	10
第9図 道構平面図③	11
第10図 SX1・5・127・135平面図・断面図	12
第11図 SX2平面図・断面図	13
第12図 SB36・41平面図・断面図	14
第13図 SB95・99平面図・断面図	15
第14図 SB100・121・101・102平面図・断面図	16
第15図 SB103・104・105・106平面図・断面図	17
第16図 SB108・109・110・111平面図・断面図	18
第17図 SB112・113・114・115・116平面図・断面図	19
第18図 SB119・120・125平面図・断面図	21
第19図 SH25・42平面図・断面図	22
第20図 SH28・32平面図・断面図	23
第21図 SH35平面図・断面図	24
第22図 SH43・SK44平面図・断面図	25
第23図 SH45平面図・断面図	26
第24図 SH46・47平面図・断面図	27
第25図 SH64平面図・断面図	28
第26図 SH85・89平面図・断面図	29
第27図 SH91・SK96平面図・断面図	30
第28図 SH98平面図・断面図	31
第29図 SH107平面図・断面図	32
第30図 SH136平面図・断面図	33
第31図 SH139平面図・断面図	34
第32図 SK90平面図・断面図	35
第33図 SK15・34・38平面図・断面図	36
IV 遺物	
第34図 SX5出土遺物実測図	44
第35図 SX1・2出土遺物実測図	45
第36図 SX127・135出土遺物実測図	46
第37図 SB36・100・101出土遺物実測図	47
第38図 SH26・28・32・35・42・43・46・47・52 出土遺物実測図	48
第39図 SH64・91・98・126・139出土遺物実測図	49
第40図 SK15・34・72・86・88・134出土遺物実測図	50
第41図 SD9・18・131・ピット・包含層出土遺物実測図	51

## 写真図版目次

写真図版1 調査区遠景	74
写真図版2 調査区南部分・中央部分	75
写真図版3 方形周溝墓群と調査状況・SX135	76
写真図版4 SH46・SK15	77
写真図版1 SZ5遺物出土状況	61
写真図版2 SZ1遺物出土状況	62
写真図版3 SX127土器棺・SX127遺物出土状況	63
写真図版4 SX135遺物出土状況・SX2完掘状況	64
写真図版5 SX2遺物出土状況	65
写真図版6 SD133完掘状況・SX2・133・143完掘状況	66
写真図版7 SB36完掘状況・SB41完掘状況	67
写真図版8 SB95・99完掘状況	68
写真図版9 SB101完掘状況・SB102完掘状況	69
写真図版10 SB103完掘状況・SB104完掘状況	70
写真図版11 SB105完掘状況・SB106完掘状況	71
写真図版12 SB108完掘状況・SB109完掘状況	72
写真図版13 SB110完掘状況・SB111完掘状況	73
写真図版14 SB113完掘状況・SB114完掘状況	74
写真図版15 SB119完掘状況・SB125完掘状況	75
写真図版16 SH25・26・42完掘状況・SH28完掘状況	76
写真図版17 SH28カマド・SH32完掘状況	77
写真図版18 SH32カマド・SH35完掘状況	78
写真図版19 SH43・SK44完掘状況・SH46完掘状況	79
写真図版20 SH47完掘状況・SH64完掘状況	80
写真図版21 SH85完掘状況・SH91遺物出土状況	81
写真図版22 SH107完掘状況・SH136完掘状況	82
写真図版23 SK137・139・140完掘状況・SK88完掘状況	83
写真図版24 SK96遺物出土状況・SK134完掘状況	84
写真図版25 SK15遺物出土状況・SK34遺物出土状況	85
写真図版26 遺物写真①	86
写真図版27 遺物写真②	87
写真図版28 遺物写真③	88
写真図版29 遺物写真④	89
写真図版30 遺物写真⑤	90

## 表目次

III 道構	
第1表 道構一覧表①	38
第2表 道構一覧表②	39
第3表 道構一覧表③	40
第4表 道構一覧表④	41
第5表 道構一覧表⑤	42
第6表 道構一覧表⑥	43
IV 遺物	
第7表 出土遺物観察表①	52
第8表 出土遺物観察表②	53
第9表 出土遺物観察表③	54
第10表 出土遺物観察表④	55
第11表 出土遺物観察表⑤	56

# I 前 言

## 1 調査の契機

今回の発掘調査は、平成13年度国道365号員弁バイパス国補道路改築事業に伴い実施した。小牧北遺跡は、四日市市小牧町に位置し、遺跡番号235の周知の遺跡である。小牧北遺跡が存在する道路建設予定地沿いには、平成11年度に発掘調査された門ノ上遺跡、門ノ上古墳群、居林古墳群、北山城跡などがみられる。

現地発掘調査に先立ち、平成11年度に範囲確認調査を実施した。その結果、遺構及び遺物の存在が確認された。これを受けて、県土整備部と文化財保護の協議を重ねてきたが、現状保存が困難なことにより、5,900m<sup>2</sup>について本調査を実施し、記録保存することになった。なお、発掘調査の体制については、民間調査機関（安西工業株式会社）に委託し、県調査員の指示のもとに実施する方式を導入し、業務の円滑化を図った。

## 2 調査経過

### （1）調査経過

調査期間は平成13年9月3日から平成14年1月21日である。重機による表土除去の後、直下に縄文時代の土器棺墓、弥生時代の方形周溝墓、古代の掘立柱建物、堅穴住居、土器焼成坑など、多くの遺構を確認することができた。縄文時代から中世にわたる人々の生活の跡が認められ、当該地域の歴史を解明するうえで大きな成果をあげることができた。

炎天下や寒風にもめげず、現地作業にあたっては、以下の方々の協力によって、無事に調査を終えることができた。芳名を記し心から感謝の念を表したい。

荒木紀夫、井澤孝文、伊藤しす子、伊藤平雄、稻垣美奈子、井上佳和、岩田十三夫、大川克弘、大谷武司、加藤恵子、加藤省三、加藤徹也、加藤 稔、亀田勝士、小林ひさ子、小鯨幸雄、齊藤清枝、齊藤澄江、齊藤ひろみ、齊藤満雄、齊藤ゆり子、坂口秀郎、坂本喜美、成田君子、鈴木はづみ、田浦トメ子、田浦治雄、城 佳男、

中嶋俊隆、中田成子、中田 稔、長棟たゑ子、中村 幸、中村清六、中村善吉、西村和江、西村年男、野呂明男、長谷川清、日置四一、日神年治、日沖ヒサ代、福田和夫、福田輝男、福田 弘、福田義久、藤原武好、堀木 勉、増田久郎、松下一彦、水谷 豊、村上のり子、村木秀和、森下愛子、森 節子、山下敏男、山田 尚、山本文男（五十音順、敬称略）

### （2）調査日誌（抄）

平成13(2001)年

9月 4日 重機による表土除去開始。

9月 11日 A地区遺構検出開始。

9月 17日 S X 1（土器棺）を検出。

9月 18日 土器焼成坑検出。

方形周溝墓 S X 2 挖削開始。弥生土器出土。

9月 21日 表土除去終了。

山梨学院大学椎名教授來訪。

9月 26日 S H 35において、土留めと思われる人頭大の河原石列を確認。

10月 3日 S H 45 検出。壁溝に沿って並べられた石を確認。工房跡か。

10月 5日 S K 15 挖削。土器焼成坑であることを確認。

10月 11日 S H 35 の壁溝に板を差し込んだ可能性のある溝を確認。

S X 5 を半割り後、写真撮影。縄文晩期と判断する。

10月 19日 B地区遺構検出開始。

10月 25日 S X 2 方形周溝墓、写真撮影。

10月 30日 B地区遺構検出終了。

11月 26日 B地区遺構掘削終了。

11月 27日 A地区清掃、写真撮影。

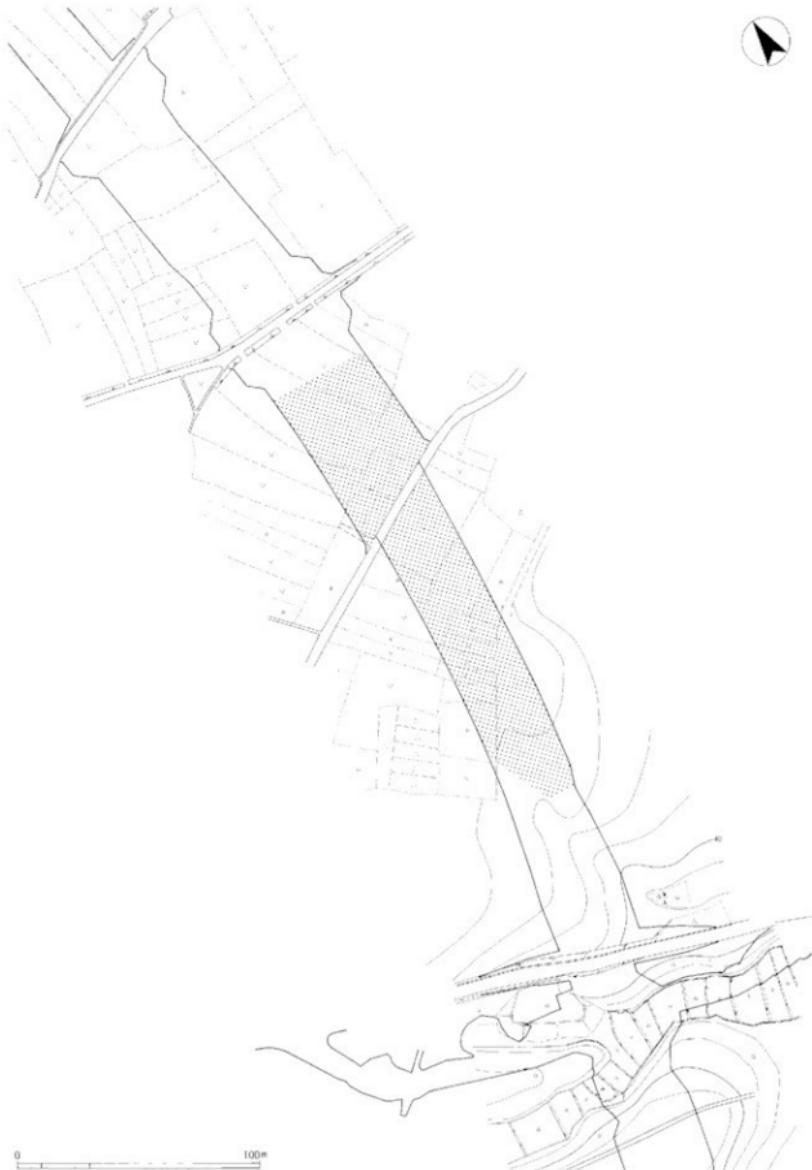
11月 28日 ラジコンヘリによる空中写真撮影。

11月 29日 B地区、平面実測（1/20）。

11月 30日 拡張区の表土除去作業開始。

12月 3日 A地区、平面実測。

12月 5日 拡張区の遺構検出開始。



第1図 調査区位置図 (1 : 2,000)



12月 9日 現地説明会。約140名の参加。

12月10日 拡張区において方形周溝墓検出。

12月14日 拡張区遺構掘削開始。

平成14(2002)年

1月 7日 拡張区、S X 135の土器取上げ。

1月 9日 拡張区、平面実測後、埋戻し開始。

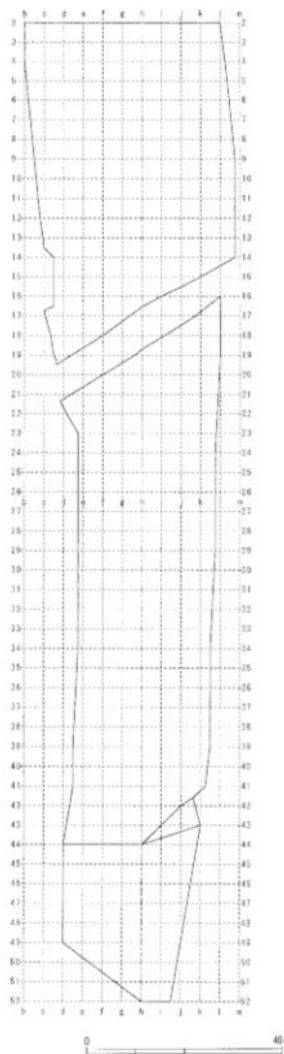
1月12日 片付け、清掃。

### 3 文化財保護法に関する諸通知

文化財保護法（以下、法）等にかかる諸通知は以下のとおり行っている。（法の条文は当時のまま）

- ・法第57条の3 第1項（文化庁長官宛）  
平成13年7月31日付、道整第152号（県知事通知）
- ・法第98条の2 第1項（文化庁長官宛）  
平成12年3月28日付、教生第1711号（県教育長通知）
- ・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（四日市市西警察署宛）  
平成14年3月28日付、教生第8-20号（県教育長通知）

(小瀬 学・野島美沙子)



第2図 調査区地区割図（1：1,000）

## II 位置と環境

### 1 地理的環境

小牧北遺跡（1）は三重県北部、四日市市に所在する。三重県北部の地勢は、西に標高1,000mをこえる鈴鹿山脈が南北に連なり、東に伊勢平野と伊勢湾が広がる西高東低の様相を呈する。鈴鹿山脈からは員弁川、朝明川、海蔵川、内部川、鈴鹿川などの河川が台地・丘陵を開析しながら概ね東流し、沖積低地を形成して伊勢湾に注ぐ。河川が東流するため、台地・丘陵も東西に広がる地形である。小牧北遺跡は四日市市小牧町の東部、朝明川の左岸、朝明丘陵上に位置する。標高は約50mで、朝明川の形成している冲積平野との比高差は約17mである。現状は畑地および荒地であった。

### 2 歴史的環境

#### （1）旧石器時代

三重県北部における旧石器時代の遺跡は鈴鹿川流域に西ノ岡A遺跡をはじめ集中した分布がみられる。一方、小牧北遺跡の立地する朝明川流域では野呂田遺跡（2）において旧石器時代に属する可能性のある石器片が採集されているものの、確実な当該時期の遺跡は今のところ確認されていない。

#### （2）縄文時代

朝明川の中流域において良好な縄文時代の遺跡は今のところ知られていない。縄文土器が認められている遺跡としては、西ヶ広遺跡（4）や野呂田遺跡が挙げられる。西ヶ広遺跡においては土坑から比較的まとまった縄文時代中期後葉の土器が出土している。また野呂田遺跡においては石鏸、石鏟未製品、石鍬、削器などが採集されており、石材から縄文時代の遺物であることが推定されている。しかしいずれにしても朝明川中流域に縄文時代の遺跡分布は希薄であって、人間集団の生活の場として本格的には定着していなかったと考えて良いのだろう。<sup>③</sup>

#### （3）弥生時代

弥生時代になると、朝明川中流域左岸でも、比較的規模の大きい集落が見られるようになる。丸岡遺

跡（3）では試掘調査が行われ、遺構は明確ではないものの中期の土器が検出されていると報告されている。朝明川左岸でもやや下流に近い苑上遺跡においては、中期の大型堅穴住居を含む120基の堅穴住居、独立棟持柱建物4棟を含む掘立柱建物33棟が確認されている。<sup>④</sup>西ヶ広遺跡においては後期の堅穴住居が23棟検出されており、いずれも方形プランに主柱穴が4本、南側の壁面中央に貯蔵穴を備える画一的な構造を持っていたとされる。また平均一辻5～6mの規模の堅穴住居が多い中で一辻10mに達する大型住居が検出されており、集落内の集会など公的な建物に利用されたものと考えられている。弥生時代後期の集落の様相を具体的に示す事例である。

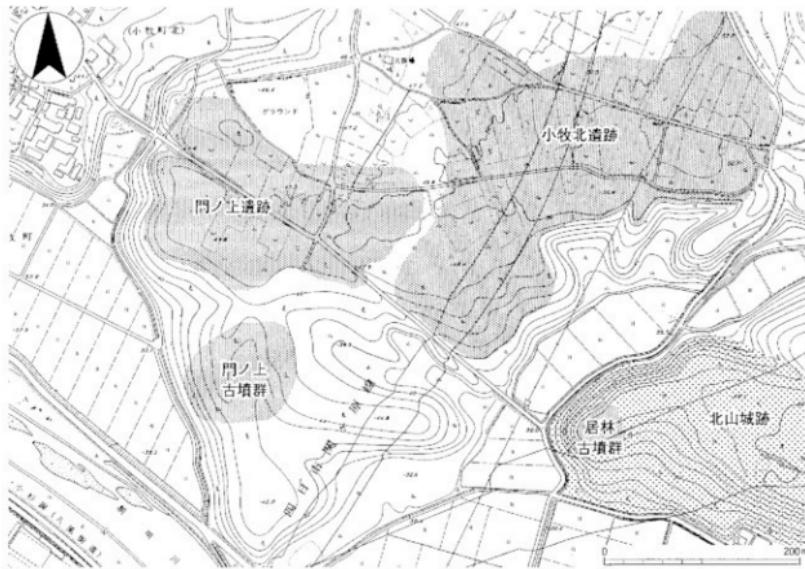
#### （4）古墳時代

古墳時代前期から中期にかけての遺跡については不明な点が多い。朝明丘陵の小牧北遺跡周辺では、古墳時代後期に入つて門ノ上古墳群（5）、若宮古墳（6）、筆ヶ崎古墳群（7）、居林古墳群（8）などが営まれるようになる。門ノ上古墳群は6基の円墳からなる。これまでに発掘調査は行われていないが、横穴式石室の存在が想定されている。若宮古墳は「埴栗連」の墓と地元で伝承されていた古墳で、直径約14.4m、高さ約2.4mの規模を持つ。明治15年に発掘が行われ、横穴式石室から金環や須恵器が出土したという。現在は若宮古墳のみが残るが、昭和初期までは周辺に複数の古墳が存在したらしく。筆ヶ崎古墳群は8基の円墳からなる。各古墳はいずれも未調査であるが、埋葬主体部は小形の横穴式石室が想定されている。居林古墳群は2基の円墳からなる。一号墳は直径12m、高さ1m、二号墳は直径8m、高さ0.8mと小形である。内部主体、出土遺物などは不明である。いずれも古墳時代後期の古墳であると考えて良いだろう。朝明丘陵に展開する古墳時代の集落としては西ヶ広遺跡が挙げられる。この遺跡では古墳時代後期の堅穴住居が14棟、掘立柱建物2棟などが検出されている。このほか特徴的な遺物としてフイゴ羽口が10点出土しており、この集落では金属器生産が行われていたことを示唆する。



第3図 遺跡位置図 (1 : 50,000)

国土地理院『植野、桑名』(1 : 25,000) から



第4図 遺跡周辺図 (1 : 5,000)

## (5) 古代以降

律令期、朝明川流域には朝明郡が置かれた。久留  
倍遺跡は朝明川南岸の丘陵東端に展開する遺跡で、  
八脚門と掘立柱列に囲まれた正殿・両脇殿等の掘立  
柱建物が東面して「コ」字形に配置される7世紀末  
頃の政府跡や、区画溝で囲まれた純柱建物を中心には  
構成された正倉院跡が検出されるなど旧朝明郡における郡衙跡に比定されている。<sup>⑤</sup>一方朝明川北岸の朝  
明丘陵において、律令期の集落の様相が明らかにな  
つている遺跡は多くない。西ヶ広遺跡では、大型の  
底付建物を含む48棟に及ぶ掘立柱建物が確認されて  
いるほか、陶瓦も出土しているなど官衙的様相を示  
す。東員町西山遺跡(9)、新野遺跡(10)は古墳時  
代以降平安時代まで継続する集落で、フイゴ羽口や  
鉄滓が出土しており、製鉄を行う集団の存在が推測  
されている。<sup>⑥</sup>このほか、丸岡遺跡、野呂田遺跡、大  
丸遺跡(12)、的場遺跡(13)、千栗B遺跡(14)、  
中野山遺跡(15)、北山A遺跡(16)、北山B遺跡  
(17)などで当該期の遺物が採集されており、集落  
を形成していたと思われる。

朝明丘陵において平安時代以降の明確な遺構は、  
ほとんど確認されていない。小牧北遺跡の西側に位  
置する門ノ上遺跡(18)において平安時代の土師器  
焼成坑が検出されている。<sup>⑦</sup>このほか野呂田遺跡で遺  
物が採集されている。丘陵地での遺跡の分布が希薄  
になっていることが伺える。

中世城館については、朝明川流域に比較的良好な  
状態で遺存する城館跡が多い。小牧北遺跡の周辺だけ  
でも市場城跡(23)や保々西城跡(24)、北山城  
跡(25)などがあり、いずれも比較的良好に土塁が  
確認できる。

(伊藤文彦)

### 〔註〕

①この項を記述するに当たっては、基本的に以下の文献を  
参考にした。

三重県『三重県史 資料編 考古Ⅰ』(2005年)。

四日市市『四日市市史 第二巻 史料編 考古Ⅰ』  
(1988年)。

四日市市『四日市市史 第三巻 史料編 考古Ⅱ』  
(1993年)。

②日本道路公團名古屋支社・三重県教育委員会「西ヶ広遺

跡」(『日本道路公團東名阪道路埋蔵文化財調査報告』  
1970年)。

③穂積裕昌「第2章位臯と環境」(『菟上遺跡発掘調査報告』  
三重県埋蔵文化財センター、2005年)。

④三重県埋蔵文化財センター『菟上遺跡発掘調査報告』  
(2005年)。

⑤四日市市教育委員会『一般国道北勢バイパス埋蔵文化財  
発掘調査概報』(2003年)。

⑥三重県教育委員会『新野遺跡発掘調査報告』(1972年)。

⑦三重県埋蔵文化財センター『門ノ上遺跡発掘調査報告』  
(2000年)。

### III 遺構

#### はじめに

遺構の詳細については、第1～6表に譲りたいと思う。また、例言でも述べたが、座標系については旧座標となっている。新測地系への対応については、以下の通りである。第7～9図に掲載している数値である。

<①>旧座標

X = -105, 650

Y = 53, 050

<②>新座標

X = -105, 303, 9826

Y = 52, 787, 9931

<②>旧座標

X = -105, 750

Y = 53, 050

<②>新座標

X = -105, 403, 9810

Y = 52, 787, 9910

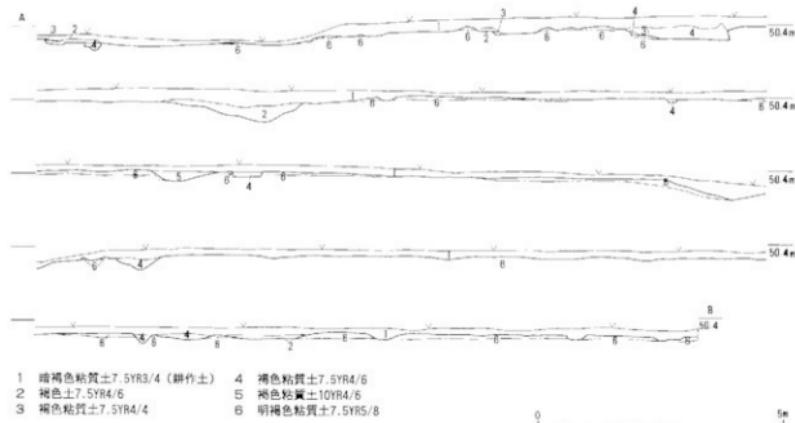
#### 1 基本層序

遺跡の現況としては、畠地、荒れ地であった。朝明川に向かって緩やかに下っていく斜面上に立地している。基本的には、上から表土（暗褐色粘質土・7.5YR3/4）、遺構検出面（明褐色粘質土・7.5YR5/8）となる。表土の直下が遺構検出面となる。地元住民の聞き取りにより、1950年代に当遺跡周辺で農地開拓が行われたことが判明している。そのことからも、遺跡自体が削り取られたものと考えられ、その事実を追認できる結果といえよう。

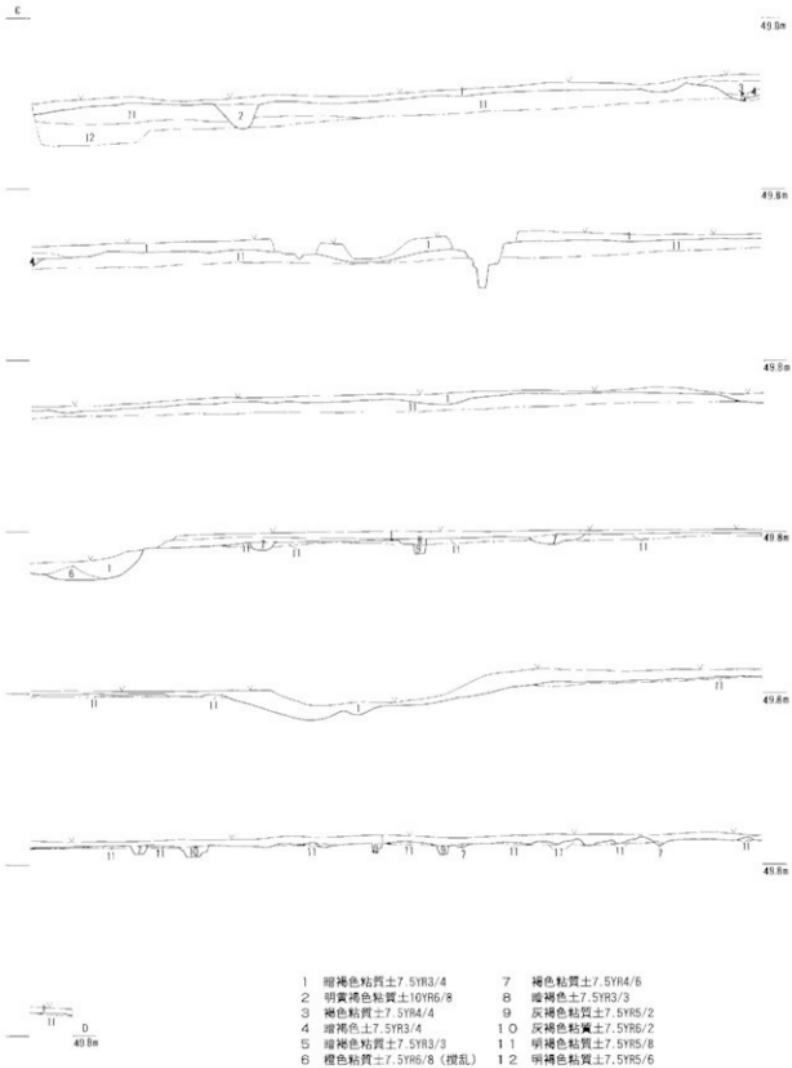
#### 2 縄文時代の遺構

##### <土器棺墓>

S X 5 径0.5m程度のはぼ円形の掘り形に、縄文土器深鉢が斜位に埋設されていた。口縁部から体部にかけての半分ほどが欠失していた。後世の削平を受けたものと思われる。縄文時代晩期、突帯文期のものと考えられる。



第5図 調査区土層断面図① (1 : 100)



第6図 調査区土層断面図② (1 : 100)



第7図 調査区平面図① (1 : 400)



第8図 調査区平面図② (1 : 400)

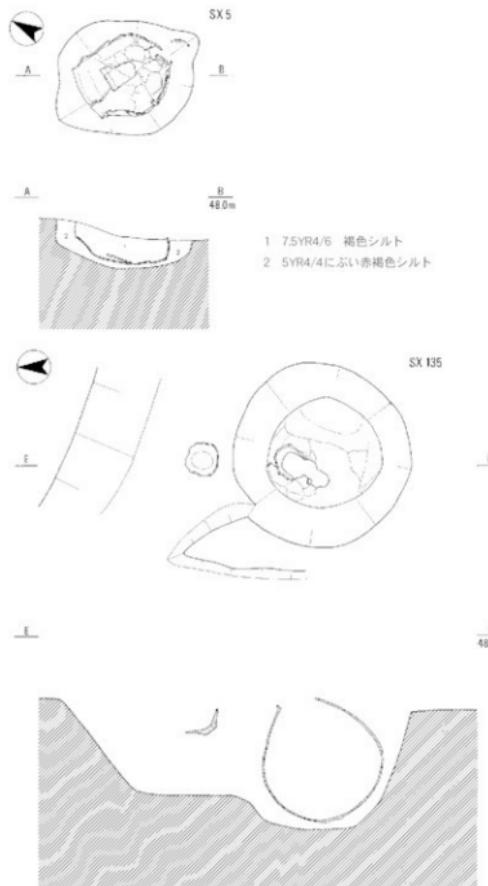


第9図 調査区平面図③ (1 : 400)

### 3 弥生時代の遺構

#### <土器棺墓>

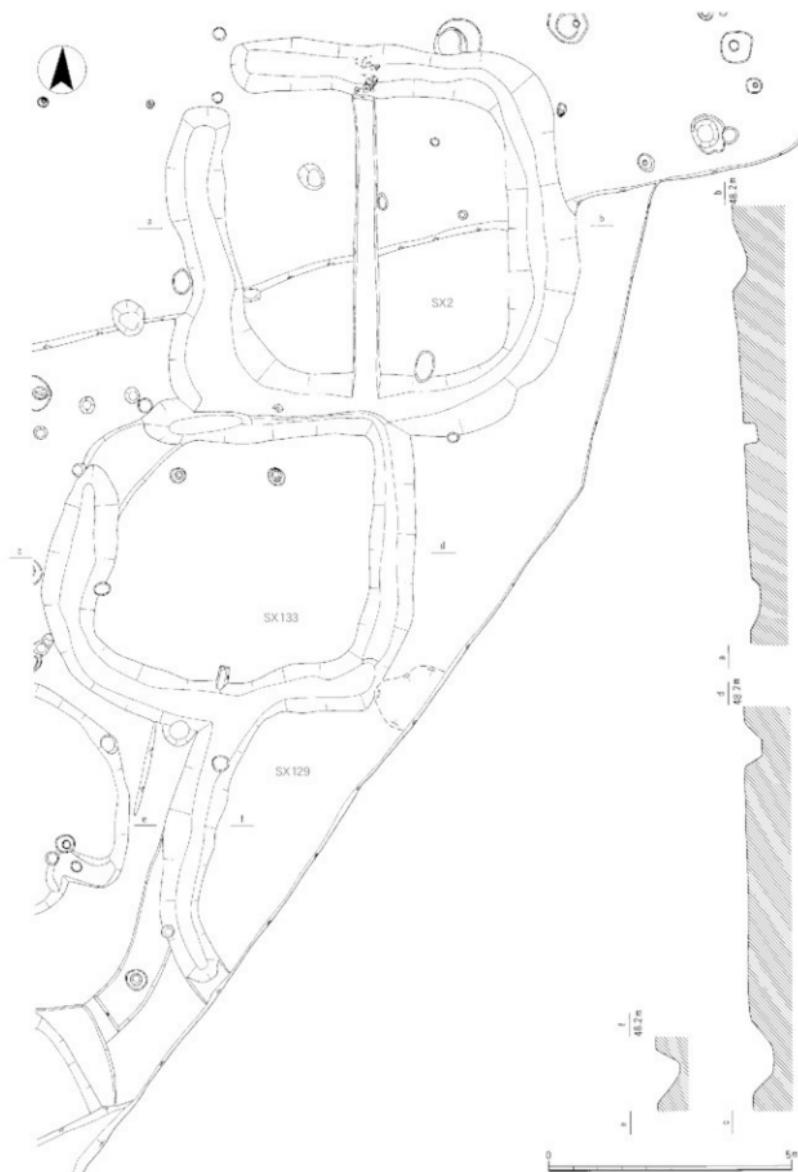
S X 1 径0.5m程度のほぼ円形の掘り形に、弥生土器壺が斜位に0.25mほど埋設されていた。土器棺墓といえよう。口縁部がなく、体部上半部が、土圧または後世擾乱などを受けたのか、上からつぶれたかのような出土状況であった。土器については弥生時代後期前半期のものであろうか。



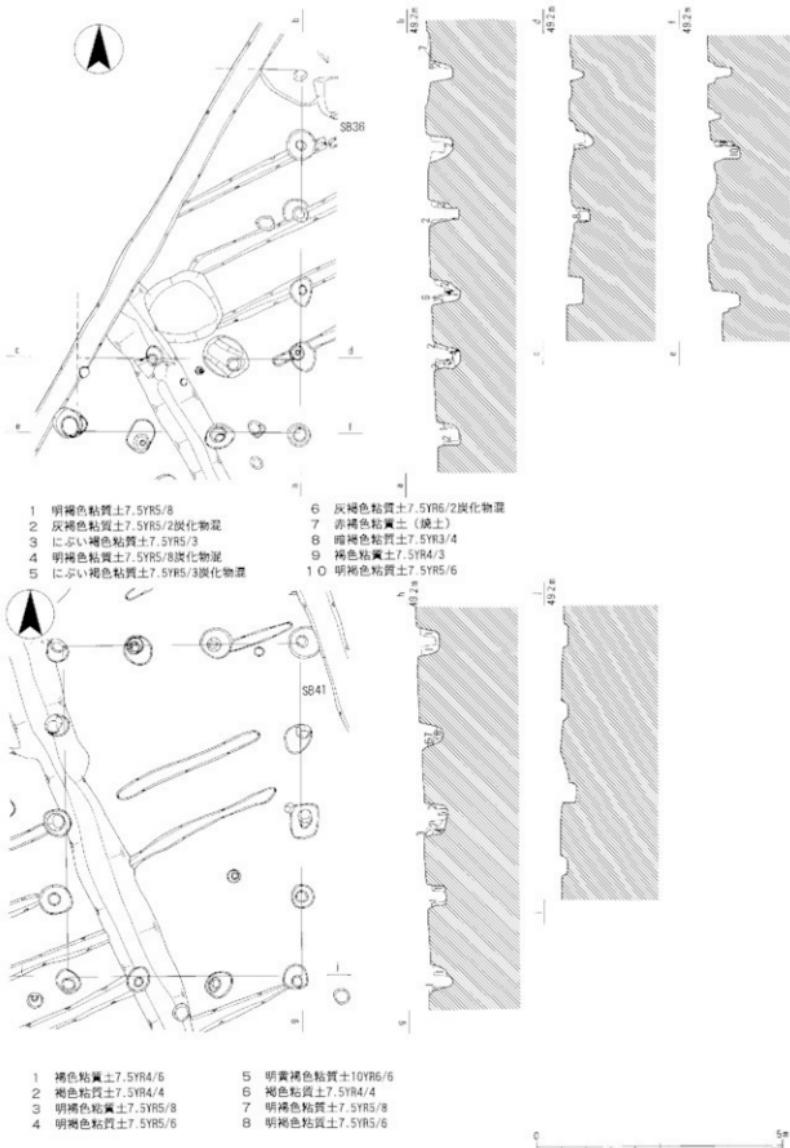
S X 127 長軸3.7m、短軸3.4m、深さ0.22mの楕円形の掘り形に、弥生土器壺が斜位に埋設されていた土器棺墓である。土器については弥生時代後期前半期のものであろうか。

S X 135 長軸0.73m、短軸0.73m、深さ0.48mの円形の掘り形に、大型の弥生土器壺が正位に埋設されていた土器棺墓である。方形周溝墓の周溝と重複している。土器については弥生時代後期前半期のものであろうか。

第10図 SX 1,5,127,135平面図・断面図 (1 : 20)



第11図 SX2平面図断面図 (1 : 100)



第12図 SB36・41平面図・断面図 (1 : 100)

〈方形周溝墓〉

S X 2 一つの隅が途切れている形状の方形周溝墓である。周溝は幅1.1~1.4m、深さ1.2~1.7mの規模があった。周溝の内側は5.5mのほぼ正方形で盛土、主体部は残存していない。方位はN 2.0° Wである。<sup>③</sup> 周溝から弥生時代後期前半の壺、サスカイトの剥片の出土を確認した。

S X 129 一つの隅が途切れている形状の方形周溝墓である。周溝は幅0.5~0.6m、深さ0.4mの規模があった。周溝の一つがS X 133の周溝と重複していた。周溝の内側は6.1mで調査区外に伸びる。周溝の内側の形はほぼ正方形になると思われる。盛土、主体部については確認できなかった。周溝から弥生土器片が少量出土した。後期に属するものであ

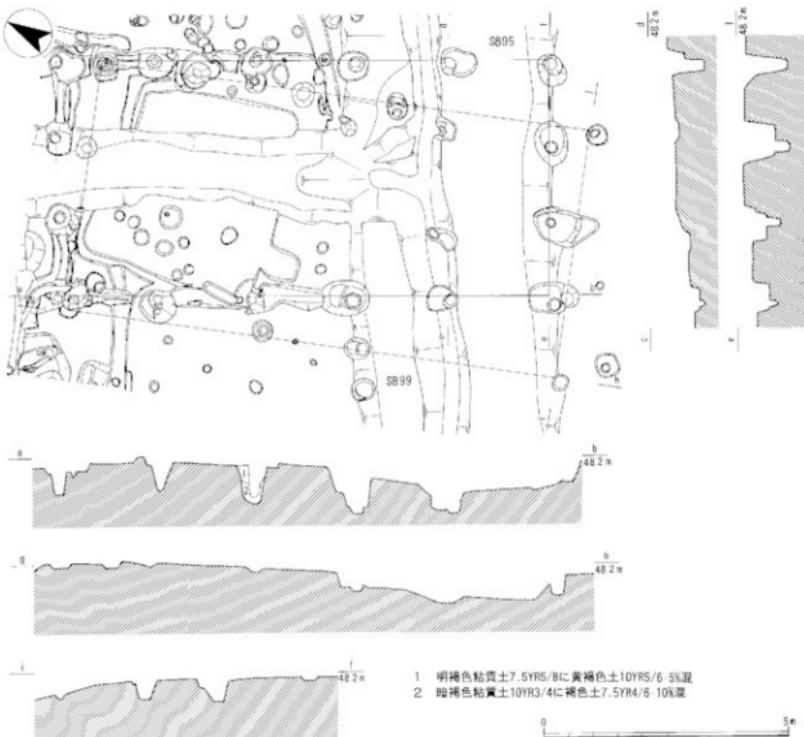
る。

S X 133 一つの隅が途切れている形状の方形周溝墓である。周溝は幅0.86~1.6m、深さ0.25~0.4mの規模があった。周溝の内側は東西5.5m、南北5.0mであった。周溝の内側の形はほぼ正方形になると思われる。盛土、主体部については確認できなかった。周溝からは土器等の遺物は確認できなかつた。弥生時代後期に属するものであろうか。

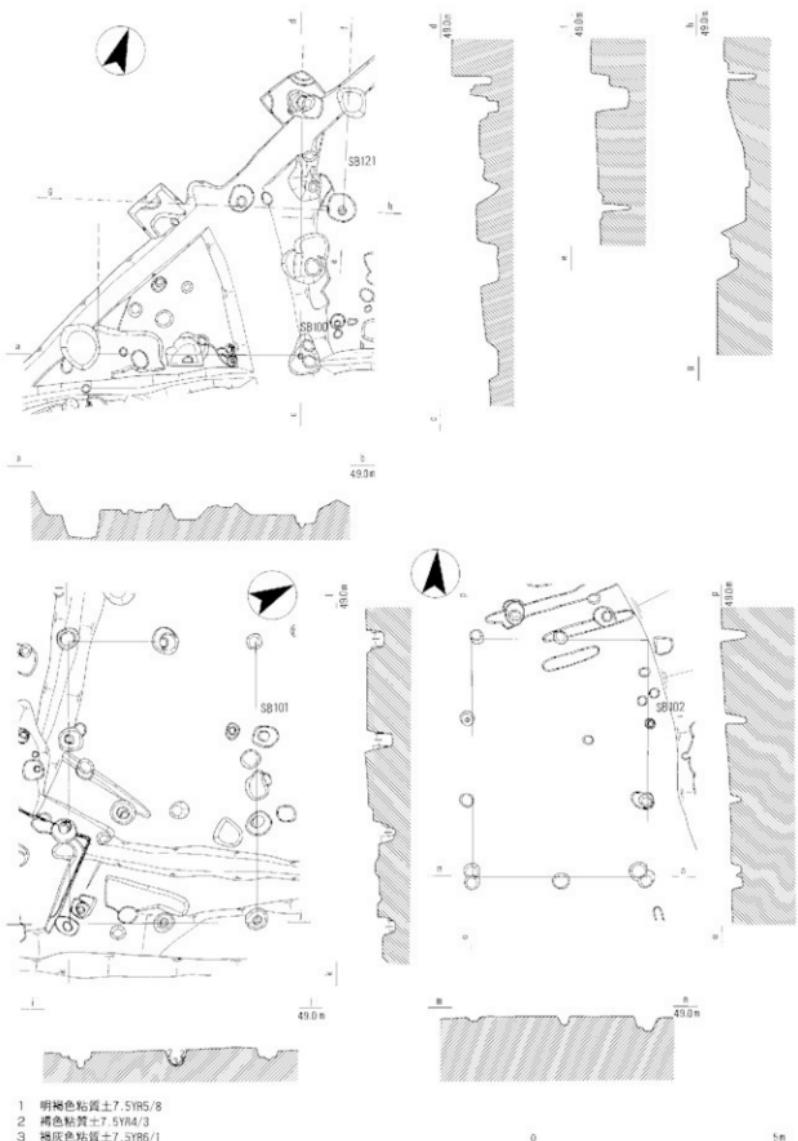
#### 4 古代の遺構

〈掘立柱建物〉

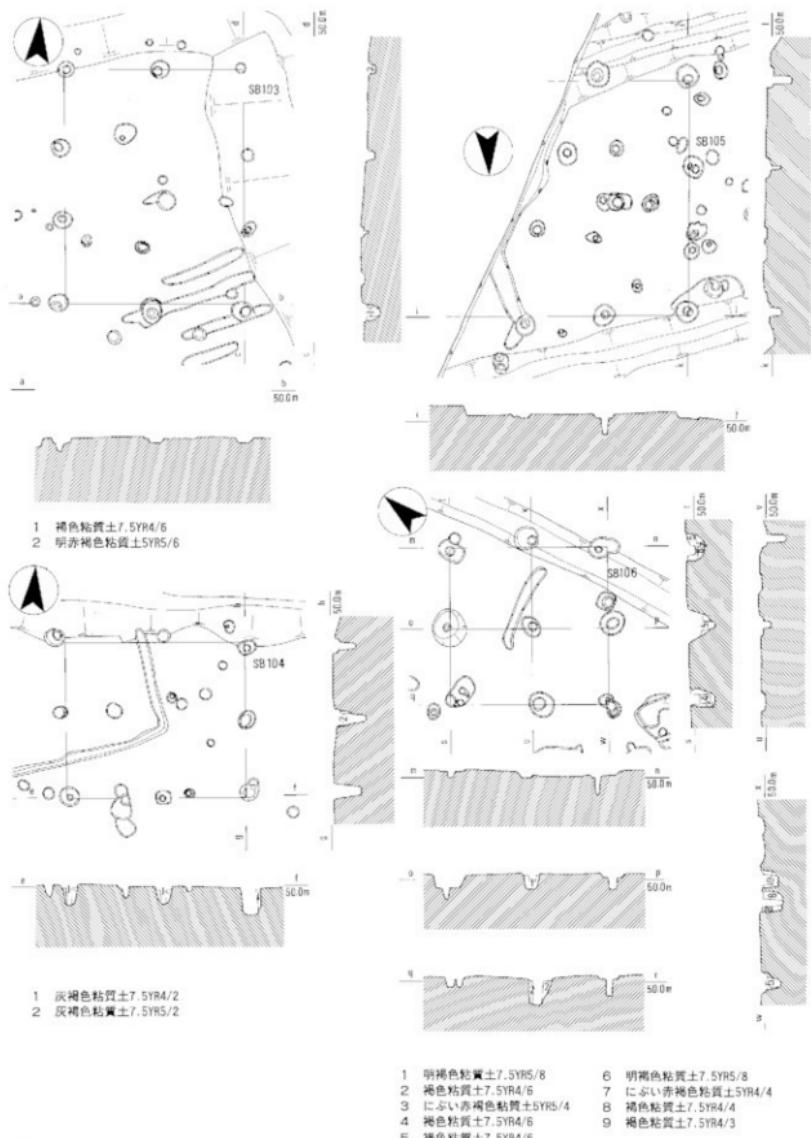
S B 36 柱行4間、梁行3間の掘立柱建物である。底1間南に伸びる。調査区の西側に伸びるものと考えられ、全ての柱穴を確認できたわけではない。柱



第13図 SB95・99平面図断面図 (1 : 100)



第14図 SB100・121・101・102平面図、断面図 (1 : 100)

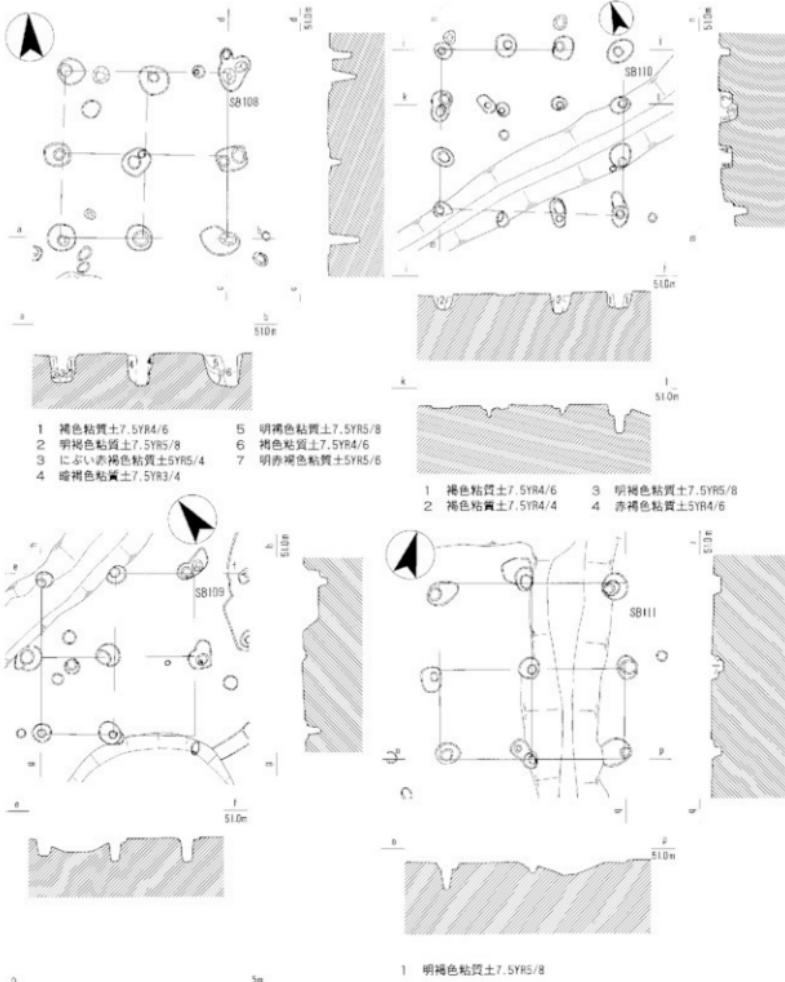


第15図 SB103・104・105・106平面図・断面図 (1 : 100)

間はすべて1.7mの等間であった。建物の方向はN 20° Eであった。すべての柱穴で柱痕跡を確認した。柱掘り形は円形で径0.5~0.8m、柱痕跡の径0.2~0.3mであった。柱穴の埋土からは、土師器小片、須恵器小片が出土した。小片がほとんどである

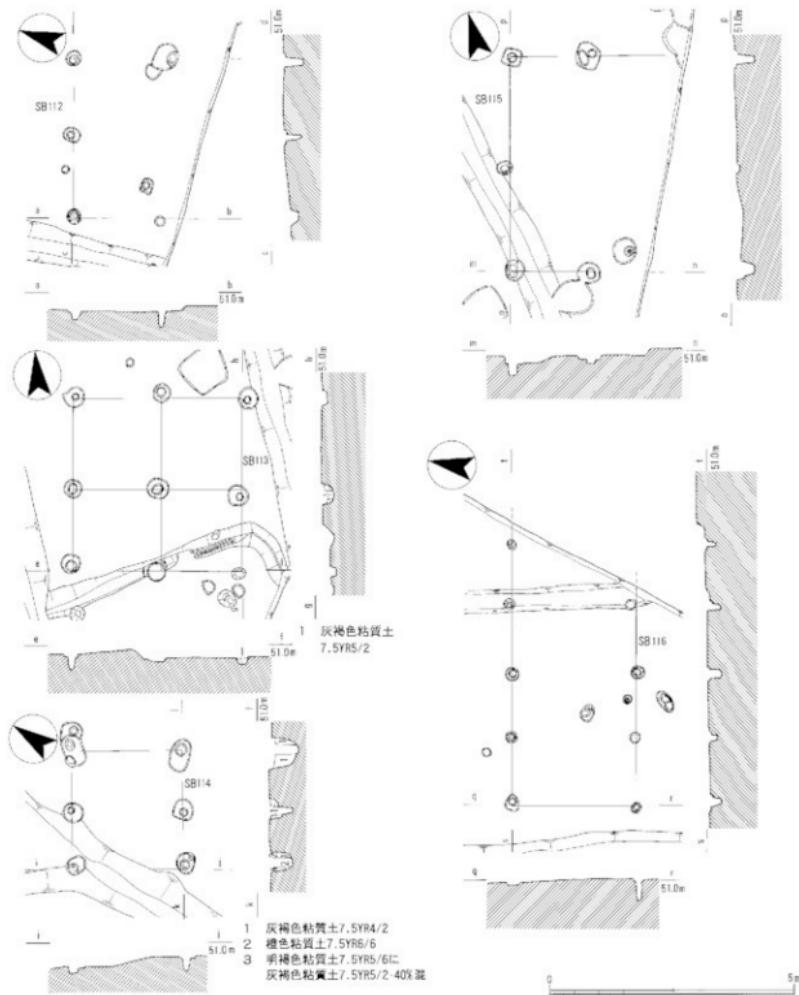
ため時期の判断が難しいが、e36pit5から須恵器短頭壺蓋が出土した。このことからこの建物は奈良時代に属するものと考えられる。

**S B 41** 桁行4間、梁行3間の掘立柱建物である。柱穴は円形で、すべての柱穴で円形の柱痕跡を確認



第16図 SB108・109・110・111平面図、断面図 (1 : 100)

することができた。柱間については桁行1.75m、梁行1.8mとそれぞれ等間である。建物の方向はN 3.0° Eであった。それぞれの柱穴の埋土からは、飛鳥時代のものと考えられる土師器片、須恵器壺・杯身、楕状・滴状鉄滓が出土した。



第17図 SB112・113・114・115・116平面図・断面図 (1 : 100)

S B 95 桁行5間、梁行3間の掘立柱建物である。柱穴は円形で、一部で確認できた柱痕跡は円形であった。柱間については、桁行1.85m、梁行1.6mと桁行と梁行のそれぞれ等間である。建物の方向は、N 28.0° Eであった。柱穴の埋土からは、飛鳥から

奈良時代にかけての土師器片、須恵器蓋片が出土した。

**S B 99** 柱行5間、梁行3間の掘立柱建物である。後世の搅乱により、全ての柱穴を確認することはできなかった。柱穴は円形で、柱間については、柱行1.95m、梁行1.6mとそれぞれ等しくなっていた。建物の方向はN 18.0° Wであった。柱穴の埋土からは、飛鳥から奈良時代にかけての土師器片、須恵器片が出土した。

**S B 100** 柱行3間以上、梁行2間以上の掘立柱建物で、調査区外西側に延びていくようである。柱穴は円形で、柱間については、柱行1.8m、梁行2.2mとそれぞれ等しくなっていた。建物の方向はN 21.0° Wであった。柱穴の埋土からは、飛鳥から奈良時代にかけての土師器蓋片、須恵器杯蓋片などを確認した。

**S B 101** 柱行3間、梁行2間の掘立柱建物である。柱間については、柱行1.8m、梁行1.95mというようにそれぞれ等しくなっていた。柱掘り形は円形で、径0.5~0.6mで、径0.15~0.25mの柱痕跡をそれぞれの柱穴で確認した。建物の方向はN 48.5° Wであった。柱穴の埋土からは、飛鳥から奈良時代にかけての土師器片、須恵器片が出土した。

**S B 102** 柱行3間、梁行2間の掘立柱建物である。柱間については、柱行1.6m、梁行1.65mというようにそれぞれ等しくなっていた。柱穴は円形で、径0.15~0.25mの柱痕跡を一部の柱穴で確認した。建物の方向はN 5.5° Wであった。柱穴の埋土からは遺物の出土がなく、所属時期の判断に苦しむが、建物の方向や同じ性格のものが奈良時代に属すると考えられることから同時期であろうか。

**S B 103** 柱行3間、梁行2間の掘立柱建物である。柱間については、それぞれ1.8mの等間であった。柱掘り形は円形で、径0.15~0.25mの円形の柱痕跡をほとんどの柱穴で確認した。建物の方向はN 6.5° Wであった。柱穴の埋土からは遺物の出土がなく、所属時期の判断に苦しむが、建物の方向などから奈良時代に属すると考えられることから同時期であろうか。

**S B 104** 柱行2間、梁行2間の掘立柱建物である。柱間については、柱行1.8m、梁行1.5mとい

うようにそれぞれ等しい。柱掘り形は円形で、径0.5~0.6mで、径0.15~0.25mの柱痕跡をほとんどの柱穴で確認した。建物の方向はN 6.0° Wであった。柱穴の埋土からは、飛鳥から奈良時代にかけての土師器片が出土した。

**S B 105** 柱行2間以上、梁行2間の掘立柱建物で、調査区外に延びていくと思われる。柱間については、それぞれ1.8mの等間であった。柱掘り形は円形で、径0.15~0.25mの柱痕跡をそれぞれの柱穴で確認した。建物の方向はN 2.5° Wであった。柱穴の埋土からは、飛鳥から奈良時代にかけての土師器蓋片などの土師器類が出土した。

**S B 106** 柱行2間、梁行2間の総柱建物である。柱間については、それぞれ1.6mの等間であった。柱掘り形はほとんどが円形で、径0.15~0.25mの柱痕跡をそれぞれの柱穴で確認した。建物の方向はN 50.0° Wであった。建物の規模から住居以外での使用が想定できよう。柱穴の埋土からは、飛鳥から奈良時代にかけての土師器片が出土した。

**S B 108** 柱行2間、梁行2間の総柱建物である。柱間については、柱行1.65m、梁行1.6mというようにそれぞれ等しい。柱掘り形は円形で、径0.15~0.25mの柱痕跡をそれぞれの柱穴で確認した。建物の方向はN 6.0° Eであった。建物の規模から住居以外での使用が想定できよう。柱穴の埋土からは、飛鳥から奈良時代にかけての土師器片を確認した。

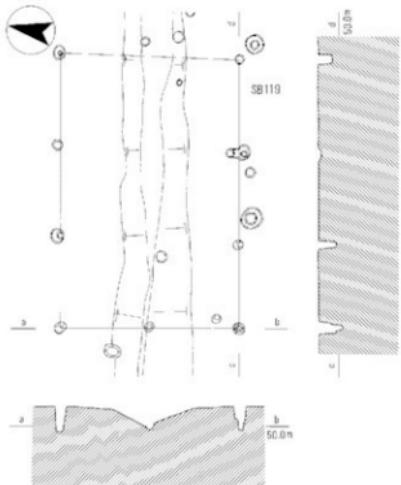
**S B 109** 柱行2間、梁行2間の総柱建物である。柱間については、柱行1.5m、梁行1.6mというようにそれぞれ等しい。柱掘り形は円形で、径0.15~0.25mの柱痕跡をそれぞれの柱穴で確認した。建物の方向はN 35.0° Eであった。建物の規模から住居以外での使用が想定できよう。柱穴の埋土からは遺物の出土がなく、所属時期の判断に苦しむが、建物の方向などから飛鳥~奈良時代に属すると考えられる。

**S B 110** 柱行3間、梁行3間の総柱建物である可能性がある。搅乱より全ての柱穴を確認できなかつたためであるが、先に述べた想定としたい。柱間については、それぞれ1.2mの等間であった。柱掘り形は円形で、径0.15~0.5mの柱痕跡をそれぞれの柱穴で確認した。建物の方向はN 19.0° Eであつ

た。建物の規模から住居以外での使用が想定できよう。柱穴の埋土からは遺物の出土がなく、所属時期の判断に苦しむが、建物の方向などから飛鳥～奈良時代に属すると考えられる。

**S B 111** 桁行2間、梁行2間の総柱建物である。柱間については、桁行1.8m、梁行1.55mというようにそれぞれで等しい。柱掘り形は円形で、径0.15～0.25mの柱痕跡をそれぞれの柱穴で確認した。建物の方向はN 17.5° Wであった。建物の規模から住居以外での使用が想定できよう。柱穴の埋土からは遺物の出土がなく、所属時期の判断に苦しむが、建物の方向などから飛鳥～奈良時代に属すると考えられる。

**S B 112** 桁行1間以上、梁行2間の掘立柱建物である。調査区外に延びていくようである。そのためすべての柱穴を確認することはできなかった。柱間については、桁行1.8m、梁行1.5mというように



1 褐色粘質土7.5YR4/6 3 明褐色粘質土7.5YR5/6  
2 明褐色粘質土7.5YR5/8 4 にぶい赤褐色粘質土5YR5/4

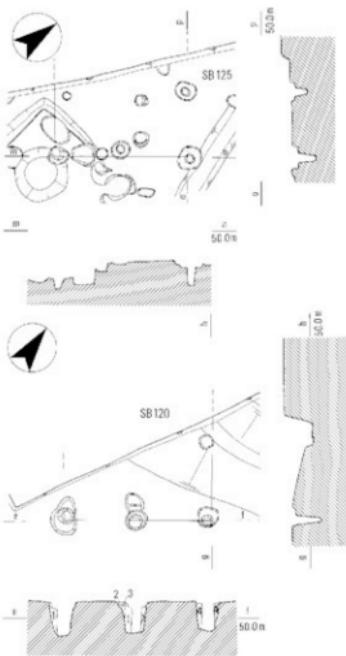
0 5m

第18図 SB119・120・125平面図・断面図 (1 : 100)

それぞれで等しいようである。柱掘り形は円形で、径0.15～0.25mの柱痕跡をほとんどの柱穴で確認した。建物の方向はN 18.5° Wであった。柱穴の埋土からは遺物の出土がなく、所属時期の判断に苦しむが、建物の方向などから飛鳥～奈良時代に属すると考えられる。

**S B 113** 桁行2間、梁行2間の総柱建物である。柱間については、それぞれ1.7mの等間であった。柱掘り形は円形で、径0.15～0.25mの柱痕跡をほとんどの柱穴で確認した。建物の方向はN 4.5° Eであった。建物の規模から住居以外での使用が想定できよう。柱穴の埋土からは遺物の出土がなく、所属時期の判断に苦しむが、建物の方向などから飛鳥～奈良時代に属すると考えられる。

**S B 114** 桁行2間、梁行1間の掘立柱建物である。柱間については、桁行1.25m、梁行2.1mというようにそれぞれで等しい。柱掘り形は円形で、径

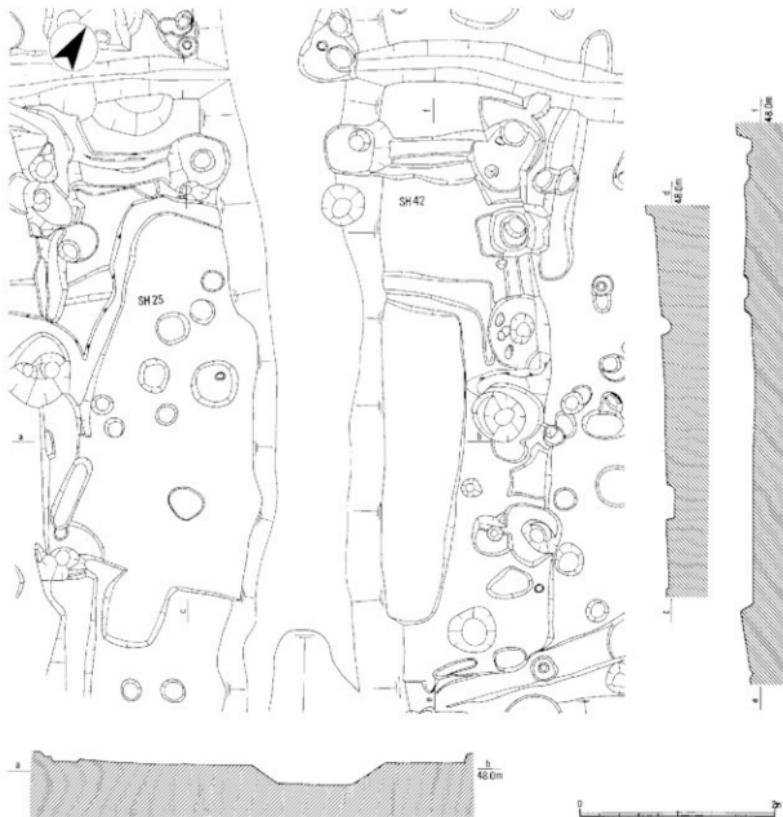


0.15～0.25mの柱痕跡をそれぞれの柱穴で確認した。建物の規模から住居以外での使用が想定できよう。柱穴の埋土からは、飛鳥から奈良時代にかけての土師器片がK11pit1から出土した。

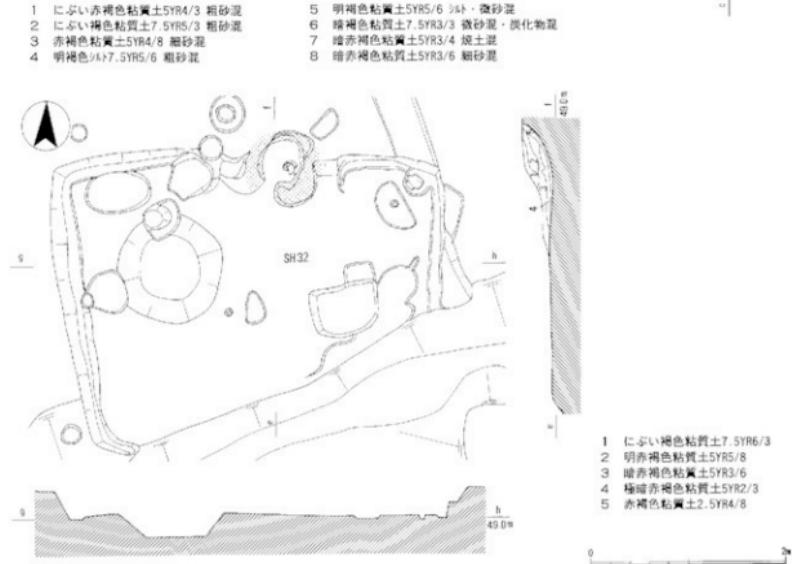
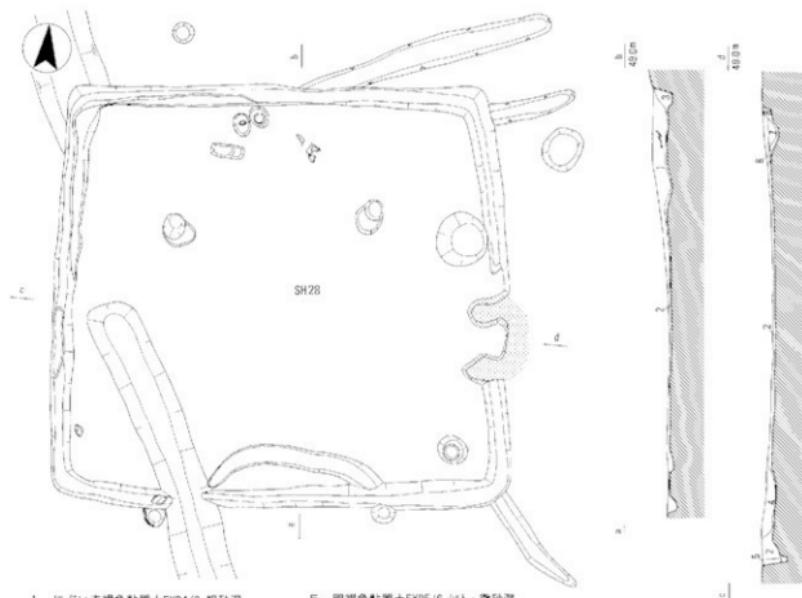
**S B 115** 桁行1間以上、梁行2間の掘立柱建物である。調査区外に延びていくようである。すべての柱穴を確認することができなかつたため、全容は把握できていない。柱間については、桁行1.6m、梁行2.0mというようにそれぞれで等しいようである。柱掘り形は円形で、径0.15～0.25mの柱痕跡をそれぞれの柱穴で確認した。建物の方向はN 15.0° Eで

あった。建物の規模から住居以外での使用が想定できよう。柱穴の埋土からは遺物の出土がなく、所属時期の判断に苦しむが、建物の方向や同じ性格のものが飛鳥時代に属すると考えられることから同時期であろう。

**S B 116** 桁行4間以上、梁行1間の掘立柱建物である。柱間については、桁行1.3m、梁行2.4mというようにそれぞれで等しい。柱掘り形は円形で、径0.15～0.25mの柱痕跡をそれぞれの柱穴で確認した。建物の方向はN 79.0° Eであった。建物の規模から住居以外での使用が想定できよう。柱穴の埋土



第19図 SH25・42平面図断面図 (1 : 50)



第20図 SH28・32平面図・断面図 (1 : 50) ※網点は焼土

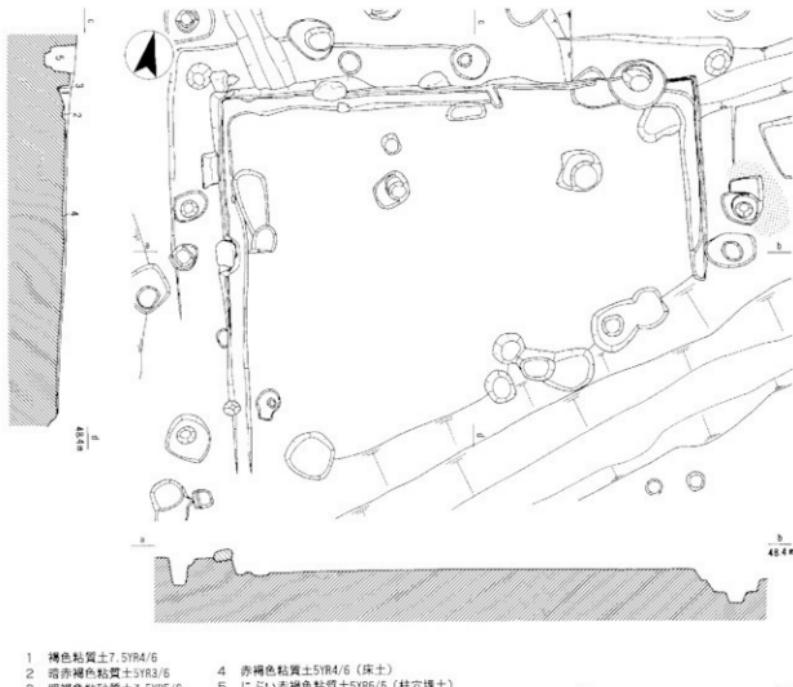
からは、飛鳥から奈良時代にかけての土師器片がK6pit1から出土した。

S B 119 後世の擾乱によりすべての柱穴を確認できたわけではないが、桁行3間、梁行2間の掘立柱建物とした。柱間については、桁行2.1m、梁行1.8mというようにそれぞれで等しい。柱掘り形は円形で、径0.15～0.25cmの柱痕跡をほとんどの柱穴で確認した。建物の方向はN 73.0° Eであった。柱穴の埋土からは遺物の出土がなく、所属時期の判断に苦しむが、建物の方向などから飛鳥から奈良時代に属するものと考えられる。

S B 120 桁行1間以上、梁行2間の掘立柱建物である。調査区外に延びていくようである。そのため、全ての柱穴を確認することができなかつた。柱間については、桁行1.6m、梁行1.45mというよう

にそれぞれで等しい。柱掘り形は円形で、径0.15～0.25mの柱痕跡をそれぞれの柱穴で確認した。建物の方向はN 37.0° Wであった。柱穴の埋土からは遺物の出土がなく、所属時期の判断に苦しむが、建物の方向などから飛鳥から奈良時代に属するものと考えられる。

S B 121 桁行2間以上、梁行2間以上の掘立柱建物と考えたい。調査区外に延びていくようである。そのため、全ての柱穴を確認することができなかつた。柱間については、桁行2.1m、梁行2.0mというようにそれぞれで等しい。柱掘り形は円形で、径0.15～0.25mの柱痕跡をそれぞれの柱穴で確認した。建物の方向はN 19.0° Eであった。柱穴の埋土からは遺物の出土がなく、所属時期の判断に苦しむが、建物の方向などから飛鳥から奈良時代に属する

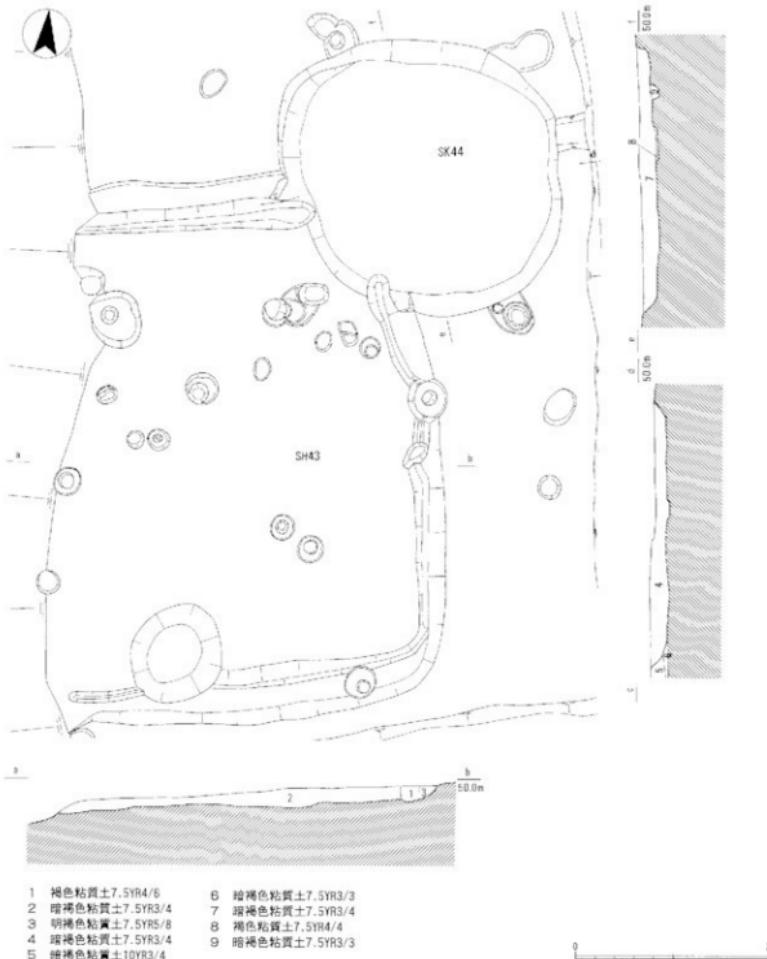


第21図 SH35平面図断面図 (1 : 50) ※網点は焼土

ものと思われる。

S B 125 桁行1間以上、梁行3間の掘立柱建物である。調査区外に延びていくようである。そのため、全ての柱穴を確認することができなかつた。柱間について、桁行1.5m、梁行1.3mというようにそれぞれ等しい。柱掘り形は円形で、径0.15~

0.25mの柱痕跡をそれぞれの柱穴で確認した。建物の方向はN 34.5° Eであった。柱穴の埋土からは遺物の出土がなく、所属時期の判断に苦しむが、建物の方向などから飛鳥から奈良時代に属するものと考えられる。

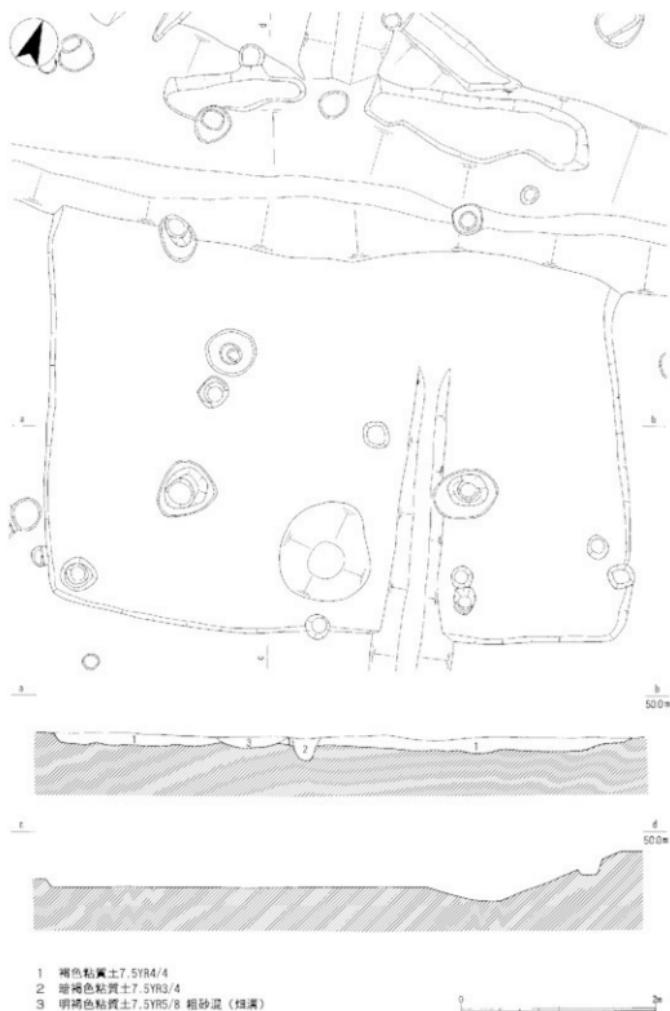


第22図 SH43・SH44平面図断面図 (1 : 50)

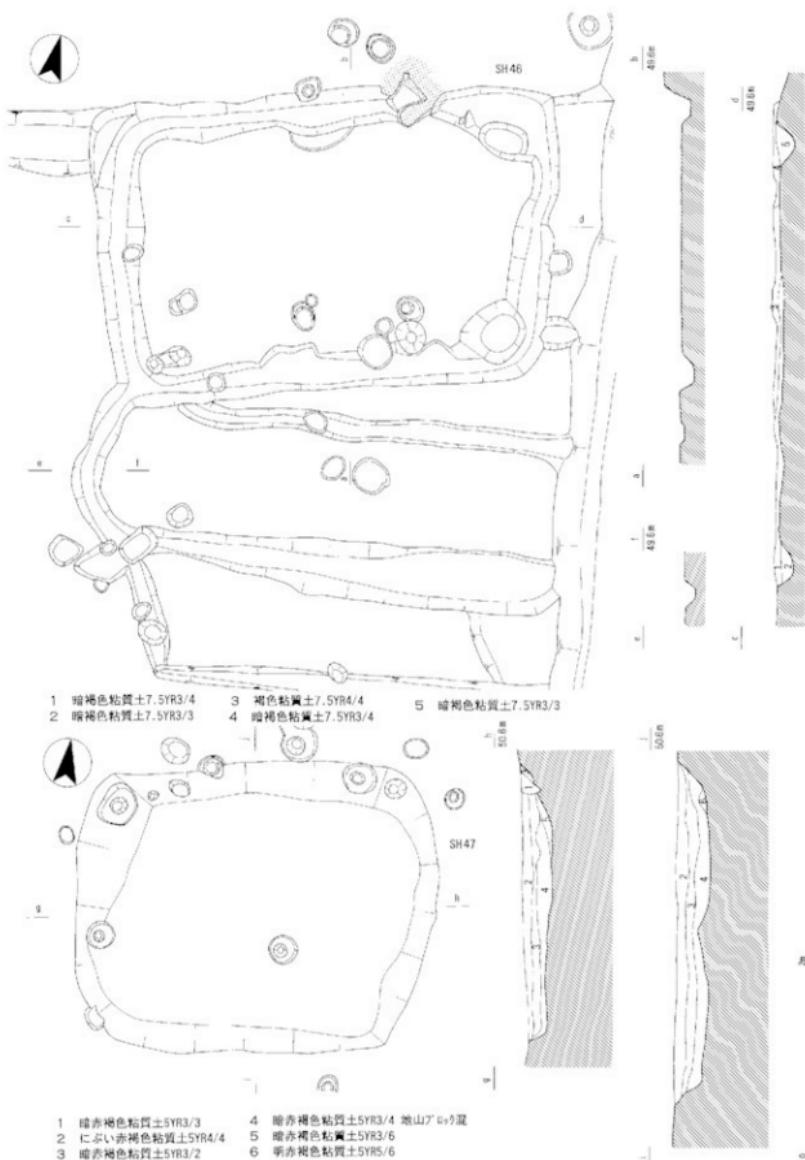
<竪穴住居>

SH25 一辺3.3m、深さ0.05m、隅丸方形の竪穴住居と考えられる。ほぼ中央が後世の擾乱を受けていて、全体を確認することはできなかった。建物

方向はN 21.0° Wである。先に述べたようなことから竪跡は確認できなかった。遺構埋土から奈良時代のものと思われる土師器片、須恵器片が少量出土した。



第23図 SH45平面図断面図 (1 : 50)



第24図 SH46・47平面図・断面図 (1 : 50) ※網点は焼土

**S H 28** 長軸4.7m、短軸4.3m、深さ0.14m、隅丸方形の竪穴住居である。建物方向はN 7.0° Wである。竪跡は東辺のはば中央に、壁周溝は遺構全周を巡ることを確認した。遺構埋土からは奈良時代に属すると思われる土師器甕口縁部片、須恵器台付杯片などが少量出土した。

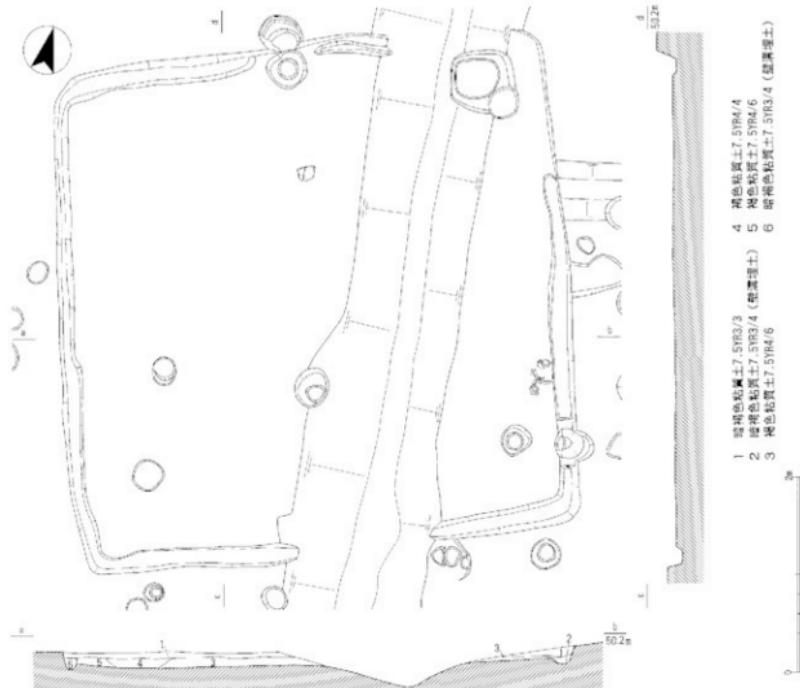
**S H 32** 長軸4.0m、短軸2.5m以上、深さ0.3m、隅丸長方形の竪穴住居である。建物方向はN 9.0° Wである。搅乱溝に切られており全体の様相は判然としない。竪跡は北辺の中央東寄りに確認することができた。壁周溝について確認できた遺構部分の全周を巡る。遺構埋土からは奈良時代と思われる土師器甕・台付杯片、須恵器杯・杯蓋片、砾石が出土した。

**S H 35** 長軸5.7m、短軸3.4m以上、深さ0.15m、隅丸方形の竪穴住居である。現代溝に南辺を切られ

ていたので、全容を確認することができなかった。建物方向はN 15.5° Eである。遺構埋土からは飛鳥時代に属すると考えられる土師器片、須恵器高杯・杯片などが少量出土した。

**S H 42** 長軸5.5m以上、短軸1.4m以上、深さ0.25m、隅丸方形の竪穴住居であろうか。搅乱や遺構の重複により、全容を確認することはできなかった。遺構埋土からは、奈良時代のものと考えられる土師器甕片、須恵器高杯・杯片、土鍤、鉄滓などが出土した。

**S H 43** 長軸5.2m、短軸3.5m以上、深さ0.14m、隅丸方形の竪穴住居である。搅乱溝に切られており、平面プランが原形をとどめていないものの、概ね正方形を呈していたものと考えられる。建物方向はN 10.0° Wである。竪跡については、搅乱を受けてい

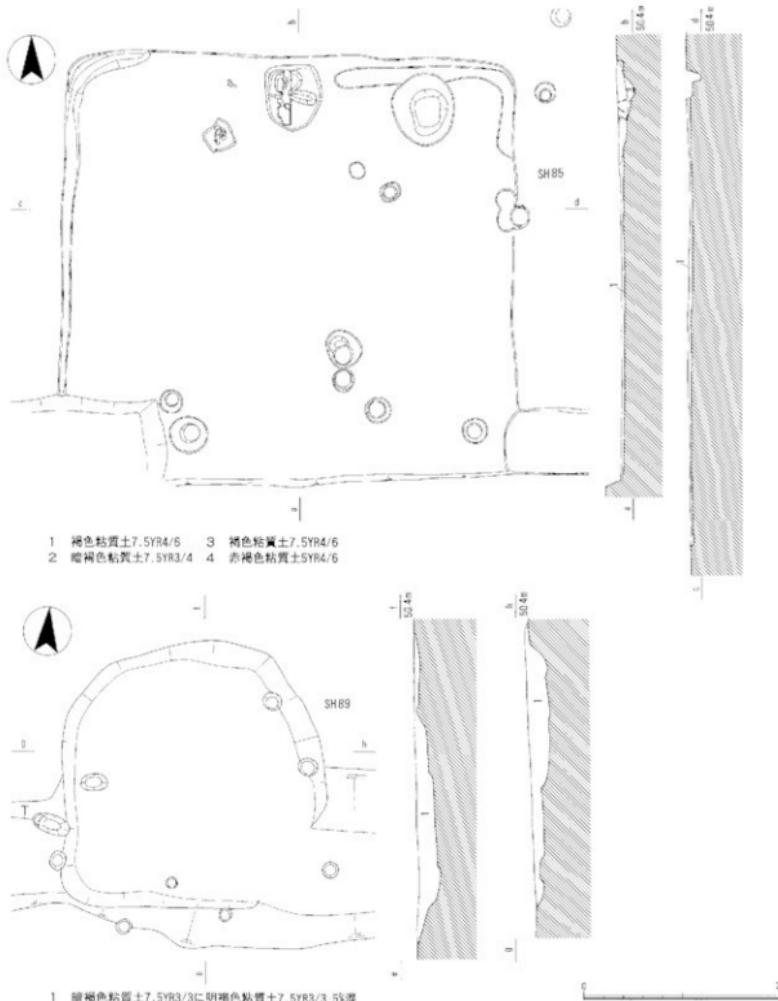


第25図 SH64平面図断面図 (1 : 50)

ることもあり確認できなかった。確認できた遺構を巡るよう壁周溝を確認することができた。遺構埋土からは、奈良時代のものと思われる土師器小片、須恵器小片が少量出土した。

S H 45 長軸5.7m、短軸5.6m、深さ0.15m、闊

丸方形の堅穴住居と考えられる。構成の擾乱を受けているので、全容や龜後を確認することはできなかった。同様に壁周溝も確認することができなかった。建物方向はN 20.0° Wである。遺構埋土から飛鳥から奈良時代のものと思われる土師器甕、須恵器杯蓋



第26図 SH-85・89平面図・断面図 (1 : 50)

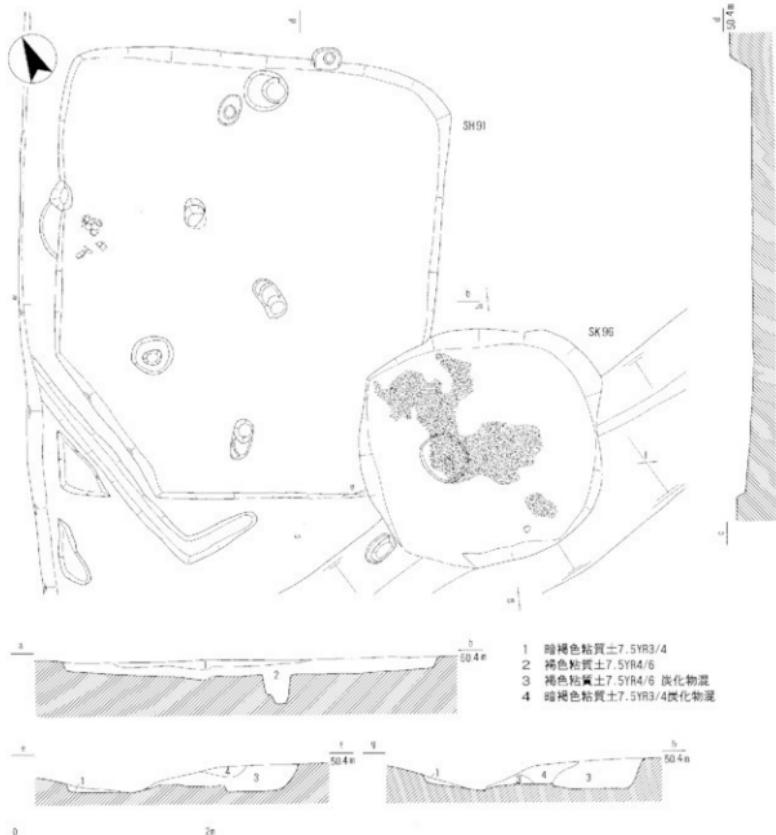
などが出土した。出土遺物のほとんどが土師器類であった。

**S H 46** 長軸5.7m、短軸5.6m、深さ0.09m、隅丸長方形の竪穴住居である。方位はN 19.5° Wである。竪跡は北辺東寄りで確認した。壁周溝については、遺構の全周を巡る。その北西端から排水溝と考えられる溝が南へ2m程延びる。竪跡が北辺中央になく、何らかの作業を行う空間を意識したものなのだろうか。遺構埋土から飛鳥から奈良時代ものと思われる土師器甕、須恵器杯蓋などが出土した。ほと

んどが土師器類であった。

**S H 47** 長軸3.6m、短軸3.0m、深さ0.34m、隅丸方形の竪穴住居と考えられる。建物方向はN 6.0° Wである。遺構埋土からは奈良時代のものと思われる土師器甕、須恵器壺などが出土した。

**S H 52** 長軸5.0m以上、短軸2.0m以上、深さ0.12m、隅丸方形の竪穴住居であろうか。平面プランは、擾乱や遺構の重複により本来の形をとどめていない。残存していた住居跡の床面から立ち上がる部分には、幅0.35m、深さ0.04~0.14mの壁周溝



第27図 SH91・SK96平面図断面図 (1 : 50) ※スクリートーンは炭化物

も確認できた。遺構埋土からは奈良時代のものと思われる土師器片を確認した。

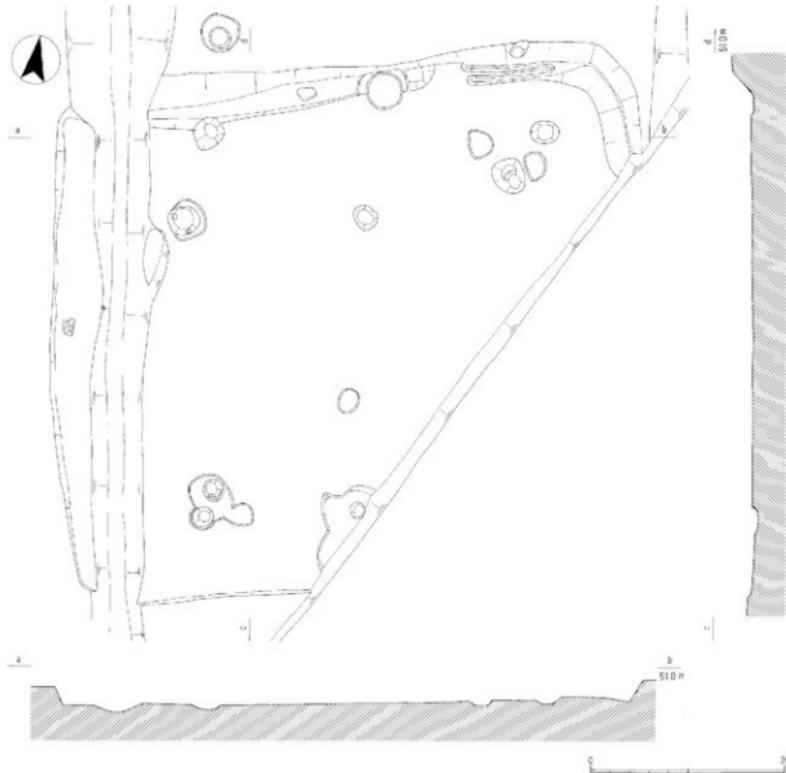
**S H 64** 長軸5.3m、短軸5.0m、深さ0.15mの堅穴住居である。平面プランは隅丸方形である。建物方向はN 18.0° Wである。竈跡は北辺のほぼ中央に残骸を確認した。遺構埋土からは、飛鳥時代に属すると考えられる土師器片、須恵器短頭壺・杯身片、鉄滓などが出土した。出土した遺物のほとんどが土師器類であった。

**S H 85** 長軸4.64m、短軸4.25m以上、深さ0.08m。隅丸方形の堅穴住居と考えられる。建物方向はN 2.0° Eである。一部で壁周溝を確認することができたが、竈跡は確認することができなかった。

擾乱等により、全容を確認することができなかった。遺構埋土からは、飛鳥から奈良時代にかけての土師器片などを確認した。

**S H 89** 長軸3.28m、短軸2.7m、深さ0.2m、隅丸方形の堅穴住居である。建物方向はN 2.0° Wである。壁周溝、竈跡は確認できなかった。遺構埋土からは土師器片が少量出土した。土器が小片であり少量であるので、所属時期の判断に苦しむが、遺構形態から奈良時代に属するものと考えられる。

**S H 91** 長軸3.7m、短軸3.25m、深さ0.2m、隅丸方形の堅穴住居である。壁周溝、竈跡は確認できなかった。建物方向はN 29.5° Wである。遺構埋土からは、奈良時代に属すると考えられる土師器片



第28図 SH98平面図断面図 (1 : 50)

などが出土し、それらはすべて土師器類であった。  
**S H 98** 長軸5.32m、短軸2.4m以上、深さ0.21mの竪穴住居である。調査区外に遺構が延びているので推測の域をでないが、平面プランは隅丸方形を呈していたのだろうか。建物方向はN 13.0° Wである。竪跡は北辺のほぼ中央に基底部底の一部を確認した。遺構が残存する一部分で壁周溝を確認することができた。遺構埋土からは遺物の出土がなく、所属時期の判断に苦しむが、飛鳥時代に属するものと考えられる。

**S H 107** 長軸4.4m、短軸4.25m、深さ0.18m、隅丸方形の竪穴住居である。建物方向はN 39.0° Eである。竪跡や壁周溝は確認することができなかつた。遺構埋土からは遺物の出土がなく、所属時期の判断に苦しむが、飛鳥時代に属すると考えられる。

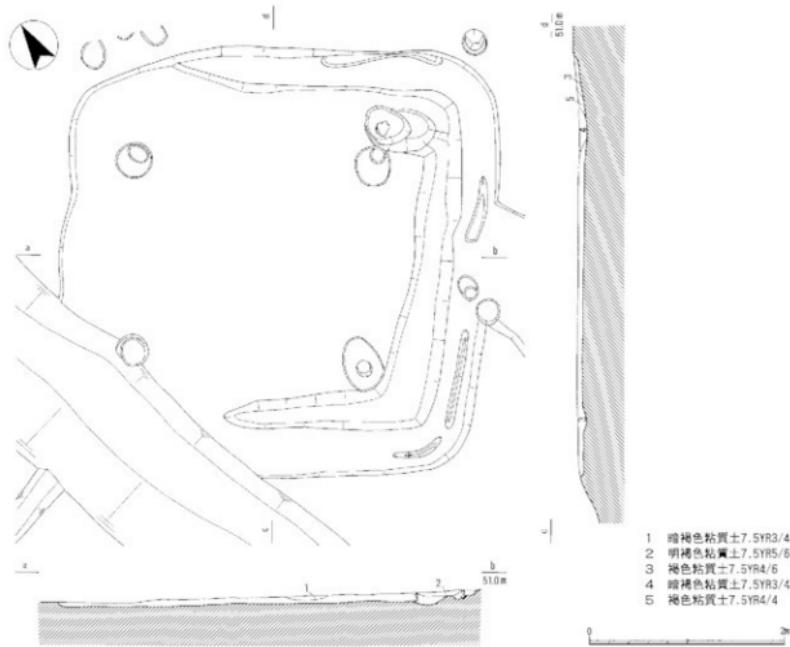
**S H 126** 長軸4.5m、短軸4.0m、深さ0.4m、竪穴住居であろうか。不整形な方形であった。壁周溝

や竪は確認することができなかつた。遺構埋土からは、奈良時代に属すると考えられる土師器甕・杯片、須恵器壺・杯蓋、鉄滓などが出土した。

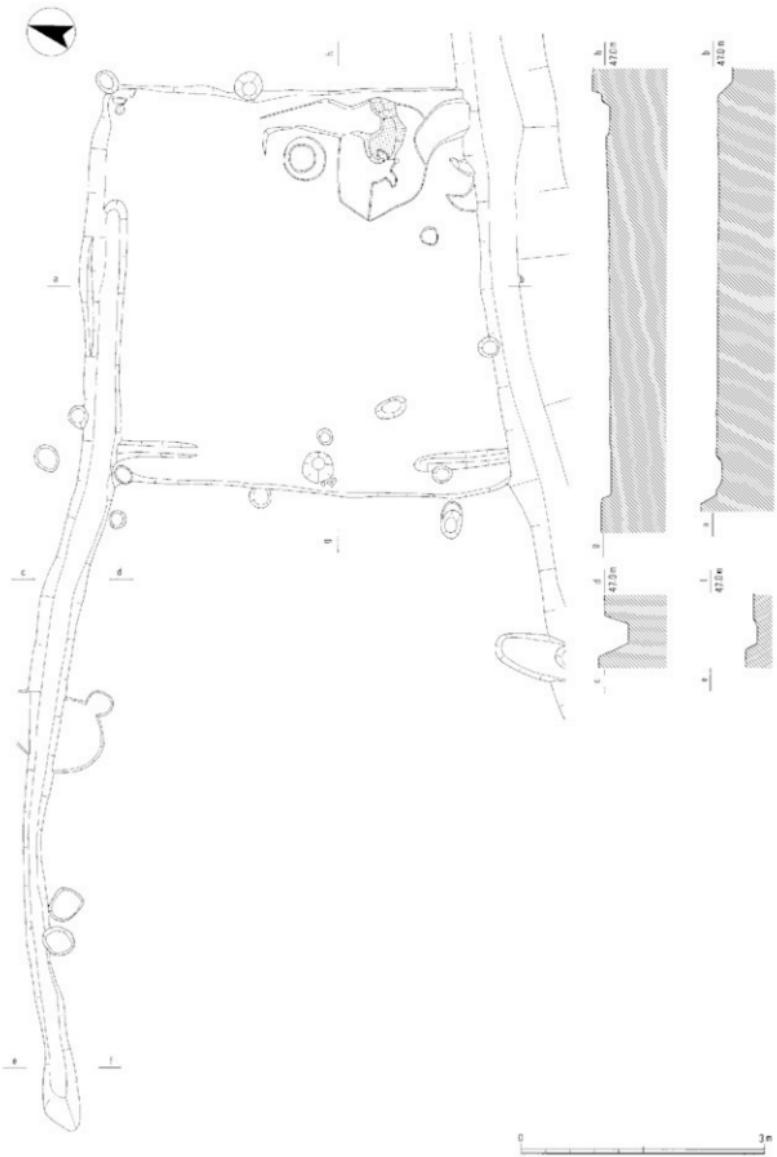
**S H 128** 長軸3.9m、短軸3.0m、深さ0.35m、竪穴住居であろうか。不整形な方形であった。竪跡や壁周溝は確認することができなかつた。遺構埋土からは、奈良時代に属すると考えられる土師器甕・杯蓋片、須恵器壺片などが出土した。

**S H 136** 長軸5.0m、短軸4.5m、深さ0.23m、隅丸方形の竪穴住居である。搅乱や遺構の重複により、全容は確認できなかつた。建物の方向はN 13.5° Wである。竪跡は東辺のほぼ中央に基底部の一部が残存する。遺構の北西隅から西へ排水溝と考えられるものが延びている。遺構埋土からは、奈良時代に属すると考えられる土師器片が出土した。

**S H 137** 長軸5.0m、短軸1.5m以上、深さ0.23mの竪穴住居である。S H 139に切られて原形はと



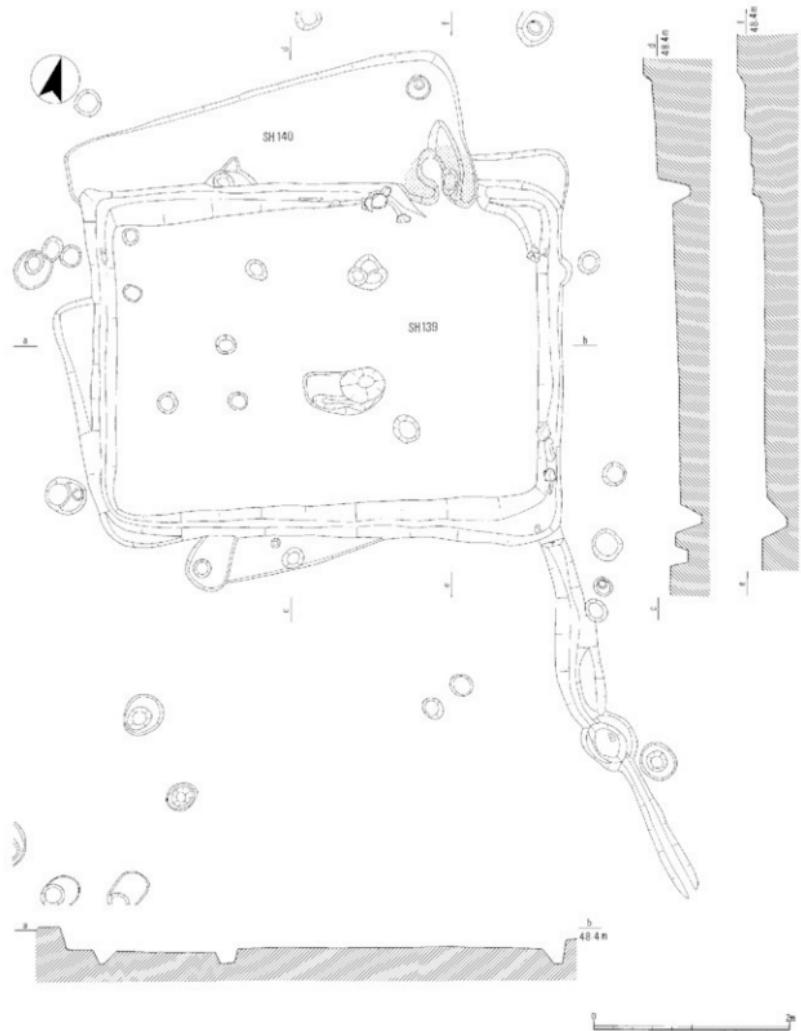
第29図 SH107平面図、断面図 (1 : 50)



第30図 SH136平面図、断面図 (1:60) ※網点は焼土

どめていない。隅丸長方形を呈していたと考えられる。炭化物が混入する遺構埋土からは、奈良時代に属すると考えられる土師器甕片、須恵器甕片などが出土した。

SH 139 長軸5.0m、短軸3.8m、深さ0.2m、隅丸長方形の竪穴住居である。建物方向はN 17.0° Wである。壁周溝は遺構に沿って巡っていた。竪跡は北辺の東端寄りに基底部の一部を確認した。SH 46



第31図 SH139平面図、断面図 (1 : 50) ※網点は焼土

と同じ形態である。遺構埋土からは、奈良時代に属すると考えられる土師器片ばかりを確認した。

**S K 140** 長軸3.8m、短軸1.5m以上、深さ0.15mの竪穴住居と思われる。S K 139に切られて原形はとどめていない。建物方向はN 32.0° Wである。遺構埋土からは、奈良時代に属すると考えられる土師器片ばかりを確認した。

#### <土坑>

**S K 21** 長軸2.2m、短軸1.4m、深さ0.1mの土坑であろう。擾乱や遺構の重複を受け全容が判然としない。土師器甕片・須恵器小片が埋土から少量出土した。土器片に混じり炭化物も若干出土した。奈良時代に属するものと考えられる。

**S K 33** 長軸1.9m、短軸1.6m、深さ0.04mの土坑である。平面プランは楕円形を呈する。炭化物が所々にみられる遺構埋土からは主に奈良時代の土師器甕片・須恵器片などが少量出土した。

**S K 39** 長軸1.1m、短軸0.8m、深さ0.05mの土坑である。平面プランは楕円形を呈している。遺構埋土からは土師器小片・鉄滓が少量出土した。出土遺物が小片かつ小量であるので時期の判断に苦しむ

が、奈良時代のものであろうか。

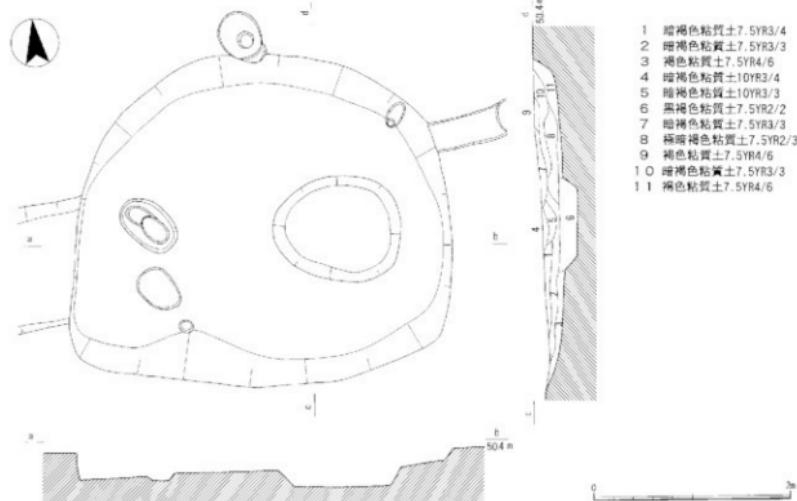
**S K 44** 長軸2.7m、短軸2.6m、深さ0.17mの平面プランが剛丸方形の土坑である。遺構埋土からは奈良時代に属すると考えられる土師器片や須恵器杯蓋などが出土した。竪穴住居の可能性もある。

**S K 48** 径1.5m、深さ0.11m。平面プランが円形を呈する土坑である。土器などは出土しなかったが、鉄滓の出土を確認した。

**S K 51** 長軸0.7m、短軸0.4m以上、深さ0.13mの楕円形の土坑と思われる。擾乱溝に一部切られていた。遺構埋土からは奈良時代に属すると考えられる土師器片・須恵器片を少量確認した。

**S K 66** 長軸2.2m、短軸1.4m以上、深さ0.04mの土坑である。擾乱溝に切られて平面プランは、原形をとどめていない。遺構埋土からは奈良時代のものと思われる土師器片が少量出土した。

**S K 72** 長軸1.1m、短軸0.95m、深さ0.23m。平面プランが楕円形の土坑である。炭化物が混入していた遺構埋土からは、飛鳥から奈良時代にかけてのものと考えられる土師器甕・須恵器壺・杯蓋片などが出土した。S H 32の竈の直近に位置していた。どのような性格であるのか判断に苦しむ。



第32図 SK90平面図・断面図 (1 : 50)

**S K 79** 長軸1.0m、短軸0.9m、深さ0.17m。平面プランが楕円形の土坑である。炭化物が混じる遺構埋土からは、遺物の出土は確認できなかった。S H45の竈跡の直近に位置し、埋土には炭化物が混入していた。遺物は出土しなかった。

**S K 86** 長軸2.95m、短軸2.15m以上、深さ0.3mの土坑であろう。平面プランは複雑溝に切られていて原形をとどめていない。概ね楕円形を呈していることは容易に推測できよう。遺構埋土からは、飛鳥から奈良時代にかけての土師器片、須恵器片が少量出土した。これらとともにサヌカイト片も出土した。

**S K 87** 長軸2.95m、短軸2.8m、深さ0.12m。平面プランが楕円形の土坑である。遺構埋土からは飛鳥から奈良時代にかけての土師器片、須恵器片が少量出土した。

**S K 88** 長軸2.55m、短軸1.25m、深さ0.25mの土坑である。平面プランは楕円形を呈していた。遺構埋土からは飛鳥時代のものと思われる土師器甕、須恵器壺・杯蓋片などを確認した。

**S K 90** 長軸3.8m、短軸3.4m、深さ0.25mの土坑である。隅丸方形を呈していた。方位はE 10.0° Sである。遺構埋土からは土師器片が少量出土した。土器が小片であり少量なので、所属時期の判断

に苦しむが、奈良時代に属するものと考えられる。

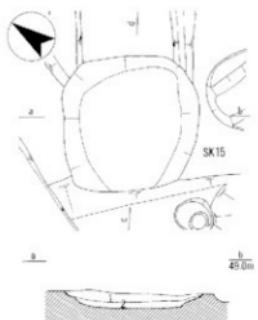
**S K 142** 長軸2.0m以上、短軸1.8m、深さ0.17mの土坑である。平面プランは隅丸方形であろう。調査区外に延びるようである。遺構埋土からは遺物の出土がなく遺構の所属時期の判断に苦しむが、遺構形態や埋土などから奈良時代のものであろうか。

#### <土師器焼成坑>

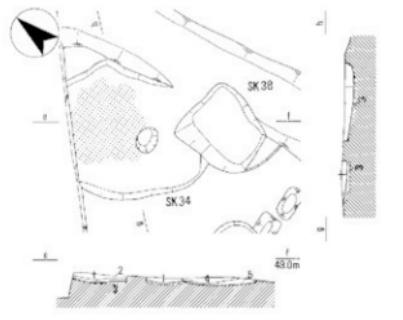
**S K 15** 長軸1.4m以上、短軸1.4m、深さ0.19mのほぼ楕円形を呈している。土師器焼成坑であろうか。底部の一部と遺構検出面から落ち込む部分で、赤変がみられた。埋土からは、少量のロクロ土師器皿・椀片、須恵器小片に混じり焼土や炭化物も出土した。平安時代末期に属するものと考えられる。

**S K 34** 長軸1.5m、短軸1.1m以上、深さ0.06mの土師器焼成坑である。平面プランは楕円形を呈し、南勢地方でみられる二等辺三角形の平面プランとは若干の違和感を覚える。底部と肩部の一部が熱を受け赤変していた。炭化物が多く混入する遺構埋土からは、平安時代末期のものと思われるロクロ土師器椀片、須恵器瓶片が出土した。

**S K 38** 長軸1.0m、短軸0.7m、深さ0.12m、平面プランがほぼ楕円形の土師器焼成坑と考えられる。底部の一部がうすく赤変している。炭化物が混



- 1 線赤褐色粘質土5YR3/4
- 2 黒褐色粘質土5YR3/1 炭化物混入
- 3 にぶい赤褐色粘質土5YR4/4 炭化物混入



- 1 線赤褐色粘質土5YR3/4
- 2 線赤褐色粘質土5YR3/6
- 3 赤褐色粘質土2.5YR4/8 (燒土)
- 4 にぶい赤褐色粘質土5YR4/4
- 5 黒褐色粘質土7.5YR3/4 炭化物混入



第33図 SK15・34・38平面図、断面図 (1 : 50) ※網点は焼土

じる遺構埋土からは土師器小片・須恵器小片が少量出土した。これらのうちほとんどが土師器片であった。時期については遺物が小片かつ少量であるので判断に苦しむ。他の焼成坑と同時期であろうか。

S K 96 長軸2.38m、短軸2.28m、深さ0.3m。平面プランはほぼ円形であった。底部近くで大量の炭化物が、底部中央に層状に確認することができた。それらを取り除くと底部の一部が赤変しているのを確認した。これらから判断して土師器焼成坑と考えられる。遺構埋土からは遺物の出土がなく、所属時期の判断に苦しむが、同じ性格のものが平安時代末期に属すると考えられることから同時期であろうか。

S K 134 長軸1.63m、短軸1.14m、深さ0.27mの土師器焼成坑である。平面プランは楕円形を呈し、南勢地方でみられる二等辺三角形の平面プランとは若干の違和感を覚える。底部と肩部の一部が熱を受け赤変していた。炭化物が多く混入する遺構埋土からは、奈良時代のものと思われる土師器裏片・須恵器高杯片が出土した。

#### <溝>

S D 18 幅0.4～0.6m、深さ0.3～0.5mの溝である。断面形はV字を呈していた。遺構検出時には堅穴住居に切られている様相であった。遺構埋土からは、土師器裏・鍋体部片・須恵器裏・杯蓋・高杯、水晶片が出土した。概ね飛鳥時代のものと考えられる。

S D 40 幅0.4m、深さ0.06mの溝である。遺構埋土からは土師器小片・須恵器小片が少量出土した。これらのほとんどが土師器であった。小片が多く遺構の所属時期の判断に苦しむが、胎土などから奈良時代のものであろうか。

S D 58 幅0.35m、深さ0.11mの溝である。遺構埋土から飛鳥時代のものと思われる土師器裏・須恵器杯蓋・土器小片多数などを確認した。

S D 132 幅0.8～1.1m、深さ0.2mの溝である。遺構埋土からは土師器裏・皿片が少量出土した。小片が多く遺構の所属時期の判断に苦しむが、胎土などから奈良時代のものであろうか。

S D 138 幅0.4m、深さ0.2mの溝である。遺構

埋土からは土師器小片・須恵器小片が少量出土した。小片が多く遺構の所属時期の判断に苦しむが、胎土などから奈良時代のものであろうか。

## 5 中世の遺構

#### <溝>

S D 27 幅0.5m、深さ0.13mの溝である。遺構埋土からは弥生土器片・土師器片・須恵器片・山茶椀片・陶器片が少量出土した。室町時代に溝自体は埋没したのであろうか。

S D 130 幅0.7m、深さ0.4mの溝である。遺構埋土からは、土師器片・須恵器片・山茶椀片が少量出土した。概ね室町時代のものと考えられる。

S D 131 幅0.8～1.9m、深さ0.33mの溝である。遺構埋土からは、飛鳥から鎌倉時代にかけての土師器皿・甕片・須恵器甕・壺・杯蓋片が出土した。須恵器がほとんどであったが、鎌倉時代の遺構と考えられる。

(小濱 学)

#### [註]

①国土地理院のホームページに掲載の変換プログラムを利用し変換した。

②『四日市市史』(四日市市、1988年)。

③上村安生「弥生土器編年概観」(『三重県史 資料編 考古1』、三重県、2005年)と加納俊介・石黒立人編『弥生土器の様式と編年 東海編』(木耳社、2002年)を参照した。

④名称については、『北野遺跡(第2・3・4次調査)発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター、1995年)に掲った。

#### <遺構一覧表凡例>

○ 遺構番号は、報告書に掲載した番号である。

○ 調査時番号は、発掘調査時に付した遺構番号である。

○ 性格については、報告時に判断したものである。現地説明会の資料等で発表したものと違う可能性がある。

○ グリッドは、調査時の小地区番号である。

○ 規模については、土坑等が長軸×短軸×深さ、溝が幅×深さで表記している。なお、0が付く表記は切りあい等により規模が不明なものである。

○ 備考は、先に述べたもの以外を表記している。

遺構番号	調査時番号	グリッド	性格	規模(単位:m)	備考	時期
SX1	SZ01	h 43	土器棺墓	0.5×0.5×0.25	弥生土器蓋	弥生後期?
SX2	SD02	h 41~43 i 41~43 j 41~43	方形周溝墓	周溝内側5.5×5.5 (1.1~1.4)×(1.2~1.7)	弥生土器片 剥片(チャート) N2, 0° W	弥生後期
SX3	SK03	h 40, 41	土坑?	4.0×3.2×0.2	炭化物あり 拔根の可能性あり 須恵器片・土師器片少量	
SH4	SH04	h 40	堅穴住居	3.0×3.0×0.05	SK3に切られる 須恵器片・土師器片少量	奈良?
SX5	SZ05	i 42	土器棺墓	0.5×0.5×0.2		縄文晚期
SX6	SZ06	i 40	土坑?	0.8×0.8×0.16	ピットの可能性あり	
SX7	SZ07	i 41	土坑?	0.7×0.7×0.15	ピットの可能性あり 弥生土器片	
SX8	SK08	j 38, 39	土坑	2.1×1.6×0.13		
SD9	SD09	i37, j37, k36, 37	溝	(0.4~0.8)×0.18	須恵器杯・土師器片少量	
-	SH10	d39	不明		消失 土師器甕・須恵器蓋	
-	SH11	i37, h38	不明		消失 土師器甕	奈良?
SD12	SD12	e39, 40	溝	0.4×0.05	土師器片少量	
SB100	SK13	e38	柱穴		SB100のピット 鉄滓 土師器長胴甕	
SK14	SK14	f39, 40	土坑	0.8×0.6×0.08		
SK15	SK15	d36, e36	土師器焼成坑	1.4以上×1.4×0.19	ロクロ土師器出土	平安末期
SD16	SD16	d40, 41, e41	溝	0.4×0.12	染付出土・土師器片少量	擾乱
SD17	SD17	g38, 39, f39	溝	0.4×0.11	土師器片少量	奈良
SD18	SD18	d39, e38, 39, f37, 38, g37	溝	(0.4~0.6)×(0.3~0.5)	須恵器・土師器 水晶片	飛鳥
SD19	SD19	d36, e36, 37, f37, g37, 38	溝	(0.4~0.8)×0.11	土師器片少量	擾乱
SD20	SD20	d34, e34, 35, f35, 36, g35, 36, h36	溝	(0.4~1.1)×(0.11~0.23)	須恵器片・土師器片少量	擾乱
SK21	SK21	f37, 38	土坑?	2.2×1.4×0.1	SK33を切る 須恵器少量・土師器甕 炭化物	奈良
SD22	SD22	f36, 37, g36~38	溝	(0.7~1.0)×0.09	土師器片少量 鉄滓	擾乱
SB100	SH23	d38, e38	柱穴		SB100のピット 須恵器甕・土師器片少量 鉄滓	
-	SK24	d38, 39, e38, 39	不明		消失 須恵器片・土師器片少量	

第1表 遺構一覧表①

遺構番号	調査時番号	グリッド	性格	規模(単位:m)	備考	時期
SH25	SH25	f38, 39	堅穴住居	3.3×0.05	SH26と同一 須恵器片少量・土師器甕 N21.0° W	奈良?
-	SH26	e39, f39	堅穴住居		SH25と同一 須恵器甕・杯・蓋 土師器片少量	奈良?
SD27	SD27	h35, 36	溝	0.5×0.13	山茶椀・陶器 須恵器・土師器	室町
SH28	SH28	h33～35, g33～35	堅穴住居	4.7×4.3×0.14	砥石? 須恵器甕・土師器甕 N7.0° W	奈良
SD29	SD29	d29, 30, e30, 31, f31, 32, g32, h33, 33	溝	(0.5～0.9)×0.13	須恵器・土師器 瓦器・陶器	近世以降
SD30	SD30	g31, h31	溝	0.25×0.08		擾乱
SD31	SD31	d31, 32, e30～32, f30	溝	(1.4～2.2)×0.47	須恵器片・土師器片少量	擾乱
SH32	SH32	d31, e30, 31	堅穴住居	4.0×2.5以上×0.3	砥石・須恵器甕・蓋 土師器台付甕・甕 N9.0° W	奈良
SK33	SK33	f37, 38	土坑	1.9×1.6×0.04	SK21に切られる 炭化材 須恵器甕・土師器甕	奈良?
SK34	SK34	d34, e34	土師器 焼成坑	1.5×1.1以上×0.06	ロコ土師器出土 須恵器平底甕入	平安末期
SH35	SH35	h36, 37, g36, 37	堅穴住居	5.7×3.4以上×0.15	須恵器高杯・杯・蓋 土師器少量 N15.0° E	飛鳥
SB36	SB36	d36, 37, e35, 36	獨立柱 建物	3(1.7)間×4(1.7)間+1間	須恵器片少量・土師器蓋 N2.0° E	奈良
SB100	SK37	d38, 39, e38, 39	柱穴		SB100のピット 炭化物 土師器甕	飛鳥～ 奈良
SK38	SK38	e34	土器 焼成坑	1.0×0.7×0.12	須恵器片・土師器片少量	平安末期?
SK39	SK39	e39, 40	土坑	1.1×0.8×0.05	鉄津出土 土師器片少量	
SD40	SD40	f37, 38	溝	0.4×0.06	須恵器片少量・土師器甕	奈良?
SB41	SB41	e32, 33, f32～34, g33	獨立柱 建物	3(1.8)間×4(1.75)間	鉄津 須恵器甕・土師器片少量 N3.0° E	飛鳥
SH42	SH42	e38, f38	堅穴住居	5.5以上×1.4以上×0.25	土錐・鉄津 土師器甕 須恵器高杯・杯	奈良
SH43	SH43	f23, g23	堅穴住居	5.2×3.5?×0.14	土師器甕・須恵器片少量 N10.0° W	奈良
SK44	SH44	f22, 23	土坑	2.7×2.6×0.17	土師器少量・脚踏輪 堅穴住居の可能性あり	奈良?
SH45	SH45	j24, 25	堅穴住居	5.7×5.6×0.15	土師器甕 須恵器蓋 N20.0° W	飛鳥～ 奈良
SH46	SH46	j27, 28, 127	堅穴住居	4.9×3.0×0.09	工房跡 N19.5° W 鉄津・須恵器台付甕・蓋 土師器片多い	飛鳥～ 奈良
SH47	SH47	j19, k19	堅穴住居	3.6×3.0×0.34	石斧鋤入 土師器甕・須恵器甕 N6.0° W	奈良
SK48	SK48	d39	土坑	1.5×1.5×0.11	鉄津	不明

第2表 遺構一覧表②

遺構番号	調査時番号	グリッド	性格	規模(単位:m)	備考	時期
SK49	SK49	d39. 40	土坑	0. 8×0. 8×0. 02		
SZ50	SZ50	e37. 38	落ち込み	1. 6×1. 3×0. 6	風倒木の可能性も。	
SK51	SK51	e39	土坑	0. 7×0. 4以上×0. 13	須恵器片・土師器片少量	奈良
SH52	SH52	e39	堅穴住居	5. 0以上×2. 0以上×0. 12	土師器片少量	奈良
SD53	SD53	h21	溝	1. 0×0. 21		擾乱
SH52	SD54	e39	溝	0. 35×0. 04	SH52周壁溝 土師器片少量	奈良
SH52	SD55	e39	溝	0. 35×0. 14	SH52周壁溝 土縫 土師器片少量	奈良
SD56	SD56	h36	溝	0. 5×0. 18	土師器片少量	
SK57	SK57	h34	土坑	0. 5×0. 45×0. 16	須恵器片・土師器片少量	
SD58	SD58	e39	溝	0. 35×0. 11	土師器甕 須恵器蓋	飛鳥
SD59	SD59	h34	溝	0. 2×0. 06	風倒木 土師器片少量	
SD60	SD60	k16, 116	溝	(0. 2~0. 25)×0. 06	須恵器片少量	擾乱
SK61	SK61	k18	土坑?	2. 4×1. 4以上×0. 18	調査区外にのびる	
SD62	SD62	k18	溝	(0. 4~0. 5)×0. 05	現代瓦 須恵器片少量	擾乱
SD63	SD63	i24	溝	(0. 2~0. 3)×0. 07	堅穴住居周壁溝の可能性 須恵器片・土師器片少量	
SH64	SH64	j21, 22	堅穴住居	5. 3×5. 0×0. 15	鉄滓・須恵器短須壺・杯 土師器片多い N18. 0° W	
SZ65	SK65	j20	落ち込み	1. 0×0. 4以上×0. 08	陶器 須恵器片・土師器片少量	中近世 以降
SK66	SK66	d39	土坑	2. 2×1. 4以上×0. 04	土師器片少量	奈良
SD67	SD67	f22	溝	0. 4×0. 09		擾乱
SD68	SD68	j24~26	溝	0. 7×0. 25	土師器片のみ	擾乱
SK69	SK69	k38	土坑	0. 3×0. 3×0. 4		
SD70	SD70	j 36	溝	0. 1×0. 06		
SK71	SK71	f 23	土坑	1. 1×0. 6×0. 14	土師器片少量	
SK72	SK72	e31	土坑	1. 1×0. 95×0. 23	SH32内土坑 土師器甕 須恵器杯・壺	飛鳥～ 奈良

第3表 遺構一覧表③

遺構番号	調査時番号	グリッド	性格	規模(単位:m)	備考	時期
SB99	SK73	g39	柱穴		SB99のピット	
SB96	SK74	g39	柱穴		SB96のピット	
SB100	SK75	e38	柱穴		SK13と同一 SB100のピット	
SD76	SD76	j 26	溝	0.9×0.16	土師器片・須恵器片 陶器片	擾乱
SD77	SD77	k 27, 28	溝	0.4×0.05	須恵器片	擾乱
SD78	SD78	j 30	溝	0.5×0.06		擾乱
SK79	SK79	j 25	土坑	1.0×0.9×0.17		擾乱
SD80	SD80	h 7, g8	溝	0.6×0.07	須恵器片	擾乱
SD81	SD81	e6	溝	(0.5~1.8)×0.12	土師器片・須恵器片 陶磁器片	擾乱
SD82	SD82	j3	溝	(0.35~0.5)×0.13	陶器片	擾乱
SD83	SD83	j6	溝	(0.5~0.7)×0.12	土師器片・須恵器片 陶磁器片	擾乱
SD84	SD84	k12	溝	(1.1~1.8)×0.25	土師器片・陶磁器片	擾乱
SH85	SH85	i15	堅穴住居	4.64×4.25以上×0.08	土師器壺 N2, 0° E	飛鳥～奈良
SK86	SK86	h15	土坑	2.95×2.15以上×0.3	SK87に切られる 土師器壺・須恵器片少量 サスカイト片	飛鳥～奈良
SK87	SK87	h15	土坑	2.95×2.8×0.12	SK86を切る 須恵器片・土師器片少量	飛鳥～奈良
SK88	SK88	j17	土坑	2.55×1.25×0.25	土師器壺・須恵器壺・蓋	飛鳥
SH89	SH89	c18	堅穴住居	3.28×2.7×0.2	土師器片少量 N2, 0° W	奈良？
SK90	SH90	g16, 17	土坑	3.8×3.4×0.25	土師器片少量 E10, 0° S	奈良？
SH91	SH91	c17	堅穴住居	3.25×3.7×0.2	土師器壺・台石 N29, 5° W	奈良
SD92	SD92	d18	溝	(0.7?~1.0?)×0.16	SD93に切られる 須恵器片・土師器片少量 陶器片	近世
SD93	SD93	d18	溝	(0.8~1.0)×0.2	SD92を切る	
SD94	SD94	k10	溝	(0.8~0.9)×0.1	須恵器片・土師器片少量	擾乱
SB95	SB95	e39, f38, 39, 40, g39, 40, 41	掘立柱 建物	5(1.85)間×3(1.6)間 N29° W	土師器壺・須恵器壺？ N28, 0° E	飛鳥～奈良
SK96	SK96	d17	土師器 焼成坑？	2.38×2.28×0.3	遺物なし	平安末期？

第4表 遺構一覧表④

遺構番号	調査時番号	グリッド	性格	規模(単位:m)	備考	時期
SB97	SB97	e17.18, f17	溝	0.4×0.04		擾乱
SB98	SB98	i12	竪穴住居	5.32×2.4以上×0.21	調査区外に伸びる 礫石? N13.0° W	飛鳥?
SB99	SB99	e39, f38, 39, 40, g39, 40, 41	掘立柱建物	5(1.95)間×3(1.6)間	調査区外に伸びる 須恵器片?・土師器片 N18.0° W	飛鳥~奈良
SB100	SB100	e38, 39, e38, 39	掘立柱建物	3(1.8)間以上×2(2.2)間以上	調査区外に伸びる 須恵器片?・土師器片 N21.0° W	飛鳥~奈良
SB101	SB101	g35, 36, h35, 36	掘立柱建物	2(1.95)間×3(1.8)間	須恵器片・土師器片 N48.5° W	飛鳥~奈良
SB102	SB102	g32, h31, 32	掘立柱建物	2(1.6)間×3(1.65)間	N5.5° W	奈良?
SB103	SB103	f30, g30, 31	掘立柱建物	2(1.8)間×3(1.8)間	N6.5° W	奈良?
SB104	SB104	i22, j22	掘立柱建物	2(1.5)間×2(1.8)間	土師器片のみ N6.0° W	飛鳥~奈良
SB105	SB105	j20, k20, 21	掘立柱建物	2(1.8)間以上×2(1.8)間	調査区外に伸びる 土師器片少量 N2.5° W	飛鳥~奈良
SB106	SB106	e20, 21, f20	掘立柱建物	2(1.6)間×2(1.6)間	縦柱建物 土師器片少量 N50.0° W	飛鳥~奈良
SH107	SH107	i6.7, j6	竪穴住居	4.4×4.25×0.18	N39.0° E	飛鳥?
SB108	SB108	d15, e15	掘立柱建物	2(1.65)間×2(1.6)間	土師器片少量 N6.0° E	飛鳥~奈良?
SB109	SB109	f15.16, g15.16	掘立柱建物	2(1.5)間×2(1.6)間	縦柱建物 N35.0° E	飛鳥~奈良?
SB110	SB110	h13.14, i13.14	掘立柱建物	3(1.2)間×3(1.2)間	縦柱建物の可能性 N19.0° E	飛鳥~奈良?
SB111	SB111	h12, i11, 12	掘立柱建物	2(1.55)間×2(1.8)間	縦柱建物 N17.5° W	飛鳥~奈良?
SB112	SB112	k13.14, 113	掘立柱建物	2(1.5)間×1(1.8)間以上	調査区外に伸びる N18.5° W	飛鳥~奈良?
SB113	SB113	k11.12, l11.12	掘立柱建物	2(1.7)間×2(1.7)間	縦柱建物 N4.5° E	飛鳥~奈良?
SB114	SB114	j13	掘立柱建物	2(1.25)間×1(2.1)間	土師器片のみ N54° E	飛鳥~奈良
SB115	SB115	l10.11	掘立柱建物	1(1.6)間以上×2(2.0)間	調査区外に伸びる N15.0° E	飛鳥~奈良?
SB116	SB116	k6.7	掘立柱建物	4(1.3)間以上×1(2.4)間	土師器片のみ N79.0° E	飛鳥~奈良?
-	SA117	j12	樹列	3(1.4~1.5)間		
-	SA118	i10.11	樹列	3(1.4~1.6)間		
SB119	SB119	e16, 17, f16, 17	掘立柱建物	3(2.1)間×2(1.8)間	N73.0° E	飛鳥~奈良?
SB120	SB120	e15	掘立柱建物	1(1.6)間以上×2(1.45)間	調査区外に伸びる N37.0° W	飛鳥~奈良?

第5表 遺構一覧表⑤

遺構番号	調査時番号	グリッド	性格	規模(単位:m)	備考	時期
SB121	SB121	d37, 38, e37, 38	獨立柱建物	2(2.0)間以上×2(2.1)間以上	調査区外に伸びる N19, 0° E	飛鳥～奈良？
-	SA122	i11, j11	柵列	2(1.2～1.4)間		
-	SA123	f14, e15	柵列	2(1.15)間		
SZ124	SK124	b2	落ち込み	1.22×0.96×0.04		
SB125	SB125	d30, 31, e30, 31	獨立柱建物	1(1.5)間以上×3(1.3)間	調査区外に伸びる N34, 5° E	飛鳥～奈良？
SH126	SH126	h45, 46, i45, 46	堅穴住居?	4.5×4.0×0.4	鉢溝 土師器皿・甕 須恵器杯・壺・蓋	奈良
SX127	SX127	g44	上部棺墓	3.7×3.4×0.22		弥生後期?
SH128	SH128	i46, 47, j46, 47	堅穴住居	3.9×3.0×0.35	土師器片少量 須恵器杯・甕	奈良
SX129	SD129	i44, 45, 46, j45, 46	方形周溝塗	周溝内側:6.1×3.3? 周溝:(0.5～0.6)×0.4	弥生土器片?	弥生後期
SD130	SD130	h47, i47	溝	0.7×0.4	SD143と同一 須恵器片・土師器片少量 山苔塗	奈良町
SD131	SD131	g49, 50, 51, h49, 50, i47, 48, j47	溝	(0.8～1.9)×0.33	土師器皿・甕 須恵器皿・壺・蓋	鍾倉
SD132	SD132	g50, 51, h49, 50, 51, i49, 50	溝	(0.8～1.1)×0.2	土師器皿	奈良?
SX133	SD133	h43, 44, i43, 44, 45, j43, 44	方形周溝塗	周溝内側:5.5×5.0 周溝:(0.86～1.6)×(0.25～0.4)		弥生後期
SK134	SK134	e44, f44	土師器成坑	1.63×1.14×0.27	土師器甕 須恵器高杯	古代
SX135	SX135	i45	土器棺墓	0.73×0.73×0.48		弥生後期
SH136	SH136	g47, 48, i48 h47, 48, 49	堅穴住居	5.0×4.5×0.23	土師器片のみ N13, 0° W	奈良
SH137	SH137	e45, 46, f45, 46	堅穴住居	5.0×1.5以上×0.23	SH139を切る 炭化物混入 土師器甕・須恵器甕	奈良
SD138	SD138	f46, 47	溝	0.4×0.2	須恵器片・土師器片少量	奈良
SH139	SK139	e46, g46, f45, 46,	堅穴住居	5.0×3.8×0.2	SH137に切られる 土師器甕 N17, 0° W	奈良
SH140	SH140	e45, 46, f45, 46, g45, 46	堅穴住居	3.8×1.59×0.15	SH137, 139に切られる 土師器皿?	奈良
SK141	SK141	h48, i48	カマド跡?	1.4×1.0×0.01	SH136のカマド跡? 土師器甕・須恵器杯・甕	飛鳥～奈良
SK142	SK142	i48, j48	堅穴住居?	2.0以上×1.8×0.17		奈良?
SD143	SD143	j45, 46	溝	(0.7～1.0)×0.07	SD130と同一	

第6表 遺構一覧表⑥

## IV 遺 物

今回の調査で出土した遺物は、整理箱(コンテナバット)にして70箱である。飛鳥から奈良時代の遺物が最も多い。以下、縄文時代から順に遺構毎に出土遺物について述べたいと思う。なお個別の遺物の詳細については遺物観察表を参照されたい。

### 1 縄文時代

S X 5 出土遺物(1) 1は縄文土器深鉢。口唇部が外反し、直下に幅広の貝殻による押圧がみられる突帯が認められる。晩期後半の馬見塚式に比定できる。

### 2 弥生時代

S X 1 出土遺物(2) 2は大形の弥生土器壺である。口縁部が欠失している。広口壺であろうか。後期に属するものと考えられる。

S X 2 出土遺物(3・4) 3・4は弥生土器広口壺である。3は胴部が強く張り出し、外傾する頭部

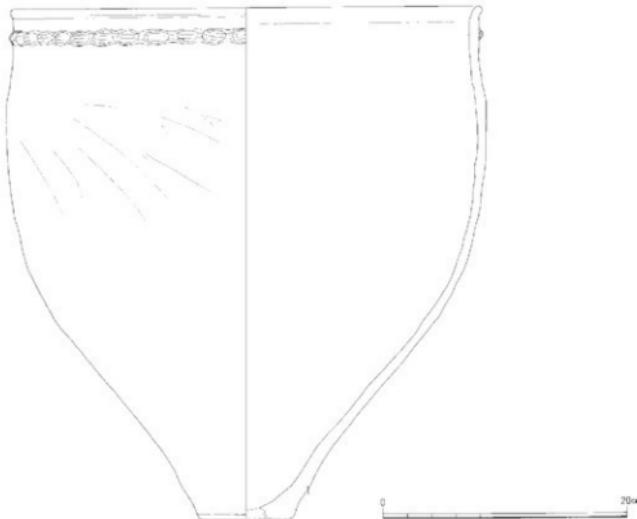
がとりつく。胴部下半に二次被熱の痕跡が明瞭に認められるが、口縁部には及んでいない。4は球形の胴部に外傾する頭部がとりつく。口縁端部は上下に面が広がり、その面に刻みが認められる。底部に穿孔がみられる。ともに後期のものと思われる。

S X 135 出土遺物(5・6) 5は弥生土器広口壺である。胴部はほぼ球形で、頭部は大きく外傾するが、口縁部は欠失する。6は弥生土器壺である。胴部下半から底部にかけて残存する。外面の一部にハケメが認められた。ともに後期に属すると思われる。

S X 127 出土遺物(7・8) 7・8は弥生土器壺である。7は頭部に2条突帯、胴部上半には柳描横線文が認められる。8は弥生土器壺である。胴部は球形を呈するが、胴部上半に柳描横線文が認められる。いずれも後期のものと考えられる。

### 3 古代から中世

S B 36 出土遺物(9) 9は須恵器蓋である。口縁



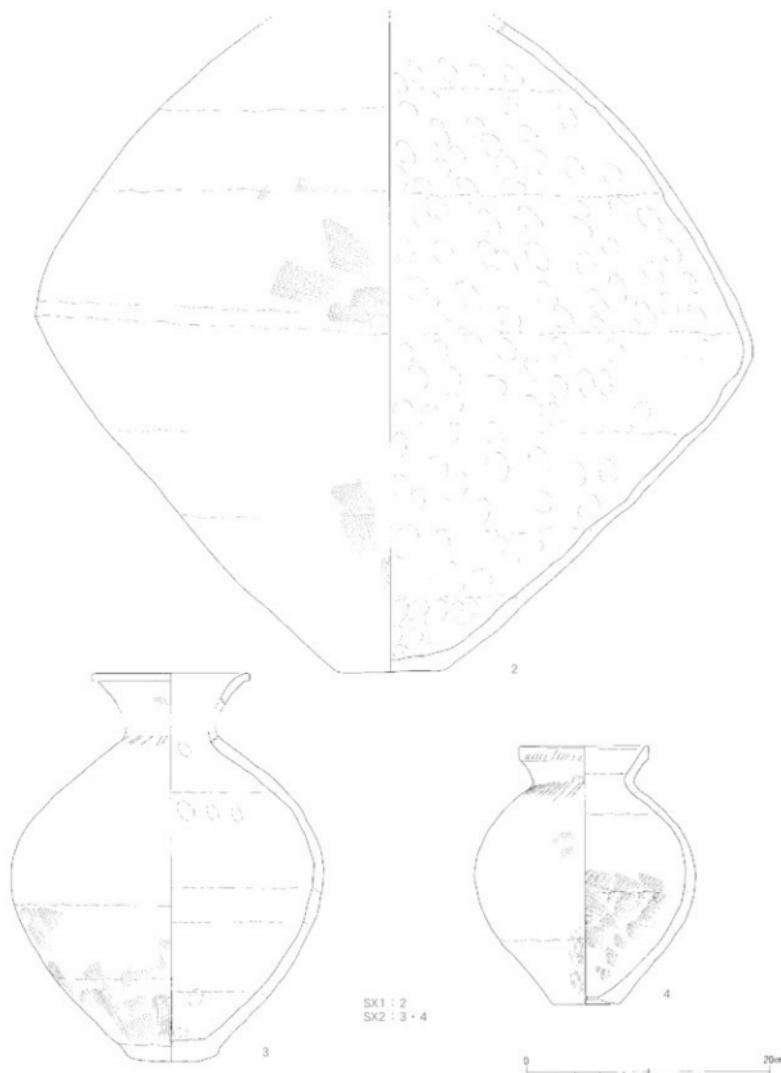
第34図 SX 5 出土遺物実測図 (1 : 4)

部が残るのみである。奈良時代前半のものと考えられる。

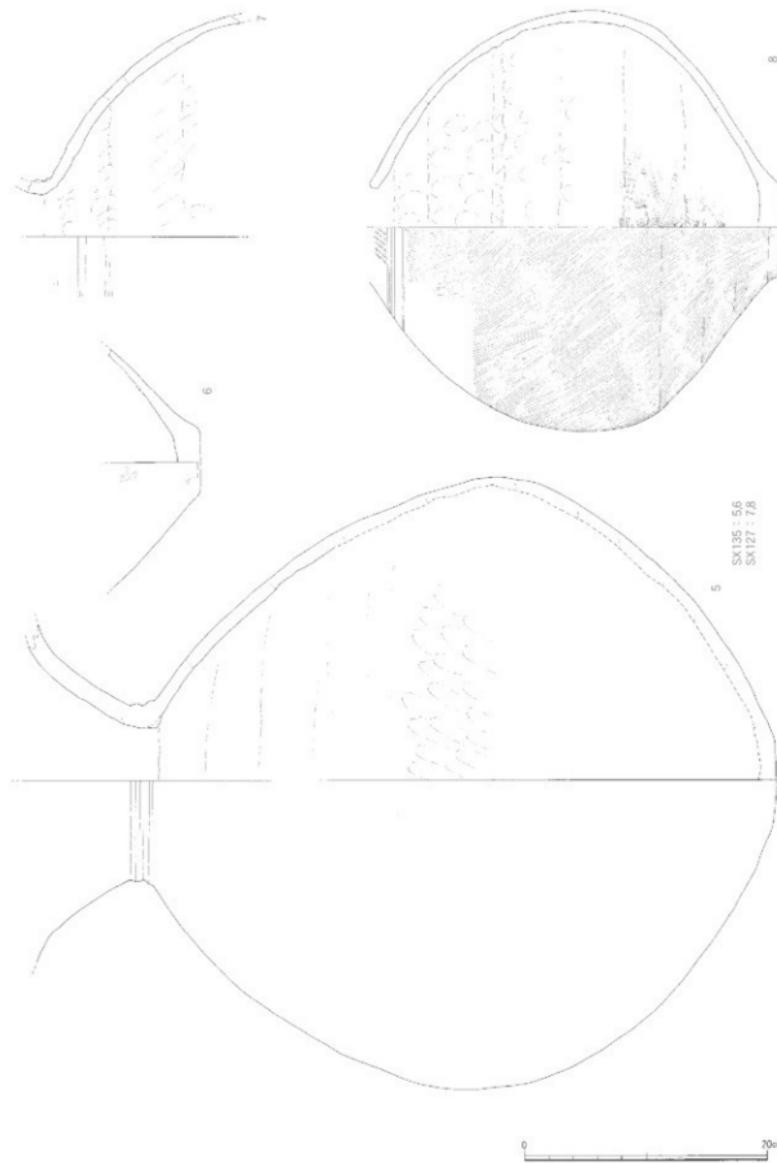
S B 100出土遺物(10) 10は土師器甕の口縁部小

片である。飛鳥時代のものであろうか。

S B 101出土遺物(11・12) 11は土師器甕である。口縁部が残るのみである。内外面ともにハケメ



第35図 SX1、SX2出土遺物実測図 (1:4)



第36図 SX127、135出土遺物実測図 (1 : 4)

がみられる。12は須恵器杯である。平坦な底部から口縁部が直線的に立ち上がる。いずれも飛鳥から奈良時代前半に属するものといえよう。

S H 26 出土遺物(13~16) 13は土師器甕。14は須恵器蓋。ツマミが残存する。15は直線的に口縁部が立ち上がる須恵器杯である。16は盤であろうか。いずれも飛鳥から奈良時代前半のものであろう。

S H 28 出土遺物(17~21) 17・18は土師器甕。口縁部が残るのみである。19・20は土師器皿である。21は須恵器台付杯である。これらは奈良時代前半のものと考えられる。

S H 32 出土遺物(22~26) 22・23は須恵器蓋である。22はツマミがみられず、23にはツマミが認められる。24は土師器台付椀である。25は切目石鍾である。26は砥石である。これらは飛鳥から奈良時代前半のものと考えられる。

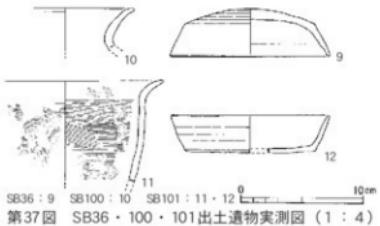
S H 35 出土遺物(27・28) 27は須恵器高杯の杯部である。内面に自然釉がかかる。28は土鍾である。飛鳥時代のものであろうか。

S H 42 出土遺物(29) 29は円筒状の土鍾である。

S H 43 出土遺物(30) 30は古式土師器蓋であろうか。調整も摩滅のため判然としない。古墳時代のものと考えられる。混入遺物であろうか。

S H 46 出土遺物(31~33) 31は土師器杯である。内面には放射状暗文が認められる。32は土師器瓶であろうか。ラバッ状に開く器形である。33は須恵器蓋である。飛鳥時代に属するものであろう。

S H 47 出土遺物(34~38) 34・35は土師器甕の口縁部小片である。36は土師器瓶である。口縁部が少し内湾している。37は須恵器蓋であろうか。38は石製品。石斧もしくは石斧未製品であろうか。34~37は飛鳥から奈良時代に属するものと考えられるが、38は時期が遅い。



第37図 SB36・100・101出土遺物実測図 (1 : 4)

S H 52 出土遺物(39・40) 39・40はいずれも円筒状の土鍾である。

S H 64 出土遺物(41~47) 41~43は小形で丸底の土師器甕と考えられる。44は須恵器蓋である。45は須恵器杯身である。46は須恵器短頸壺である。47は須恵器壺底部である。いずれも飛鳥時代のものと考えられる。

S H 91 出土遺物(48~50) 48・49は土師器甕の口縁部小片である。飛鳥から奈良時代に属するものと思われる。50は台石であろうか。

S H 98 出土遺物(51) 51は磨石。方形の面に磨痕が残る。古代より時期は遅るものであろうか。

S H 126 出土遺物(52~54) 52は土師器甕。53は須恵器蓋。ヘラ記号の一部が認められる。52・53は飛鳥から奈良時代のものとして良いだろう。54は陶器山茶碗。重複する擾乱部分からの混入遺物だろう。

S H 139 出土遺物(55~60) 55~58は土師器甕である。55・56は小形、57・58は器高が低く扁平な器形のものである。いずれも奈良時代のものと考えて良いだろう。59・60は用途不明の石製品である。

S K 15 出土遺物(61~65) 61~65はロクロ土師器碗である。底部には糸切り痕が認められる。平安時代後半のものと考えられる。66は須恵器平瓶である。時期が若干遅るものと考えられる。

S K 34 出土遺物(67) 土師器鉢である。口縁部が残るのみである。

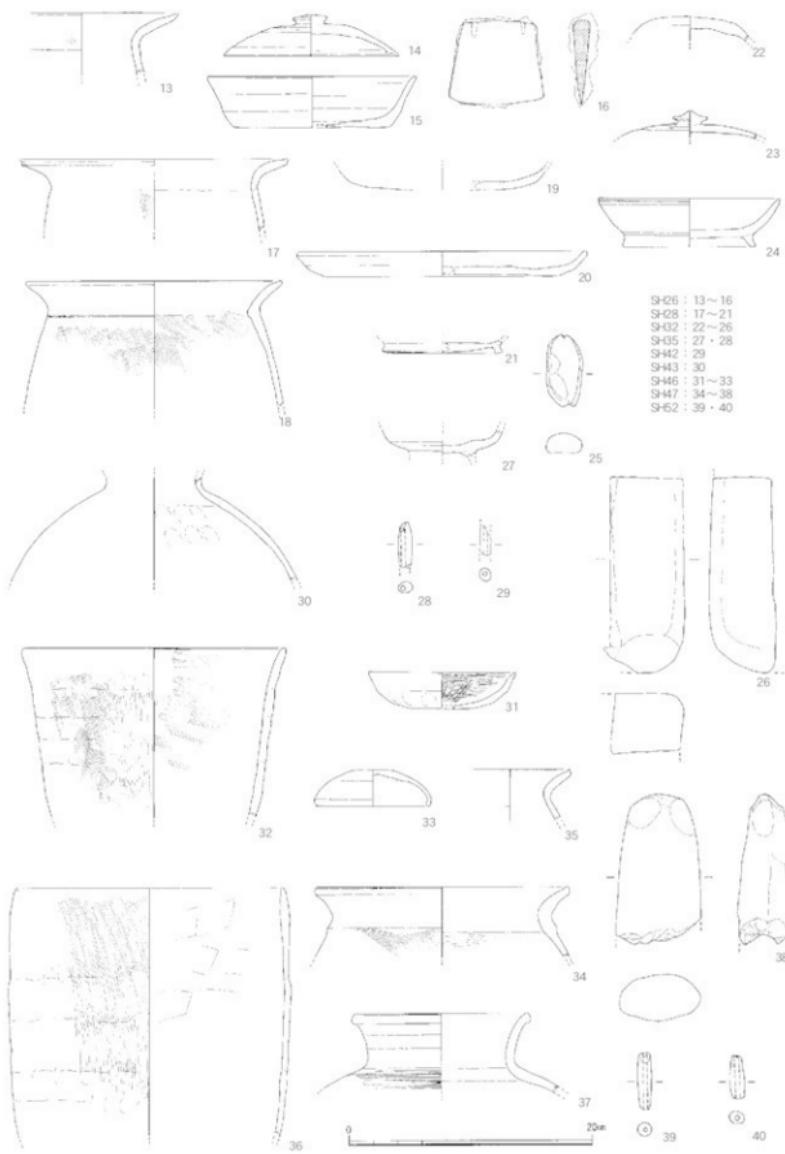
S K 72 出土遺物(68) 須恵器蓋である。飛鳥時代のものであろう。

S K 86 出土遺物(69) 須恵器杯身である。かえり部分が短く内傾して立ち上がる。飛鳥時代のものであろう。

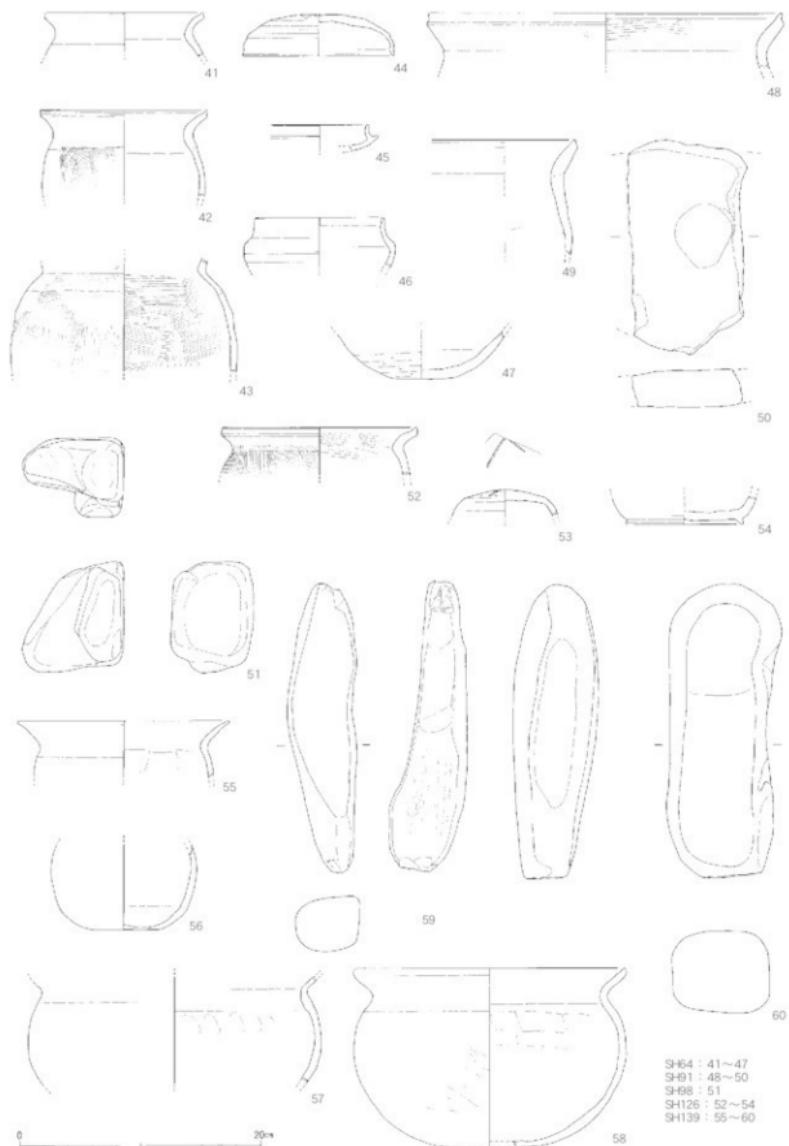
S K 88 出土遺物(70~72) 70・71は土師器甕である。大きく外反する頸部で、口縁端部に面をもつ。調整は摩滅のため判然としないが、内面にはハケメが認められた。72は宝珠つまりのつく須恵器蓋である。いずれも飛鳥時代のものと考えられる。

S K 134 出土遺物(73) 須恵器高杯脚部である。飛鳥時代のものだろう。

S D 9 出土遺物(74・75) 74は須恵器杯蓋。へ



第38図 SX26・28・32・35・42・43・46・47・52出土遺物実測図 (1 : 4)



第39図 SH64・91・98・126・139出土遺物実測図 (1 : 4)

テ記号「×」が天井部に認められる。75は須恵器杯身。これらは飛鳥時代に属すると考えられる。

S D 18出土遺物(76~80) 76は土師器蓋である。77・78は須恵器蓋。ツマミはともに認められない。79は須恵器高杯脚部である。80は円筒状の土錘である。これらは、飛鳥時代に属すると考えられるものである。

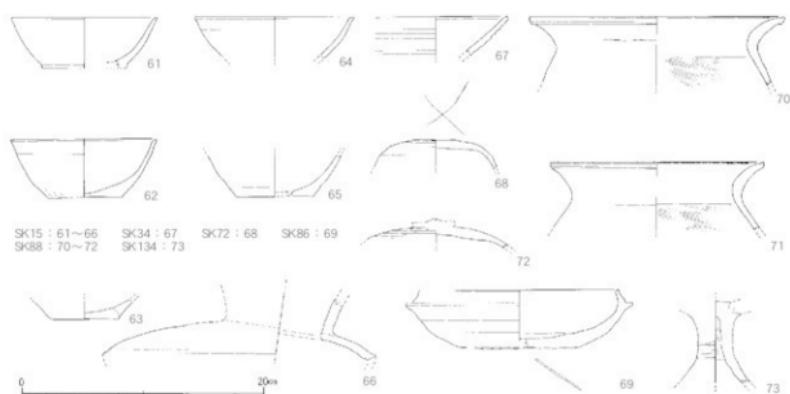
S D 131出土遺物(81・82) 81は土師器皿である。82は陶器山茶椀底部片である。低い高台が認められる。これらは鎌倉時代のものであろうか。

柱穴出土遺物(83~96) 83はc 16pit2出土の石製品。砥石であろうか。84・85はe 36pit3から出土である。84は須恵器蓋、85は須恵器杯。86はh38pit1出土の須恵器甕口縁部小片である。これらは奈良時代のものと考えられる。87はj 42pit1の土師器高杯脚部である。短い脚部に面取りがみられる。88はi20pit1出土の土師器甕である。89はe31pit3出土の土師器甕。器形は57・58と同様の特徴を持つが、89はより明瞭な口縁端部の面取りが認められる。90はe31pit4出土の土師器甕である。91はe37pit7出土の土師器甕である。大きく外反する頭部に、面取りした口縁端部がつく。これらは奈良時代のものと思われる。92はh44pit3より出土の口クロ土師器椀である。底部に糸切り痕が認められる。平安時代末期のものであろう。93~96は円筒状の

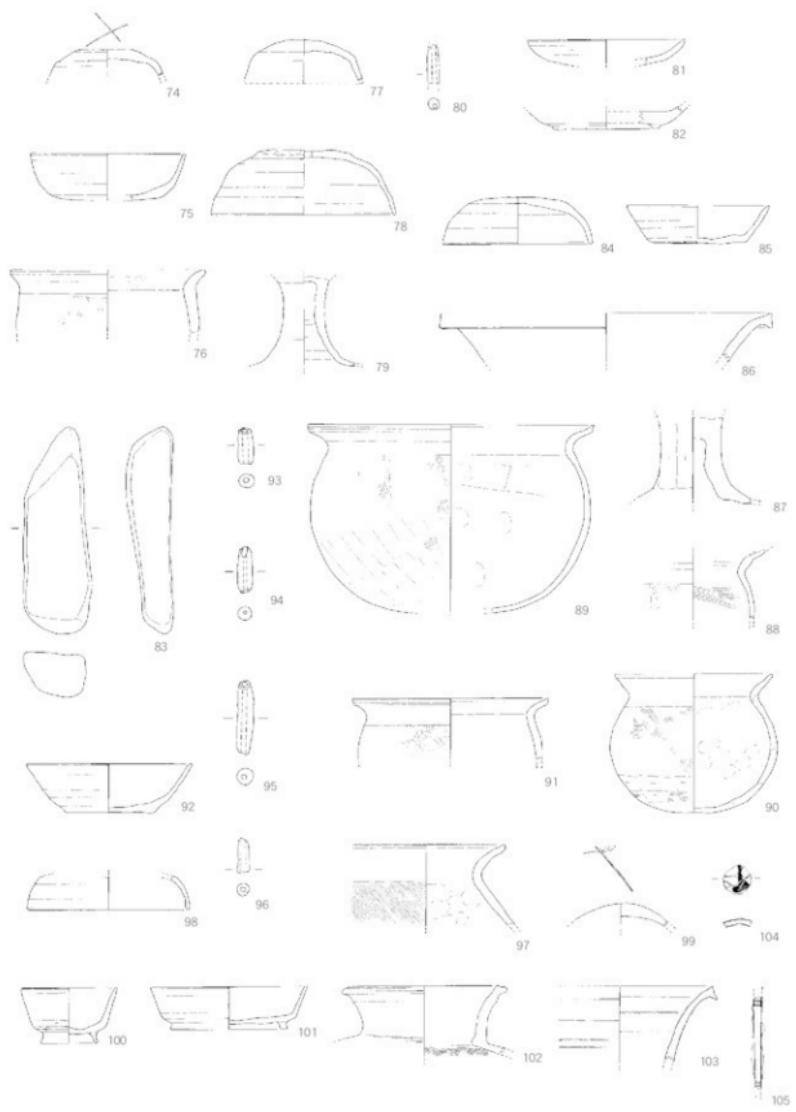
土錘である。93はi27pit2出土、94はe38pit2出土、95はg37pit4出土、96はe39pit8出土である。これら以外にも、g32pit1から石巒が1点出土している。法量は、長さ1.56cm、幅1.55cm、厚さ0.32cm、重量0.65g。石材はサヌカイト。ほぼ完形である。縄文時代のものか。

包含層出土遺物(97~105) 97は土師器甕の口縁部片である。外反する口縁部の端部には面取りが認められる。奈良時代に属するだろうか。98・99は須恵器蓋である。いずれも奈良時代に属するであろう。100は須恵器杯である。小さい杯部に高台がつく。101は須恵器台付杯である。奈良時代のものだろう。102・103は須恵器甕である。奈良時代に属するものと考えられる。104は染付磁器の転用と考えられる加工円盤である。立体的に屈曲が認められることから、椀を加工したものと考えられる。器壁は乳白色で染付の発色もよいが、断面は褐色を呈する。近世以降のものと思われる。105は鉄釘である。断面が方形で、近世以前のものと考えられる。これら以外にも、包含層から石巒が1点出土している。法量は長さ1.92cm、幅1.51cm、厚さ0.29cm、重量0.66gがある。石材はサヌカイト。ほぼ完形である。縄文時代のものか。古代のものと考えられるフイゴ羽口も出土した。

(伊藤文彦)



第40図 SK15・34・72・86・88・134出土遺物実測図 (1 : 4)



第41図 SD9・18・131・ピット・包含層出土遺物実測図 (1 : 4)

報告 番号	実測 番号	種類	器種	出土 位置	法 規(cm)			測定法	粘土	焼成	色 調	残 存	備考
					口径	底径	器高						
1 -01	001	縄文 土器	縄跡	SX5	38.8	7.8	42.0	外:ヨコナダ 内:ヨコナダ 内:ヨコナダ 内:ヨコナダ	粗	並	外:にぶい・中7.5YR7/4 にぶい・黄緑10YR7/3 ・6/3 内:黄緑10YR7/1 ・4/1 内:黄緑10YR7/1 ・5/1 内:黄緑10YR7/3	上縁3/12 底部16/12	上縁存
2 -01	005	弥生 土器	煮	SX1	体部 59	9.0		外:ハケ残る 内:オナシ・ナデ	粗	並	明黄緑7.5YR7/6 暗7.5YR6/6 にぶい・黄緑10YR7/4	底部10/12	
3 -01	002	弥生 土器	煮	SX2	12.0	7.7	12.0 最大 25.3	外:ハケへ・本/cm 刺突 内:ナゲ オナシ	粗	並	にぶい・黄後10YR7/4 暗7.5YR6/6	口縁4/12 体部10/12 底部充存	
4 -01	003	弥生 土器	煮	SX2	10.6 体部 最大 18.1	5.2	21.0	外:刺突・ハケ 内:ナシ・ナデ ハケ11木/cm	粗	並	暗7.5YR6/6	口縁小片 体部9/12 底部 充存	
5 -01	026	弥生 土器	煮	SX135		7.0		外:不明瞭 内:ナシ・オナシ 工具ナデ	粗	並	にぶい・橙7.5YR7/4 にぶい・暗7.5YR5/4 明透7.5YR5/6	口縁3/12 体部10/12	
6 -03	023	弥生 土器	煮	SX135		5.5		外:ハケ残跡 内:ナシ	粗	並		底部充存	
7 -02	023	弥生 土器	煮	SX127				外:クシ抜き横断 内:オナシ・ナデ	やや 粗	やや 粗	外:にぶい・黄緑10YR6/4 内:暗黄2.5YR3/2	口縁部のみ 欠	
8 -01	023	弥生 土器	煮	SX127	体部 34.6	7.5		外:刺突・ナデ クシ抜き横断 ハラ本/cm 内:オナシ・ナデ ハラ10木/cm	やや 粗	並	浅黄緑10YR8/3 にぶい・黄緑10YR6/4	口縁部のみ 欠	黒皮
9 -06	016	須恵器	蓋	SB36	12.8		3.0	外:ロクロナデ ハラ記号 内:ロクロナデ	やや 粗	やや 粗	灰黄2.5Y7/2・6/2	口縁小片	
10 -03	007	土師器	深	SB100				内:ヨコナデ 内:ヨコナデ	粗	並	淡黄緑10YR8/4	口縁小片	
11 -02	007	土師器	深	SB101				外:ヨコナデ タテハケ 内:ハケ・ナデ ヨコスケ9木/cm ヨコスケ9木/cm 内:ヨコナデ	粗	並	外:にぶい・橙5YR6/4 にぶい・赤5YR3/4 内:淡黄緑10YR5/4	口縁小片	
12 -04	016	須恵器	杯	SB101	12.9	10.7	3.1	外:ロクロナデ ロクロケズリ 内:ロクロナデ	やや 粗	良	灰白5Y7/1-7/2	口縁2/12 底部4/12	
13 -03	009	土師器	深	SB26				外:ヨコナデ 内:ヨコナデ・ナデ	粗	良		口縁小片	
14 -02	004	須恵器	蓋	SB26	14.3	ツバミ 径 2.7	3.4	外:貼付ナデ ロクロケズリ 内:ロクロナデ	やや 粗	並	外:灰黄2.5YR7/2 内:灰白2.5YR7/1 白10YR7/1	口縁11/12	
15 -03	004	須恵器	杯	SB26	17.1		4.1	外:ロクロナデ ハラ切迹 内:ロクロナデ	やや 粗	並	外:7.5Y6/1 内:7.5Y6/1 灰N4/0	口縁4/12	歪み穴
16 -02	027	鉄製品	軸	SB26	長6.9	幅7.8	厚1.3						
17 -02	009	土師器	深	SB28	20.7			外:ヨコナデ ハケ	粗	良	にぶい・暗2.5YR5/3	口縁小片	
18 -05	009	土師器	深	SB28	20.8	頸部 17.4		外:ヨコナデ ハラ本/cm 内:ヨコナデ ハケ	粗	良	外:にぶい・褐7.5YR6/3 内:にぶい・褐7.5YR5/4	口縁小片 頸部3/12	
19 -06	018	土師器	皿	SB28				外:ミガキ ヨコナデ 内:ヨコナデ ナデ	やや 粗	良	にぶい・赤褐2.5YR5/4 ・2.5YR4/4	底部3/12	
20 -07	008	土師器	皿	SB28	23.6		2.00	外:ミガキ ヨコナデ 内:ヨコナデ ナデ	やや 粗	良	外:にぶい・褐7.5YR5/4 内:褐5YR7/6	口縁2/12	
21 -04	008	須恵器	杯	SB28			9.0	外:ヨコナデ 系切り・ナデ 内:ロクロナデ	やや 粗	良	外:褐7.5YR6/2 にぶい・褐7.5YR6/3 内:にぶい・褐7.5YR7/3 灰褐7.5YR6/2	高台6/12	

第7表 出土遺物観察表①

報告 番号	実測 番号	種類	基盤	出土 位置	法 種 (cm)			調整技法	鉛土	焼成	色 調	状 存	備考	
					口径	底径	高さ							
22 025 -04	瓦	瓦	SH32					内:クロケヅリ 内:コロナダ	やや 密	やや 不均	灰白10YR8/2	小片		
23 018 -05	瓦	瓦	SH32	フマミ 壁2.8				外:クロケヅリ ロコロナダ 内:クロロナダ	やや 良	良	灰黄2.5Y6/2	小片		
24 064 -01	土師器	桶	SH32	15.0	11.0	4.0		外:クロロナダ 高台焼付ナダ ナダ 内:コロナダ	やや 密	並	橙5Y8/6	高台6/12		
25 014 -01	石製品	切目石	SH32	長5.0	幅2.0	厚1.6								
26 012 -02	石製品	砥石	SH32	残存長 16.0	残存幅 5.0									
27 007 -08	瓦	高杯 陶器	SH35					高台 貼付部 5.5	外:クロロナダ 貼付ナダ 内:クロロナダ	やや 密	良	黄灰2.5Y5/1・4/1	高台貼 付部4/12	内面 自然釉
28 006 -08	土製品	土鍤	SH35	残存長 3.8	幅 1.15	厚 2.9g			外:クロロナダ 内:クロロナダ	やや 密	並	橙灰2.5Y8/3		
29 008 -09	土製品	土鍤	SH42	残存長 2.6	幅 1.0	厚 1.9g			外:クロロナダ 内:クロロナダ	やや 密	並	淡灰2.5Y5/1 黄灰2.5Y5/1		
30 009 -01	土師器	壺	SH43	頭部 5.4				外:ミロナダ 内:ミロナダ ナダ・オチニ	やや 密	良	外:淡青緑10Y8/4 内:青緑10Y8/6 内:黒褐2.5Y3/1	頭部4/12		
31 010 -03	土師器	杯	SH45	12.0			3.0	外:ミロナダ ナダ・オチニ 内:ミロナダ ミカキ・繪文	やや 密	良	明泰陽2.5Y5/6	口縁3/12		
32 010 -01	土師器	瓶	SH46	21.6				外:ミロナダ ハケ10本/cm 内:ナダ ハケ10本/cm	粗	並	外:黄緑10Y8/3 内:ぶい黄緑10Y7/3 灰黄褐10Y6/2 内:ぶい黄緑10Y7/4	口縁2/12		
33 011 -02	瓦	瓦	SH46	9.3			3.0	外:画切り クロロナダ 内:クロロナダ	やや 密	良	外:黄灰2.5Y6/1 内:NC4/0 内:灰5Y6/1・灰3Y5/1	口縁3/12		
34 019 -04	土師器	甕	SH47	20.6				外:ミロナダ ハケ5本/cm 内:ミロナダ ハケ	粗	良	找黄緑10Y8/3 内:結灰3Y3/0	口縁3/12		
35 008 -08	土作器	甕	SH47					外:ミロナダ 内:ミロナダ	やや 密	良	地7.5Y8/4 地7.5Y8/7/6 浅黄褐10Y8/4	口縁小片		
36 011 -01	土作器	甕	SH47	21.8				外:ミロナダ タデハケ5本/cm 内:ミロナダ 工具ナダ	やや 粗	良	外:淡黄緑10Y8/4 内:NC4/0 内:淡黄緑10Y8/4	口縁2/12		
37 020 -02	瓦	瓦	SH47	14.0				外:クロロナダ カコメ 内:クロロナダ	やや 密	良	灰白3Y8/0	口縁1/12		
38 014 -02	石製品	石斧	SH47	残存長 12.2	最大幅 6.9	最大厚 3.8								
39 008 -10	土製品	土鍤	SH52											
40 006 -06	土製品	土鍤	SH52	全长 3.5	幅1.2	高さ 4.2g								
41 022 -02	土作器	甕	SH64	12.8	頭部 11.2			外:ミロナダ 不明瞭 内:ミロナダ 不明瞭	やや 粗	並	にぶい黄緑7.5Y8/7/4	口縁4/12 頭部4/12		
42 025 -01	土作器	甕	SH64	13.5				外:ミロナダ ハケ6本/cm 内:ミロナダ ナダ	粗	良	外:淡黄緑10Y6/6・6/8 内:淡黄緑7.5Y8/4 内:NC4/0 内:淡黄緑10Y6/6	口縁8/12		
43 010 -02	土作器	甕	SH64					外:ナダ ハケ5本/cm 内:ナダ・ケヅリ ハラ詰め 内:ミロナダ	やや 密	良	外:NC6/0 内:灰白3Y7/0	体部片		
44 008 -03	瓦	瓦	SH64	12.4			3.4	外:クロロケヅリ ロコロナダ ハラ詰め 内:ミロナダ	やや 粗	良	外:NC6/0 内:灰白3Y7/0	口縁3/12		

第8表 出土遺物観察表②

報告 番号	実測 番号	種類	器種	出土 位置	法 規 (cm)			調整技術	粘土	焼成	色 調	残 存	備考
					口径	底径	高さ						
45 -020	須恵器	鉢	SH84					外:コクノナダ 内:コクノナダ	やや 密	やや 良	灰36/0	口縁小片	
46 -022	須恵器	鉢蓋	SH84	10.4	頸部 11.0 体部 12.4			外:コクノナダ 内:コクノナダ	密	良	灰7.5Y6/1	口縁小片 陶器1/12 体部1/12	
47 -011	須恵器	鉢	SH84					外:コクノナダ 内:コクノナダ	やや 粗	やや 良	外:灰白5Y7/1 内:灰白5Y7/1	底部10/12	
48 -017	土師器	甕	SH81	28.9				外:ヨコナダ ハケ 内:ヨコナダ ハケナダ	やや 粗	やや 良	橙7.5Y8/6	口縁小片	
49 -018	土師器	甕	SH81					不规则	やや 粗	やや 不良	淡黄褐色10Y8/4	口縁小片	
50 -012	石製品	台石	SH81	残存部 17.4	残存部 3.0								
51 -021	石製品	磨石	SH98										
52 -019	土師器	甕	SH126	15.8				外:ヨコナダ ハケを一本/cm 内:ハケを一本/cm	やや 粗	やや 良	にふい橙7.5Y8/4 淡黄褐色7.5Y8/4	口縁8/12	
53 -022	須恵器	盞	SH126					外:コクノナダ コクノナダ ヘラ配置 内:コクノナダ	密	良	灰白2.5Y7/2	小片	
54 -020	陶器	山茶鉢	碗	SH126		高台部 9.6		外:ヨコナダ 系切り 高台付ナダ ナダ 内:ヨコナダ	やや 粗	やや 不良	灰白2.5Y8/2	高台3/12	
55 -025	土師器	甕	SH139	17.2	頸部 12.6			外:ヨコナダ ナダ? 内:ヨコナダ ヨコナダ	粗	良	外:淡黄褐色7.5Y8/4 にふい橙7.5Y8/4 内:淡黄褐色10Y8/4 にふい黃褐色10Y8/3	口縁1/12 底部3/12	
56 -024	土師器	甕	SH139					外:ナダ・深腹 内:ナダ・深腹	粗	良	外:淡黄褐色2.5Y8/4 淡黄褐色10Y8/4 淡黄褐色10Y8/4 内:淡黄褐色10Y8/6 明黄褐色10Y8/6	底部8/12	
57 -024	土師器	甕	SH139	頸部 22.0				外:ヨコナダ 深腹不明 内:ヨコナダ ナダ? オカラ?	粗	良		胴部3/12	
58 -024	土師器	甕	SH139	22.2			14.7	外:ヨコナダ ハケ? ケズ? 内:ヨコナダ ナダ?	粗	良	外:淡黄褐色10Y8/3 内:淡黄褐色10Y8/3 にふい褐7.5Y8/4 断:灰坑3/0	口縁3/12	
59 -015	石製品	不明	SH139	最大幅 23.8	最大幅 5.3	4.4							
60 -013	石製品	不明	SH139	24.0	幅 7.9	~9.7	9.6.7						
61 -018	土師器	碗	SK15	11.8	6.8	6.7		外:コクノナダ 系切り 内:コクノナダ	やや 密	やや 良	橙7.5Y8/6	口縁3/12	
62 -010	土師器	碗	SK15	12.0	6.0	4.9		外:ヨコナダ ナダ・オサエ 系切り 内:ヨコナダ ナダ	やや 密	やや 良	外:橙5Y8/6 にふい褐7.5Y8/4 内:橙5Y8/6 底にふい褐7.5Y8/3	口縁6/12 底部8/12 底部先作	
63 -018	土師器	碗	SK15					外:ヨコナダ 系切り 内:ヨコナダ	やや 密	やや 良	外:淡黄褐色10Y8/4 内:橙7.5Y8/6	底部9/12	
64 -018	土師器	碗	SK15	12.4				クロノナダ	やや 密	やや 良	淡黄褐色7.5Y8/6	口縁3/12	
65 -018	土師器	碗	SK15		6.2			外:ヨコナダ 系切り直 内:ヨコナダ	やや 密	やや 良	橙7.5Y8/6	底部3/12	
66 -022	須恵器	平瓶	SK15		頸部 9.6	体部 22.5		外:ヨコナダ 内:ヨコナダ	やや 密	良	灰3Y6/1 + 5/1	小片	

第9表 出土遺物観察表③

組内 番号	実測 番号	種類	器種	出土位 置	法 長(cm)			調整技法	胎土	焼成	色 調	現 存	備考
					口径	底径	高さ						
67	007 -04	土師器	鉢	SK34				外:三ツ口ナデ 内:三ツ口ナデ	やや 密	並	橙SYR7/6	口縁小片	
68	017 -03	須恵器	蓋	SK72				外:へタ切り ヘラ型 ロクロケズリ ロクロナナデ 内:ロクロナナデ	やや 粗	やや 良	外:淡黄2.5Y8/3 内:にぶい黄橙10YR7/4	小片	
69	016 -02	須恵器	杯身	SK86	16.4		4.8	外:ロクロナナデ ヘラ切り ナダ・ヘラ切記号 内:ロクロナナデ ナダ	やや 密	良	外:灰5Y6/1 内:灰5Y6/1	口縁小片	
70	006 -01	土師器	盤	SE88	20.7	顕高 16.4		外:三ツ口ナデ 内:三ツ口ナデ ハケ	やや 密	並	にぶい黄橙10YR7/4 + 6/4	口縁1/12 頭部2/12	
71	022 -01	土師器	甕	SK88	17.4	顕高 13.9		外:三ツ口ナデ ハケ 内:三ツ口ナデ ハケ7本(cm)	やや 密	並	にぶい黄橙10YR7/4	口縁3/12 頭部3/12	
72	007 -07	須恵器	蓋	SK88				外:ロクロケズリ 内:方角ナナデ ロクロナナデ	やや 密	良	灰白10Y7/1	小片	
73	020 -03	須恵器	高杯	SK134				外:ロクロナナデ 内:ロクロナナデ	やや 密	やや 不良	灰白5Y7/0	脚部8/12	
74	007 -06	須恵器	蓋	SD9				外:へタ切り ヘラ型 ナダ ロクロナナデ ロクロケズリ 内:ロクロナナデ	やや 密	良	灰5Y6/1 + 5/1	小片	
75	007 -09	須恵器	杯身	SD9	12.6		3.85	外:へタ切り ナダ ロクロナナデ 内:良ナダ ロクロナナデ	やや 密	良	灰7.5Y6/1	口縁1/12	
76	006 -02	土師器	盤	SD18	15.6	顕高 14.4		外:三ツ口ナデ タヘハカルム/0.8cm 内:三ツ口ナデ ハケ4本(cm)	粗	並	にぶい橙7.5YR6/4	口縁1/12 頭部2/12	
77	006 -03	須恵器	蓋	SD18	9.8		3.5	外:へタ切り ナダ ロクロナナデ 内:ロクロナナデ	やや 粗	並	灰白2.5Y8/2 + 7/1	口縁3/12	
78	006 -05	須恵器	蓋	SD18	15.0		5.4	外:ナダ ヘラケズリ ロクロナナデ 内:ロクロナナデ	密	良	灰10Y6/1	口縁2/12	
79	021 -02	須恵器	高杯	SD18				外:ロクロナナデ 三ツ口ナデ 内:ロクロナナデ 三ツ口ナデ	やや 粗	やや 不良	外:橙2.5YR7/6 内:灰5Y7/6	脚部8/12	
80	006 -07	土製品	土鍋	SD18	保存長 3.2	幅1.0	重畠 2.3g	外:三ツ口ナデ ナダ	やや 粗	並	浅黄褐10YRS/3		
81	006 -05	土師器	皿	SD131	13.0		残2.1	外:三ツ口ナデ ナダ	密	良	外:橙5YR7/6 内:橙2.5YR7/6	口縁2/12	
82	008 -06	陶器 山茶柄	碗	SD131		高台型 8.6		外:ロクロナナデ ナダ 貼付ナナデ 内:ロクロナナデ	やや 粗	良	灰白10YR8/2 浅黄褐10YR8/3	底部小片	
83	014 -03	石製品	不明	c16 P2	最大長 17.0	最大幅 5.0	最大厚 3.3						
84	023 -04	須恵器	蓋	e36 P3	12.0 ~ 12.6		3.9	外:へタ切り ナダ ロクロナナデ 内:ナダ	やや 粗	やや 良	灰5Y5/1 + 灰5Y6/0	口縁9/12	
85	016 -03	須恵器	杯	e36 P3	11.5	7.5	3.1	外:ロクロナナデ ヘラ切り 内:ロクロナナデ	やや 密	不良	灰白2.5Y8/2 灰10Y6/1	口縁4/12	
86	016 -01	須恵器	甕	E38 P1	27.0			外:ロクロナナデ 内:ロクロナナデ	やや 密	やや 良	外:灰5Y6/1 内:灰5Y6/1	口縁2/12	

第10表 出土遺物観察表④

番号 番号	実測 番号	種類	器種	出土 位置	寸 径(cm)			測定技法	粘土	焼成	色 調	残 存	備考
					口径	底径	器高						
87 -03	上師器	高杯	J42 F1					外:ケズリ ヨコナデ 内:ナデ・溝滅	やや 粗	やや 良	灰7.5YR7/6	舞5B/12	
88 -04	土師器	甕	I20 F1					外:ヨコナデ ハゲ 内:ハケ3本/cm ハゲ7本/cm	やや 粗	やや 良	外:浅黄褐10YR8/3 内:淡赤褐2.5YR7/4	口縁小片	
89 -01	土師器	甕	e31 F3	23.7	体部 23.6			外:ヨコナデ ケズリ・ハゲ 内:ヨコナデ・ナデ	やや 粗	やや 不良	灰黃褐10YR7/6 黃褐10YR8/0	口縁2/12	
90 -03	土師器	甕	e31 F4	12.5	頭部 10.6 体部 13.8	11.4		外:ヨコナデ ハケ・ケズリ 内:ヨコナデ オサ・ナデ	粗	並	にぶい黄褐10YR7/4	口縁3/12 底部3/12 体部6/12	
91 -03	土師器	甕	e37 F7	16.0				外:ヨコナデ ハケ6本/cm 内:ヨコナデ	やや 粗	やや 良	外:淡赤褐2.5YR7/4 内:淡黃褐10YR8/4	口縁2/12	
92 -04	土師器	甕	b44 F3	13.4	7.2	4.1		外:ロクロナデ 糸切り 内:ロクロナデ	やや 粗	やや 良	外:燒5Y 内:灰7.5YR7/6	口縁3/12 底部充存	
93 -07	土製品	土瓶	I27 F2	長3.0	幅1.3	2.56		蓋	やや 粗	やや 良	灰白2.5Y8/2		
94 -03	土製品	土瓶	e29 F2	残存長 3.5	幅1.1	4.55		蓋	良		にぶい褐色3.5YR8/4 にぶい黃褐10YR7/4		
95 -05	土製品	土瓶	I27 F4	残存長 6.1	幅1.3	9.28		蓋	やや 粗	やや 良	灰黃褐10YR5/2 灰黃褐10YR6/2		
96 -06	土製品	土瓶	e39 F8	残2.5	幅1.1	2.59		蓋	やや 粗	やや 良	淡黃2.5Y8/3		
97 -01	土師器	甕	包含層					外:ヨコナデ ハケ7本/cm 内:不明瞭・指圧痕	粗	並	にぶい黃褐10YR7/4	口縁小片	
98 -04	須恵器	甕	包含層	13.0				外:ロクロナデ ロクロナデ 内:ロクロナデ	粗	良	灰黃2.5Y7/2	口縁6/12	
99 -06	須恵器	甕	包含層					外:ヘフ記号 ヘラ切り ナデ ロクロナデ 内:ロクロナデ	やや 粗	良	灰7.5Y6/1	小片	
100 -05	須恵器	杯	包含層	7.8	高台径 4.6	4.6		外:ロクロナデ ヨコナデ ロクロナデ 點付ナデ 内:ロクロナデ	粗	良	灰5Y5/1 灰褐7.5YR5/2	口縁10/12 高台光存	
101 -02	須恵器	杯	包含層	12.5	高台径 9.4	3.4		外:ロクロナデ 點付ナデ ヘラ切り ナデ 内:ロクロナデ ナデ	やや 粗	良	外:灰白2.5Y7/1 裏面:灰白10YR8/2 内:灰白10YR8/2 灰白2.5Y7/1	口縁3/12 高台4/12	
102 -01	須恵器	甕	包含層	12.0				外:ロクロナデ タタキ 内:ロクロナデ 青波滑	やや 粗	やや 良	灰白N7/0・0/0 暗白N3/0	口縁8/12	
103 -01	須恵器	甕	包含層					外:ロクロナデ 氣泡 内:ロクロナデ	粗	良	外:灰6Y6/1 内:灰白2.5Y8/2 灰黃2.5Y7/2 灰黃2.5Y6/2 形:にぶい黃褐10YR7/4	口縁1/12	
104 -04	陶器	漆工 円盤	包含層					外:素地 3.58g	素地	良	外:青色 暗緑狀10Y7/1 形:淡黃褐10YR8/3		
105 -01	鉄製品	鉄釘	包含層	残存長 7.4	幅0.7								

第11表 出土遺物觀察表⑤

### [註]

①岡田登「五 桜地区 1 土丹遺跡」(『四日市市史 第二卷 資料編考古1』、四日市市、1988年)。

②弥生土器については下記の文献に掲った。

上村安生「弥生土器編年概観」(『三重県史 資料編 考古1』、三重県、2005年)。

加納復介・石黒立人編『弥生土器の様式と編年 東海編』(木耳社、2002年)。

③古代の土器については下記の文献に掲った。

伊藤裕偉「雲出島賈遺跡における古代の土器」(伊藤裕

偉・川崎志乃『鳴抜Ⅲ』三重県埋蔵文化財センター、2001年)。

斎宮歴史博物館「斎宮跡の土器」(『斎宮跡発掘調査報告 I 内院地区的調査』、斎宮歴史博物館、2001年)。

④中世の土器については下記の文献に掲った。

伊藤裕偉「中世成立期における伊勢の土器相～雲出島賈遺跡出土資料を中心とした調査」(『鳴抜Ⅱ』、三重県埋蔵文化財センター、2000年)。

藤澤良祐「山茶鍋研究の現状と課題」(『研究紀要』第3号、三重県埋蔵文化財センター、1994年)。

## V 結語

今回の発掘調査の成果について、遺構や遺物を時代別に概観し、結語をしたい。

### 1 検出遺構の状況

#### (1) 繩文時代

晩期土器棺を確認することができた。住居跡など集落の存在を窺わせる遺構群を調査区内では検出することができなかった。調査区周辺に繩文時代の遺構群が広がる可能性があろう。当時の人々の精神世界を知る上で、大きな成果を得ることができたといえる。

#### (2) 弥生時代

中～後期の方形周溝墓を3基、土器棺墓3基を確認することができた。住居跡など集落の存在を窺わせる遺構群を調査区内では検出することができなかつたものの、遺構の検出の状況から周辺への広がりが感じられる。また、墓と考えられる遺構群の形態が違うことについては、当時の人々の葬送儀礼を考える上で、大きな成果を得ることができたのではないかだろうか。

#### (3) 飛鳥から奈良時代

調査をした部分に限定されるが、当遺跡での最盛期といえなくもない。掘立柱建物24棟、堅穴住居23棟を確認することができた。建物や堅穴住居の方角から5～6期に分別することが可能ではないかと思われる。なお、遺跡周辺は昔の朝明郡に含まれ、小牧北遺跡のある小牧町保々地区は杖部郷で、東に

約4kmのところには大金郷(現在の大鍬町・西大鍬町あたり、『和名類聚抄』より)があったのではといわれている。郷の境界は未だに定かではない。『勢陽五鉛遺響』などの文献には、大金郷に「鍛工金作部がおかれ」とあり、鐵製品の加工などが行われていたのではと以前から考えられていて、小牧北遺跡との関連を考えると興味深いものがある。小牧北遺跡を含む周辺まで大金郷に含まれている可能性もある。また、堅穴住居群からは律令期前後の時期の土器が出土しており、大金郷になる前から小鍛冶を行う集団がいたことも考えられる。このことからも掘立柱建物についても、先に述べた「鍛工金作部」に関わる施設群であった可能性があるのではないだろうか。また、堅穴住居群の平面形態を比較すると、隅丸方形であることは間違いないところであるが、SH28等のように正方形を呈するものと、SH46等のように長方形を呈しているものが確認できた。小鍛冶等の作業を行う空間を想定しているもの(長方形)とそうでないもの(正方形)に分別がなされていたのではないだろうか。

#### (4) 平安時代

建物や住居跡は確認することはできなかつたが、土師器焼成坑を4基確認することができた。時期は平安時代末期の遺物が出土していて、その時期に属するものといえよう。明和町北野遺跡で確認されたものとは、遺構の平面形や所属時期の差もあり、一見別の遺構に見えなくもない。先の時期にも述べた

ような、ものの製作等に関わる集団が当該期にも存在するのであろうか。

#### (5) 中世以降

明確な遺構は確認することができなかつた。出土遺物についてあまり多くはない。調査を行った部分だけの判断であるが、遺跡自体が衰退する時期となるのだろう。

(小瀬 学)

## 2 出土遺物の概観

出土した遺物の時期は縄文時代晚期から中世まで長い年代幅にわたっていたが、遺物のうち最も目立つのは、飛鳥時代から奈良時代にかけてのものである。遺物の残存状況はいずれの時代の土器も良くない。これは台地上という遺跡の立地によるものであろう。以下時代毎に記述する。

#### (1) 縄文時代

縄文時代に属する遺物は、土器棺として使用されていたと考えられる深鉢1点、石鏃2点であった。この深鉢は馬見塚式に属すると考えられ、縄文晚期後半に属するものである。調査区内だけの傾向であるが、縄文晚期に属する遺物は少なく、それに継続する弥生時代前期の遺物は確認することはできなかつた。こうしたことから、周辺に縄文時代の集落等が広がる可能性はあるが、あまり濃密ではないようである。

#### (2) 弥生時代

後期に属すると考えられる弥生土器の出土を確認することができた。これらについては、ほとんどが方形周溝墓の周溝から出土しているものである。4のように底部に穿孔が施される土器が認められることも、これら溝が方形周溝墓の周溝であることの傍証となろう。土器の器形は2のように胴部が強く張り出す中期的な要素を持つものもあるが、全体としては後期の範疇におさまるものと思われる。

#### (3) 飛鳥時代から奈良時代

出土量が最も多い時期にあたる。その中でも特に飛鳥時代後半から奈良時代前半にかけてのものが多いようである。土師器は杯・甕が多く、瓶・高杯も見られる。須恵器は杯身・杯蓋が多く、若干高杯や甕なども見られる。これら土師器・須恵器のほとんどは掘立柱建物や堅穴住居などの遺構に伴って出土

しており、これら遺構の時間もまたこの時期と考えて良いだろう。このほか土鍤が数点出土しており、河川での漁捞も想定できる。また砥石と考えられる石製品も出土している。このような遺物のあり方から考えると、この時期の集落は遺構数から、長期間にわたって継続している可能性がある。

#### (4) 平安時代以降

遺物は飛鳥時代から奈良時代にかけての一群のあと平安時代末期まで認められない。集落は一度奈良時代の終わりまでに、廃絶あるいは周辺への移動を考えられる。平安時代末期の遺物としては、ロクロ土師器皿・椀、陶器山茶碗を確認することができた。但し、遺物の出土量は前代と比較して、相対的に多くないことから、この時期の集落についても、中心は当遺跡ではなく周辺に展開していたことが想定できよう。

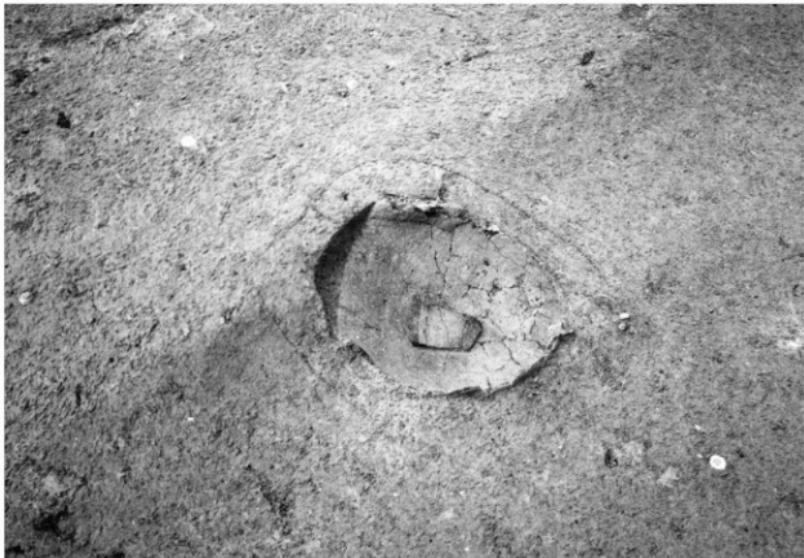
(伊藤文彦)

#### [註]

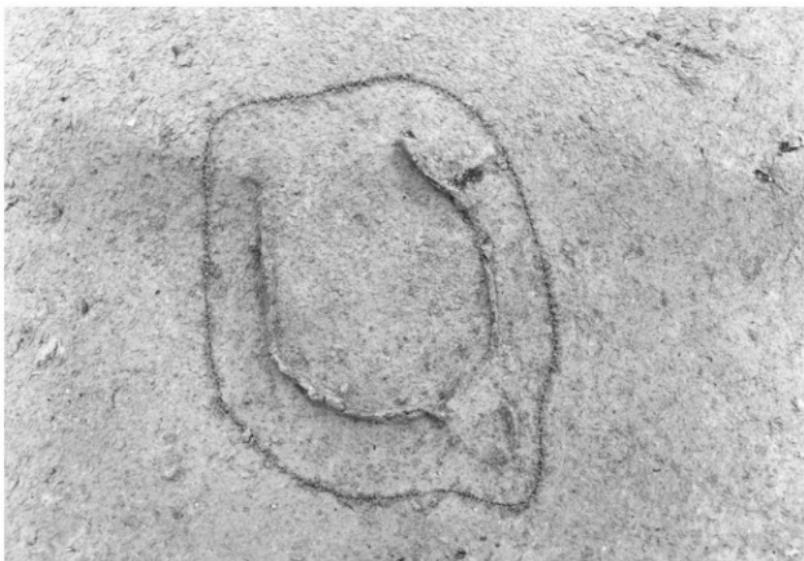
- ①『四日市市史 第二巻 史料編 考古』(四日市市、1988年)と『四日市市史 第三巻 史料編 考古II』(四日市市、1993年)に掲った。
- 『四日市市史』(四日市市、1988年)。
- ②『北野遺跡(第2・3・4次調査)発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター、1995年)に詳しい。

# 写 真 図 版





SX5 遺物出土状況（南から）



SX5 遺物出土状況（南東から）

写真図版 2



SX 1 遺物出土状況（西から）



SX 1 遺物出土状況（北から）



SX127土器棺（西から）



SX127遺物出土状況（南から）

写真図版 4



SX135遺物出土状況（東から）



SX2 完握状況（北から）



SX 2 遺物出土状況（東から）



SX 2 遺物出土状況（北から）

写真図版 6



SX133完掘状況（西から）



SX2・129・133完掘状況（北から）



SB36完掘状況（北東から）



SB41完掘状況（南東から）

写真図版 8



SB95・99完掘状況（南西から）



SB95・99完掘状況（南東から）



SB101完掘状況（西から）

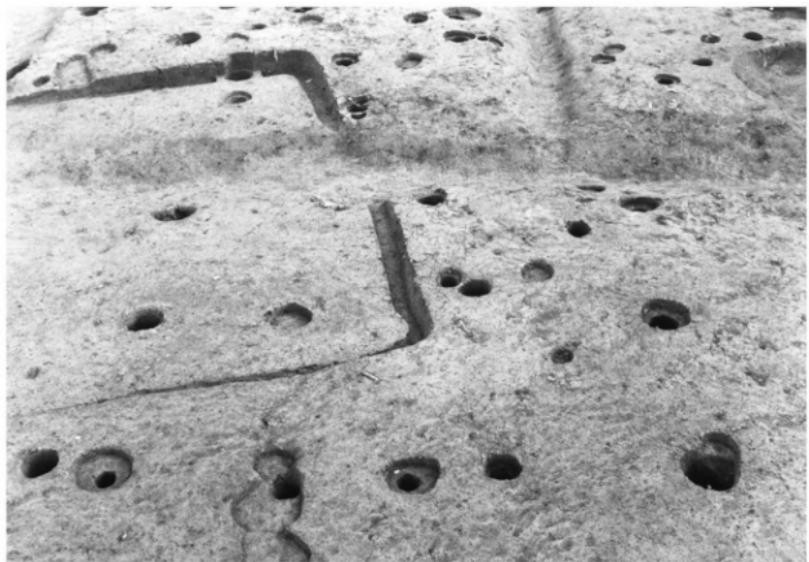


SB102完掘状況（南から）

写真図版10



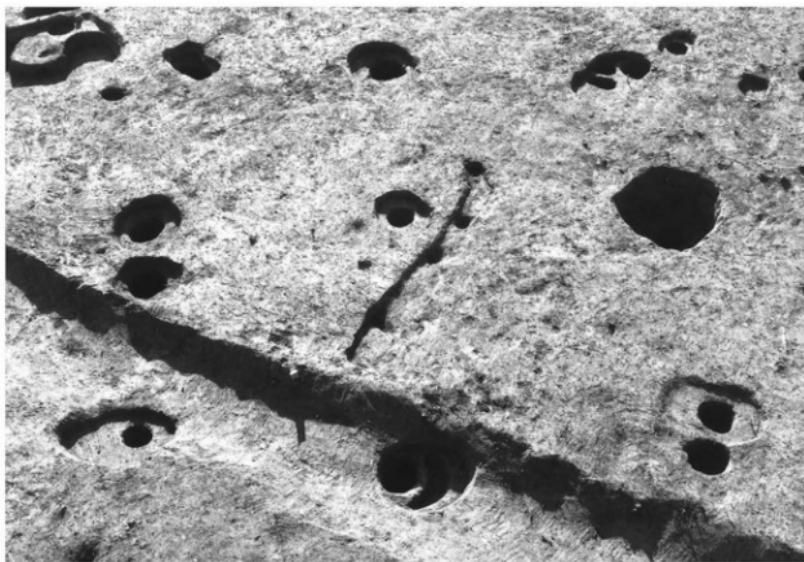
SB103完掘状況（南から）



SB104完掘状況（西から）



SB105完掘状況（西から）



SB106完掘状況（北から）

写真図版12



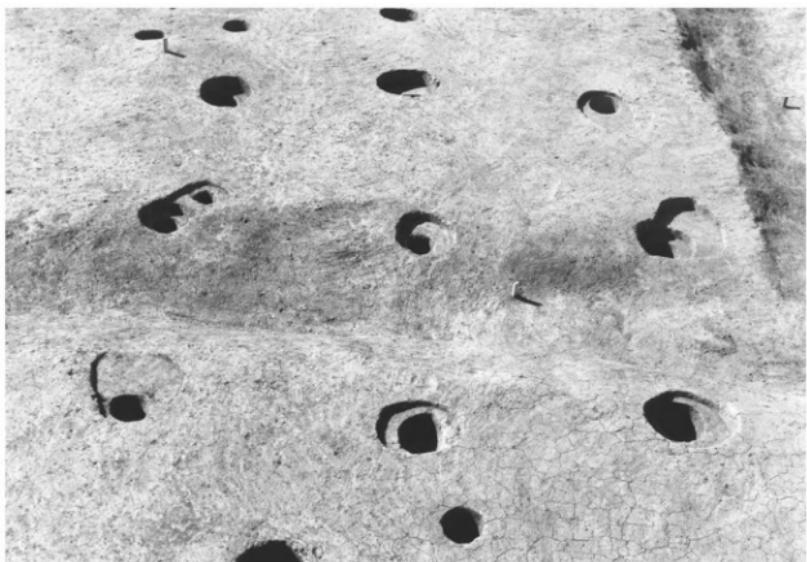
SB108完掘状況（北から）



SB109完掘状況（西から）



SB110完掘状況（北西から）

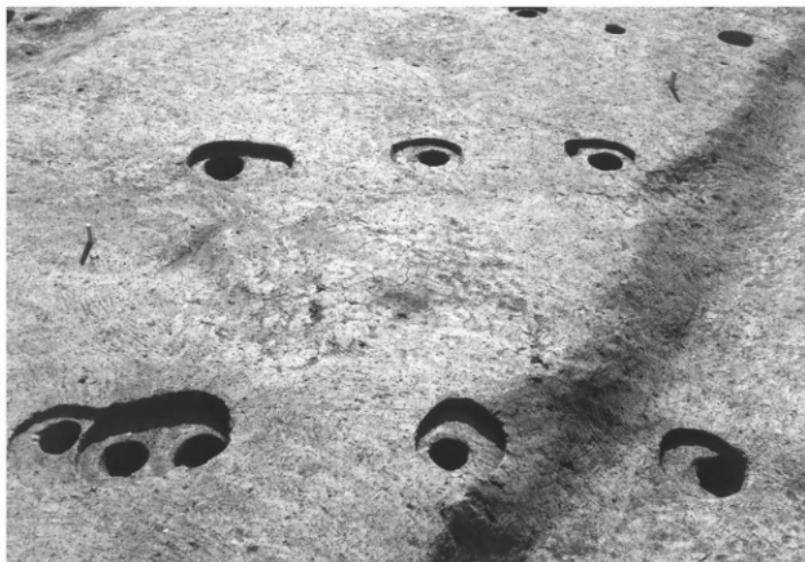


SB111完掘状況（東から）

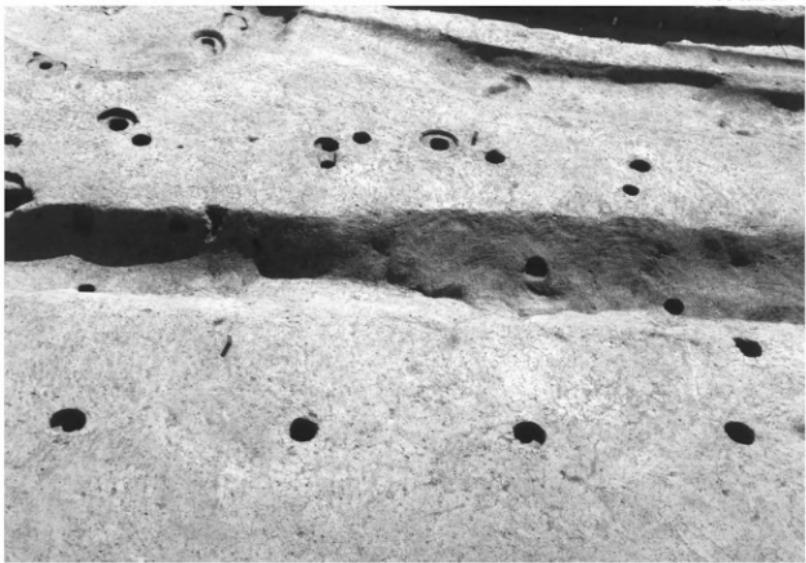
写真図版14



SB113完掘状況（北から）



SB114完掘状況（北から）



SB119完掘状況（北から）

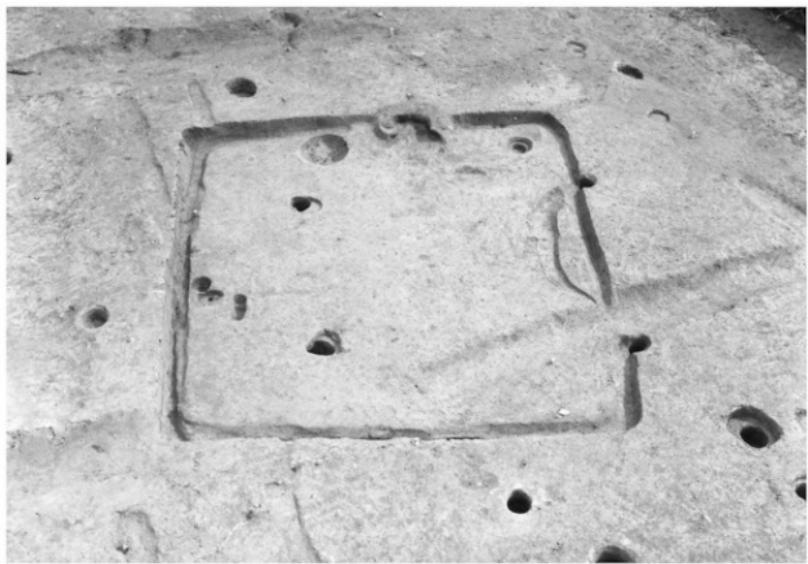


SB125完掘状況（南東から）

写真図版16



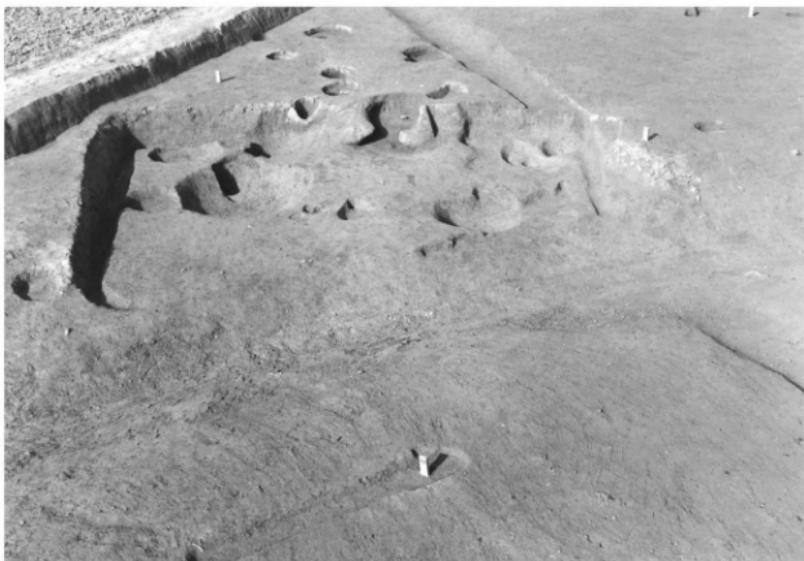
SH25・26・42完掘状況（南東から）



SH28完掘状況（南西から）



SH28カマド跡（南西から）

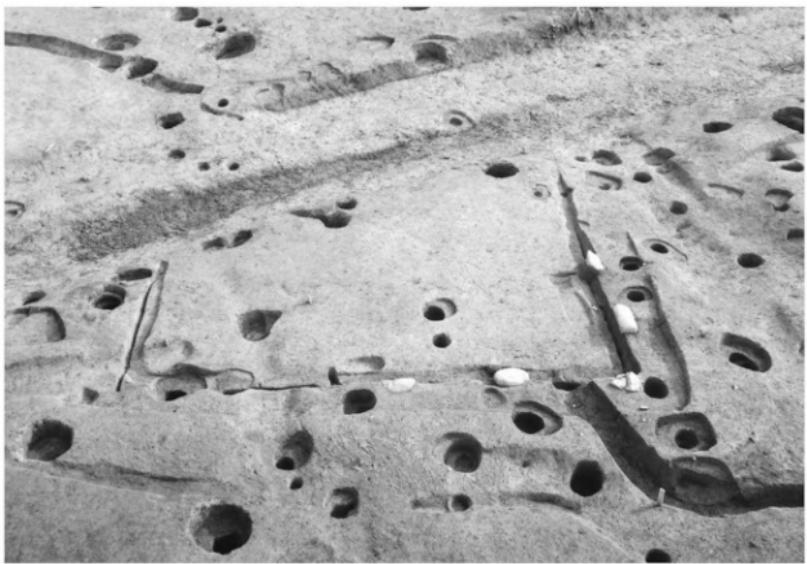


SH32完掘状況（南東から）

写真図版18



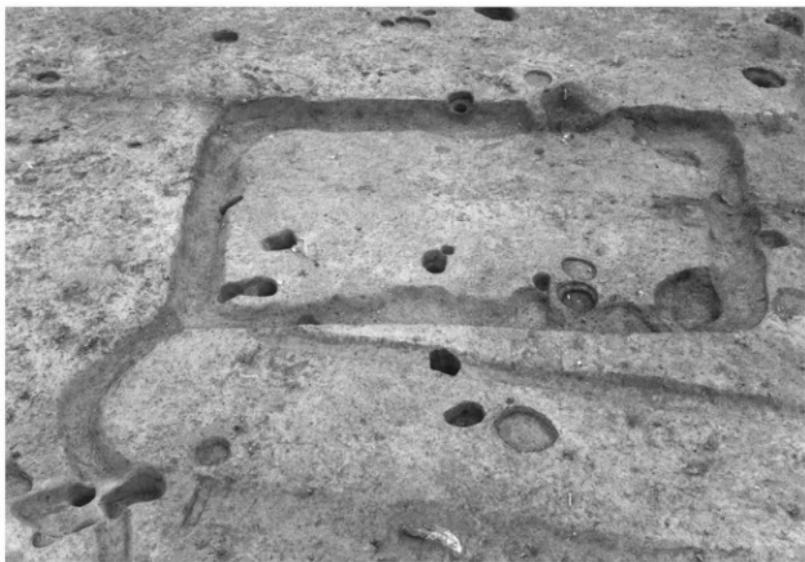
SH32カマド跡（南から）



SH35完掘状況（北西から）

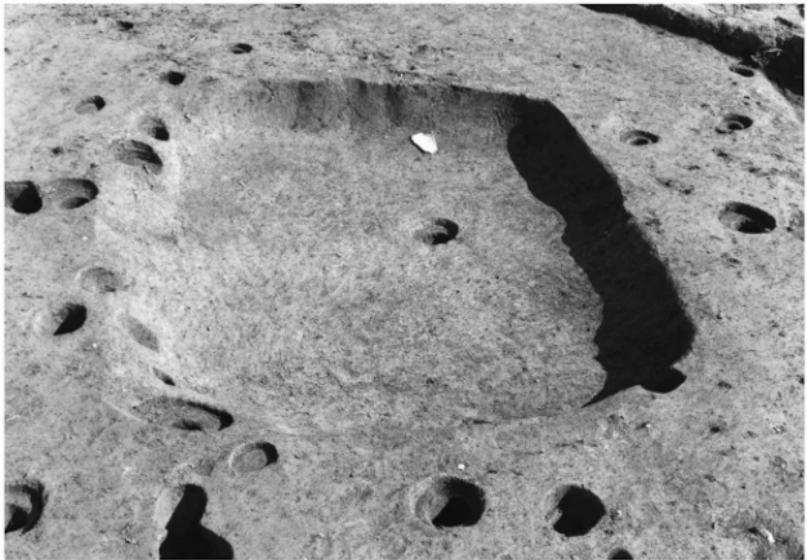


SH43・SK44完掘状況（西から）

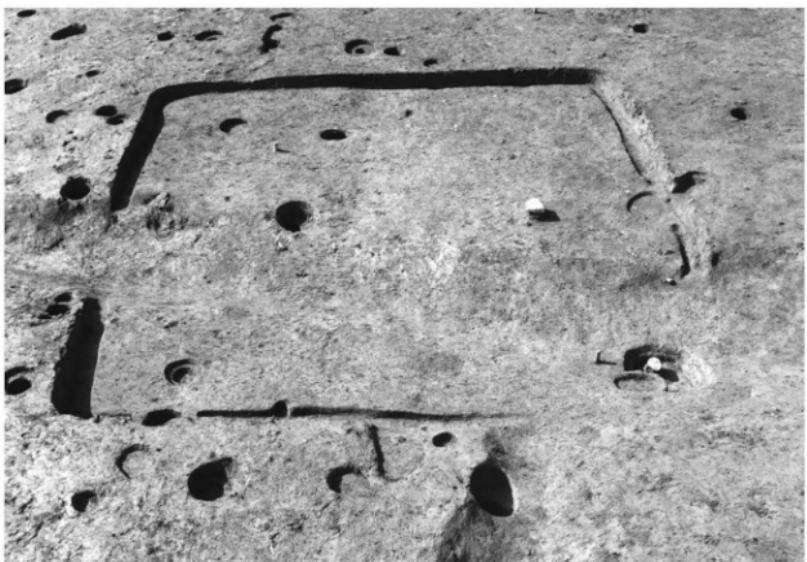


SH46完掘状況（東から）

写真図版20



SH47完掘状況（西から）



SH64完掘状況（北東から）



SH85完掘状況（北から）



SH91遺物出土状況（東から）

写真図版22



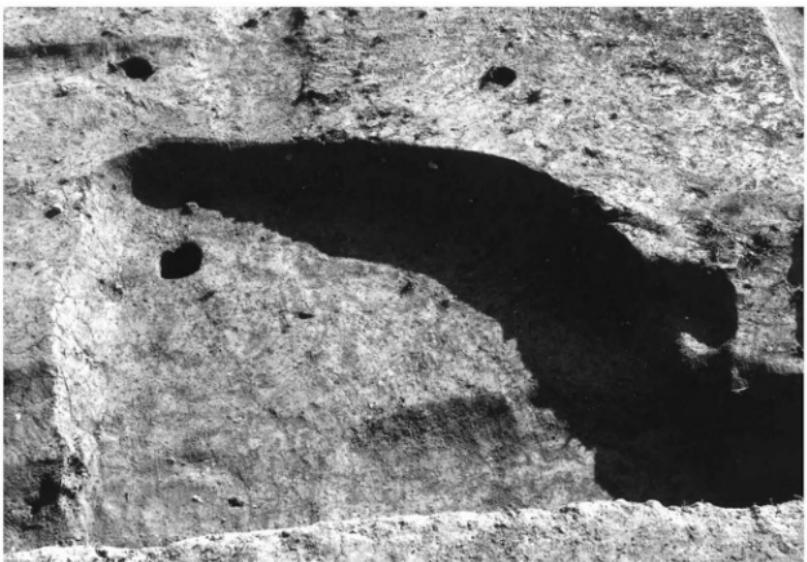
SH107完掘状況（西から）



SH136完掘状況（南から）



SK137・139・140完掘状況（南西から）

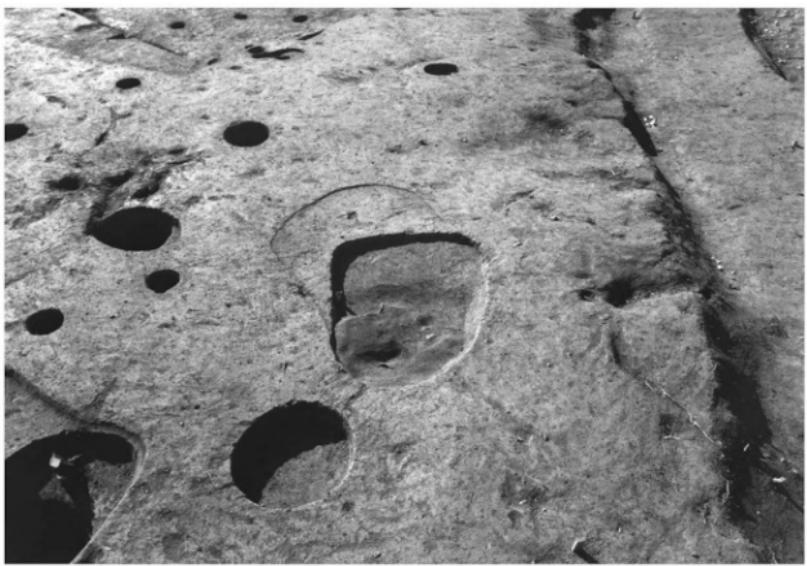


SK88完掘状況（北から）

写真図版24



SK96遺物出土状況（南東から）



SK134完掘状況（北から）

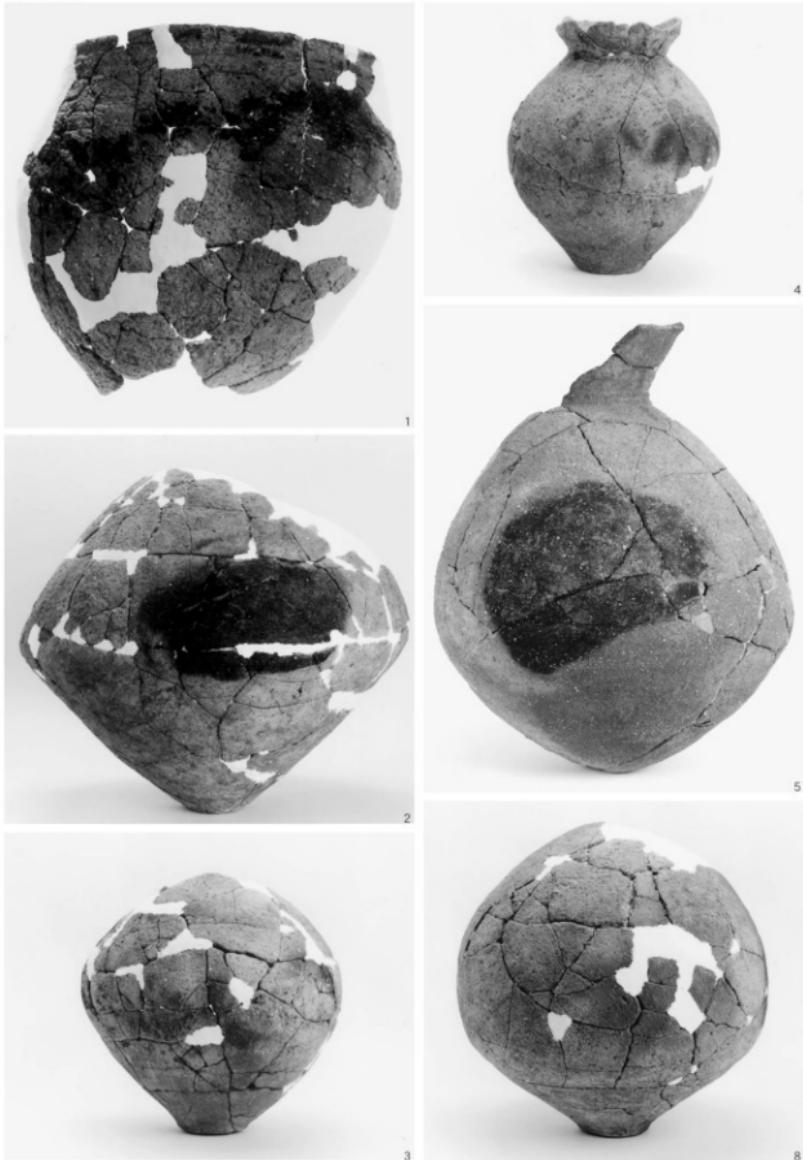


SK15遺物出土状況（南から）

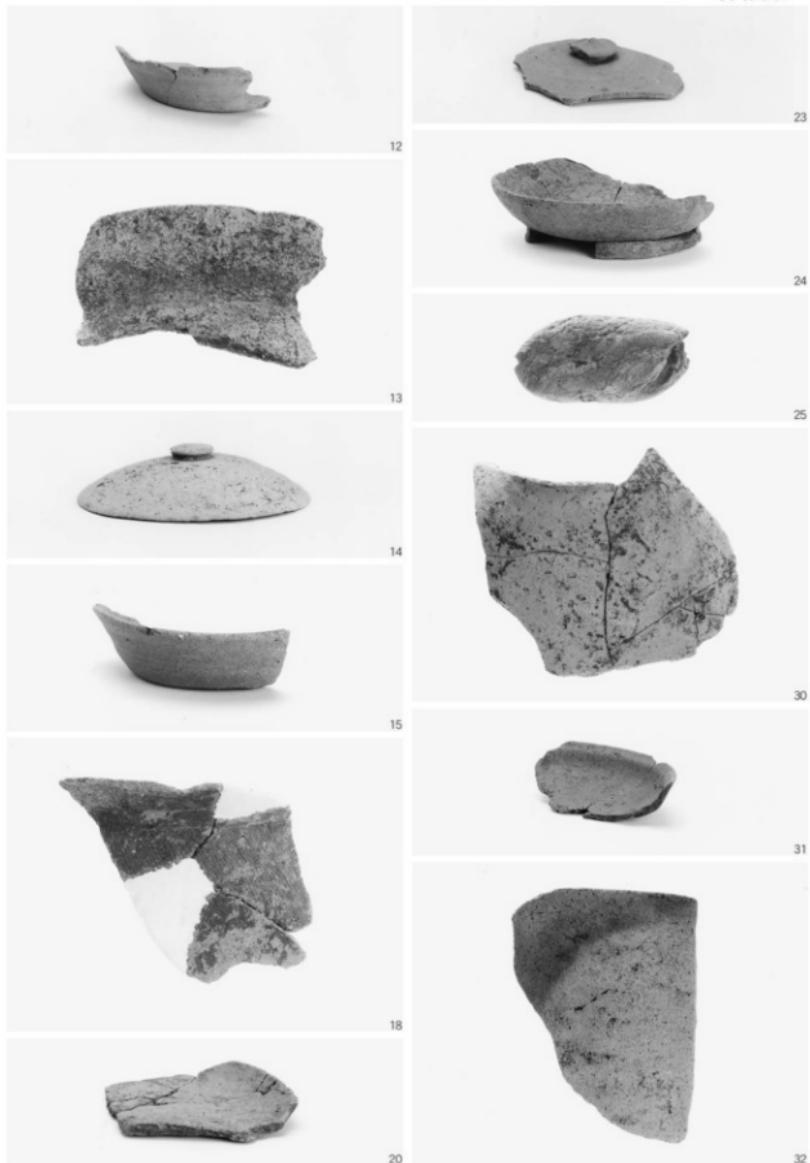


SK34遺物出土状況（西から）

写真図版26

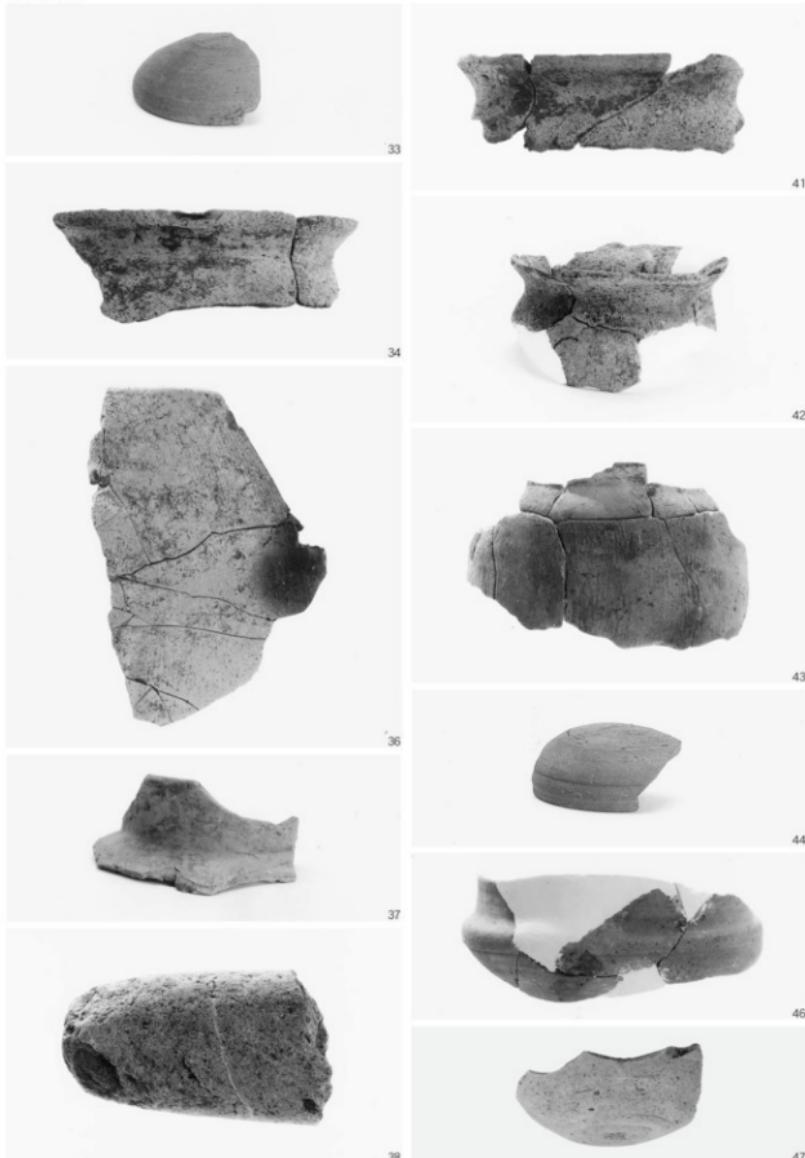


遺物写真①



遺物写真②

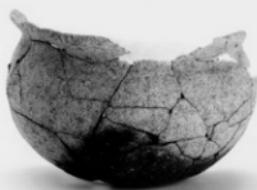
写真図版28



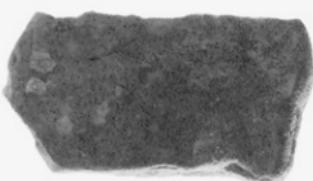
遺物写真③



48



58



50



60



52



62



53



66



56



69



57



72

遺物写真④

写真図版30



79



90



89



100



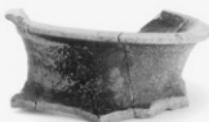
85



101



92



102

遺物写真⑤

## 報 告 書 抄 錄

---

三重県埋蔵文化財調査報告284

小牧北遺跡発掘調査報告

2007(平成19)年 3月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター

印刷 株式会社アイブレーン

---







